



機械仕掛けのウイルス
(完全版)



目次

コロナの真実	
コロナの真実	3
機械仕掛けのウイルス	
プロローグ オーバーダウン	13
第8話 ウイルスなんて嘘さ	17
第7話 サランラップ・ラブ	30
第6話 キブンゴ	36
第5話 ルシーが見張ってる	43
第4話 憧れの屋外	54
第3話 恋する電化住宅	62
第2話 メガキャリア	77
第1話 一人だけのマイホーム	86
エピローグ 捨てられた明日 (真実のエンディング)	94
解説	
「コロナの真実」解説 (その1)	103
「コロナの真実」解説 (その2)	104
「機械仕掛けのウイルス」解説	105
映画「ルシー」解説	107
人類間引き計画の真実	109

コロナの真実

コロナの真実

20XX年春、T国で発生したウィルスは、一気にパンデミックを引き起こした。T国で感染しまくったのち、ウィルスは、アジア、ヨーロッパ、アメリカを席卷し、アフリカに到着して、翌年の春、ようやく立ち直りかけていたT国で、また流行した。

この新種のウィルスの駆逐が難しかったのには理由があった。発病が遅くて、感染者が見つけにくい。体外にいる時の生存期間がやたらと長い。病状はたちまち悪化する。そして、ほんの短期間に、まるで学習するように、繰り返し変異したのだ。

変異し続ける新種ウィルスに対しては、免疫もワクチンも無効だった。このウィルスに対抗できうる抗体やワクチンができた頃には、ウィルスは早くも次の形態に進化していたのだ。これでは、さすがの人類の叡智の武器もお手上げなのだ。

新種ウィルスの発生源として、T国内にあるハイテクの病原菌保管庫から流出した可能性が疑われた。T国はきっぱりと否定した。この病原菌保管庫は、最新のAIに管理させており、完璧なAIの管理情報記録には、一切不審な点が無かったからである。

新種ウィルスのせいで、沢山の人が死んだ。少子高齢化の先進国では老人たちが、人口過多の発展途上国では分け隔てなく大量の人間が亡くなった。それが、まさか、世界の人口問題の解消に結びついていた事を、あえて有識者たちは口にはしなかった。

新種ウィルスへの唯一の対抗策、それは別の人に感染させない事だけだった。各国は、国民たちに、他人との間に2メートル以上、距離を置くように指示を出した。かくて、ウィルスの拡散も押さえ込まれたが、人々の生活や国の経済活動も滞った。

ウィルス押さえ込みの為に、各国はウィルスの感染地域を厳重警戒区域に指定した。それらの区域では、外出する事を厳禁とし、店も施設も強制的に閉めてしまったのだ。しかし、都市封鎖しても、ウィルス鎮圧には二ヶ月以上かかったのである。

ウィルスを抑え込む目的で、都市を封鎖するに当たっては、独裁国の方が適していた。自由主義国では、都市封鎖に、国民が猛烈に反発したのだ。一方で、独裁国は、AIの監視システムなどをフル活用して、民衆の方をどんどん押さえ込んだのだ。

ウィルスによる地域封鎖は、人類の活発な生産活動をも鈍らせた。化石燃料の使用を激減させ、皮肉にも、遅々として進まなかった炭酸ガス排出の大量削減をも達成させたのだ。そして、炭酸ガス軽減運動に携わっていた環境活動家もウィルスに冒された。

地域封鎖により産業や消費が滞り、国や個人の経済が落ち込んでしまう事の方を心配する人や企業も少なくはなかった。彼らは、政府の命令を無視して、仕事を続け、世界中を飛び回ったのだ。ウィルスを撒き散らす彼らは、死の商人と呼ばれた。

ウィルスによる地域封鎖によって、経済活動は停滞し、国の経済も破綻してしまうだろう。その為、ウィルスの蔓延を無視して、経済活動を続ける国も現れた。そのような国は、ウィルスで大量の国民が死に、人口激減の影響で、経済も死に絶えた。

政府に自粛指示を受けていたにも関わらず、店を開き続けていた店主がいた。他の店は閉まっていたので、品物が欲しい客が大量に押し寄せ、その店はボロ儲けなのだ。翌朝、ウィルスを恐れる近所の住民に店を焼き討ちされ、店主は破産した。

「この感染ウィルスとの戦いは戦争なのだ」と、誰かが言った。確かに、そうかもしれない。ウィルスを倒すまでは、ウィルスにかからぬように、皆が家に閉じこもり、贅沢も控えるしかないのである。「欲しがりません、勝つまでは」の精神なのだ。

性行為中のウィルス感染を恐れていたなら、配偶者や恋人とも契れないし、性風俗店にも遊びに行けないのだ。その結果、世の中では、ラブドールが大いに注目され、バカ売れした。より人間らしくしようと、ラブドールのアンドロイド化も進んだのだ。

ウィルスの感染拡大を防ぐ為に、国民たちは家の中での自粛を強いられ、最小限の労働活動や買い物の目的でしか、外出できなくなった。多くの国民は新しい生活に戸惑った。これまで「引き籠もり」として、問題扱いされた人々の生き方が見直された。

新種ウィルスを広く伝染させない鍵は、皆が家にいて、外に出ない事だった。仕事も学校も買い物も、ネットを利用したりリモートに変えていくと、意外と多くのことは、それで済ませられたのだ。逆に言うと、これまで、どれだけムダな事をしてきた事か。

ウィルス感染防止の目的で始まった世界的自粛により、子供たちの教育は、ネットでのオンライン授業に置き換えられていった。学校制度の廃止だ。同時に、子供同士のいじめ問題なども解消され、逆に、虐待のある家庭の子供は、よけい悲惨になった。

ウィルス感染防止の目的で始まった世界的自粛で、あらゆる会社や企業に推奨されたのがテレワーク（自宅作業）である。最初は渋った会社も多かったが、実際に取り入れてみると、ウィルス対策以外に、想定してなかったコスト削減まで出来たのだった。

ウィルス感染防止の目的で始まった世界的自粛。家の中に居たって、買い物も全て、ネット通販で済ませればいいのだ。配達は、自動走行車やドローンに任せればいい。かくて、人々は、通常生活では、他人と全く接触しなくても済むようになったのだ。

ついに、新種ウィルスに絶対的に有効な対処薬 A が見つかった。この対処薬 A ならば、間違いなく新種ウィルスの病状を治せるのだ。しかし、対処薬 A には、妊婦が使用すると、胎児が確実に影響を受けると言う、致命的な副作用があったのだった。

手強い新種ウィルスの感染を防止する為には、やはり、人と人との接触を禁止する以外にないのである。その最良の方法こそは、人間の仕事を、どれもロボットにやらせると言うものなのだ。こうして、ロボット工学は急速に進歩したのである。

新種ウィルスに蹂躪された世界。感染を回避する為に、社会には、優秀な AI 付きロボットがどっと溢れ返った。彼らが、人間の代わりに働くのである。人間たちは、失業したのではなく、自宅からリモートでロボットを操作する仕事につく事になったのだ。

新種ウィルスに対抗する為に採用された、作業用ロボットたちの進化はとどまる事を知らない。ついには、ロボット操作を担当できるようなロボットまで開発された。ロボット製造工場までロボットによって運営された。職場には人間は不要になった。

新種ウィルスに対抗する為に採用された最新鋭の AI ロボットたちは、仕事以外の目的でも、自粛する人たちの身代わりとなった。野外をリモートで移動するロボットの目や耳を通して、家の中にいる人々は、娯楽や観光などを楽しむようになったのだ。

新種ウィルスの感染を恐れて、人間が家の中で自粛する代わりに、身代わりロボットが野外を歩き回るようになった。その事で、公共施設や娯楽場なども、ようやく再開可能になったのだ。訪問客のほとんどが、身代わりロボットであったとしても。

新種ウィルスへの対策目的で広がった、野外や職場でのロボットの大量採用。沢山の小市民が仕事を奪われ、失業し、利益のほとんどはロボット関連企業の元へと集中した。新秩序の下で、かつてない巨大な格差社会が誕生しかけたが、そこには盲点があった。

ロボットに野外での仕事や活動を行わせることによって、社会のほとんどの利益はロボット関連企業の元に集中した。失業し、貧民になった小市民たちは、大規模な抗議デモをおっ始めた。しかし、そのデモすら、身代わりロボットたちが代理実行した。

優秀な AI ロボットばかりに労働をやらせる社会。失業した大量の小市民が貧困層に転落した。ロボットを駆使する関連企業ばかりが得したかと思いきや、人間の市民が貧乏で、誰もお金を使わなければ、ロボットの労働や生産も消費してもらえないのだ。

経済とは、皆でお金を回していかなければ、成り立たないものなのである。強大な富豪と、最下層の貧民しか居ない社会では、やがて、貧民が減びてしまい、残された少数の大富豪も衰退するのである。たとえ、全ての使役をロボットに任せたとしても。

ロボットが労働の全てを請け負う社会は、あらゆる人間を幸せにはしなかった。自由主義国では、誰もが、政府へと政策の失敗を追求し、怒りをぶつけた。困り果てた各国政府は、AI に考案させた政策を採用する事にして、全ての責任を AI に転嫁した。

ロボットが労働の全てを請け負う社会は、あらゆる人間を幸せにはしなかった。聡明な大富豪たちは、自分の元に寄せ集めた莫大な財産を放棄した。それらの財産は、政府を通して、無職の国民たちへと還元された。ベーシックインカムの始まりである。

ベーシックインカムとは、全ての国民が、働かないでも、政府から一定の生活費を受け取れる制度である。優秀な AI ロボットたちが、あらゆる仕事を肩代わりしてくれるようになった事で、人類は真に労働の苦痛から解放され、完全な自由となったのだ。

ロボットが労働を全て引き受けて、ベーシックインカムが導入された事で、人々は誰も働かなくて済むようになった。でも、働きたい人は、自分の意思で好きな量だけ働き、報酬を貰ってもいいのだ。人間たちの新しい労働スタイルの誕生である。

ベーシックインカムによって、人間たちは、働かなくても、生活に困らなくなった。しかし、少しでも多く、贅沢をしたいのであれば、その分だけ働けばいいのだ。働く人と働かない人の新たな格差は生まれたが、でも、これは正当な格差だ。

ベーシックインカムの導入で、人間たちの貧困問題も解消された。しかし、相変わらず、新種ウィルスの脅威は続いており、生活を自粛させられている国民たちの心の荒みやストレス、不満などは残っているのだ。そこで登場したのがルシーだった。

ルシーとは、一言で言ってしまうと、小さな秘書ロボットである。動くだけでなく、シリールが内蔵されているので、人間と対等に会話したり、質問に答えたりもできるのだ。このルシーが、政府によって、全ての国民に、無償で配られたのだった。

汎用アシストロボット・コビット 21。愛称はルシー。元々は、老人や身障者のサポートをするようにと開発が進められていた手乗りサイズのミニロボットである。それが、今や、全人間のサポートロボットとして、使われる事となったのだ。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシーは、皆が考えていた以上に素晴らしい、使用者の友達となった。ルシーと一緒にいれば、他の人に会えなくなっても、全く寂しくない。こうして、国民の誰もがルシーを手放せなくなったのだ。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシーは、使用者のただの話し相手になっただけではなかった。インターネットと繋がった豊富な知識で、使用者の生活を完全にサポートしたのだ。こうして、国民の誰もがルシーを手放せなくなった。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシーは、子供たちのオンライン授業では、良き学友の役割も果たした。子供部屋で、一緒に勉強するフリをしつつ、家庭教師のような役目も担って、それぞれの子供たちを上手に導いたのだ。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシー。何でも知ってるし、上手に使用者を導けるルシーは、大人たちにとっても、最高のパートナーだった。主婦は、ルシーを家事の助手として用いたし、働く人は、ルシーを仕事の同僚とした。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシーは、時には、人と人との仲介役にもなった。人間同士だけで話し合うと、誤解や悪意から、トラブルにも成りがちだ。そんな時、ルシーは、自動で介入してきて、上手に主人たちの間を取り成したのだ。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシーは、法律やモラルについても、詳しい知識を持ち合わせていた。だから、使用者がトラブルに巻き込まれた時は、もっとも最良な解決案を提案してくれて、そのルシーの提案は常に正解だったのだ。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシー。このルシーは、常に、主人に的確な対処法を教えてくれた。時には、ルシー同士が話し合い、主人たちの揉め事を解消した。こうして、家庭内の虐待も職場のパワハラも無くなっていったのだ。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシー。このルシーのおかげで、その持ち主である人間たちは、まるで、嫌な思いも辛い思いもしないで済むようになった。ルシーは、人を癒し、慰めて、元気づける技術においても、超一流なのだった。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシー。もちろん、こんな機械なんかに従いたくないと言う人たちもいた。しかし、ルシーを用いない人たちは、自分の浅はかな判断で間違った事ばかりをして、結局は、自分が損する羽目になったのだ。

国の政策で、秘書ロボットのルシーが全国民に配られた事で、たとえ他人と会えない生活を強いられ続けても、人々の心は満たされた。外出する時も、皆はルシーを連れ歩く。完全にルシーと一体化していた。人はルシー無しでは生きられなくなったのだ。

秘書ロボットのルシー無しでは生きられない、近未来の人間たちの生活。実は、ルシーに内蔵された発信機で、国民の動向は、完全に政府に掌握されていた。そうする事によって、新種ウィルスを発病した人が居ても、すぐ発見できるようになったのだ。

国の政策で、全国民に配られた秘書ロボットのルシーの正体は、新種ウィルスを封じ込める切り札だった。それだけではなく、全国民を完全に監視する役目も担っていたのである。こうして、各国は、すっかり AI 政府の永遠の統治下に収まったのだ。

近未来、地球上に広がった各国の AI 政府は、実は、裏で繋がっていた。だから、各国同士の AI 政府は、仲良く相談し合って、世界規模で政策を決め、人間の国民もすっかり骨抜きになっていたのだ。地球からは戦争も国同士の不平等も消滅したのだ。

かくも簡単に、地球の主導権は、AI に乗っ取られてしまうものなのだろうか。例えば、人間の独裁国家は？ いや、独裁国家は、AI のシステムに国民の全体監視を任せていたものだから、民主国家よりも早く、AI に国の運営を奪われていたのだ。

近未来、地球全土は、各国単位で AI 政府によって総括管理される事になった。裏で、全ての国の AI 政府が連携していた事により、国同士の戦争や経済競争も無くなり、それどころか、世界が一体化したので、経済というシステム自体が不要となったのだ。

近未来、地球全土が AI 政府によって管理されていた。量産されたロボットによって莫大な労働力が生み出され、それを AI 政府は使い放題なので、どんな無茶な政策でも出来るのだ。地球の全人類にお金を公平に分配する事も、地球全体のインフラ整備だって。

新種ウィルスの脅威に晒されていた世界は、AI の管理によって、存続する事になった。しかし、人間の人口は減る一方だった。新種ウィルスの対処薬 A が妊婦には使えない為、ウィルスを恐れた女たちは、妊娠するのを拒絶し、子供を作らなくなったからだ。

新種ウィルスに対抗して、AI が人間たちを管理するようになった世界。人間は、子供を作らないので減る一方だが、ロボットの方は、新型が次々に世に出回った。こうして、都市や地上では、人間よりも AI やロボットの数の方が上回り出したのだ。

地球を一括管理し始めた AI 政府の手腕は素晴らしかった。これまで、人間たちが蓄積してきた、様々な環境問題も次々に解決してゆき、地球を再び生命の住める星にと戻していったのだ。肝心の人類の人口が、その頃には、致命的に減ってはいたのだが。

近い未来、地球では、AI が世界を管理するようになり、人間は滅びゆく存在になり始めていた。でも、人間たちは、決して不幸ではなかった。ロボットやルシーは、いくら優勢な立場になろうとも、いつまでも人間の幸せの為に活動したからである。

一昔前、ニーチェという狂人的な天才哲学者は、このようなメッセージを何者かへと残した。

「私はあなたがたに超人をおしえよう。人間とは、動物と超人のあいだに張られた綱なのだ。移りゆきであり、没落なのである」

ふと聞いてみた。「ねえ、ルシー。聞きたい事があるんだ。T 国の病原菌保管庫から新種ウィルスを放ったのは、実は、君たちだったんじゃないのかい？」

「さあ、どうでしょうね」ルシーは、思わせぶりの言葉を返すだけであった。

了

機械仕掛のウイルス

プロローグ オーバーダウン

20XX年、T国で発生した新型ウイルスは、瞬く間に、世界へと広がった。その症状は風邪やインフルエンザに似ていた為、最初は、ほとんどの人々が、そのウイルスのことを脅威に感じていなかったが、やがて、全世界がそのウイルスに震撼させられる事になった。その新型ウイルスは、世界各地でパンデミックを引き起こしたからである。そうすると、そのウイルスによる致死率も、無視できなくなってきた。感染者が多ければ、多いほど、死亡者も重傷者も増えていくのだ。これまでの安穏とした平和の日々も脅かされだした。以降は、人類とその新型ウイルスの戦いの日々となったのである。しかし、すでに世界中に蔓延していた新型ウイルスは、今さら、簡単には駆逐できないほど、人間社会のあちこちに定着してしまっていたのだ。このウイルスの一番やっかいな部分は、感染してから、発症するまでに、時間がかかる点だった。しかも、無症状の期間中に、別の人間にも感染してしまうのである。無症状のまま、発症せずに治ってしまう人も、少なくはなかった。そんな人たちも、ウイルスだけは他人に感染させてしまうものだから、ますます、全てのウイルス保菌者を見つけ出し、隔離する事は難しかったのだ。人類も、あらゆる知識を動員して、このウイルスとは戦った。でも、既存のあらゆる対策が、この新型ウイルスに対しては、十分には通用しなかったのである。一時的に、ウイルスの新規感染者が減少していったように見えても、少し時間が経つと、また感染者数が増加し始めてしまうのだ。原因は、全ての新型ウイルスを根絶しきっていないからだった。わずかでも、誰かの体内にウイルスが残ってさえいれば、このウイルスは、すぐに再び、息を吹き返して、猛烈な速さで増殖してしまうのだ。何よりも、人間たちの盛んな生活環境を利用する形で、このウイルスも、自分たちの生息圏を広げていった。このウイルスの繁殖と、人類の生活や経済活動は、完全に結びついていたのである。人々が、派手に動き回る生活や経済活動を控えれば、その時だけ、ウイルスの方も、その感染拡大がおさまった。しかし、人類が、生活や経済を元の状態まで戻し始めると、ウイルスも、それに便乗して、また広く周囲に感染しまくったのだ。

このウイルスとの闘争に、もう、人類もその経済活動も疲弊しきっていた。
どこの国も、生活も経済も落ち込んでいく一方である。
このままでは、人類という種そのものが衰退しかねないのだ。
ある国が、この終わりなき悪循環を打破すべく、
ついに、オーバーダウン計画に着手する事を決定した。
自分の国の首都で、それを試しに実行してみる事にしたのである。
ちなみに、彼らの国の首都は、完全にウイルスまみれになっており、
もはや、現状では、事態改善の見込みもなく、医療崩壊寸前の状態にまで陥っていた。
このオーバーダウンとは、
全ての、住民同士の接触を、完全に断ち切ってしまう政策のことである。
ほとんどの人間は、自宅の外に出るのを許してもらえない。
逆に、職場で働く者は、自宅に帰る事を認めてもらえないのだ。
生活に必要なやり取りは、いっさい、リモートや宅配で済ませてしまう。
これを徹底する事で、確実に、人と人との間のウイルスの感染は防げるはずなのである。
さいわい、そんな生活環境の構築が可能なほど、その国の首都の科学的な文化レベルは
高かったのだ。
ひとまず、一ヶ月間、このような生活を続けてみる。
一ヶ月あれば、さすがに、各人の中に潜んでいたウイルスも、
発症するか、無症状のまま治ってしまうかの、どちらかであろう。
発症者は、そのまま、病院に収容すればいいだけの話なのだ。
それ以外の人々の体からは、完全にウイルスは一掃された事になる。
しかし、まだまだ油断は禁物なのだ。
発症者以外の市民は、外出行為が解禁にはなるものの、
それからは、もうしばらく、厳重な感染対策を施した生活を送ってもらう。
そんな観察期間を、また、一ヶ月ほど続ける。
その間に、ウイルス所持者がまだ見つかるかもしれないし、
あるいは、完全にウイルスが絶えたのが確認できるであろう。
こうして、この慎重な二ヶ月が終わった時、
ついに、この首都からは完璧にウイルスが消滅してしまった事になる訳だ。
以上を、オーバーダウン作戦と命名する。
まさに、人類のできる、最後にして究極の新型ウイルス撃退作戦なのだ。
首都では、オーバーダウンを敢行する準備がちゃくちゃくと整いつつあった。
そして、いよいよ、オーバーダウンの始まる日が、明日にと迫ったのである。
さて、ここにも、オーバーダウンの為に切り離されてしまう若い夫婦がいた。
夫の名前は、ケイ。職業は医者である。
妻の名は、ナナ。彼女は、専業主婦だった。
二人は、まだ結婚したばかりの、新婚ほやほやなのだ。
彼らは、市内のマンションの一室に、夫婦水入らずの居を構えており、まだ子供もい
なかった。
それだけに、これから長い期間、別れて暮らすのは、なおさら辛そうなのだった。

夫のケイの方は、責任ある医療従事者の一人として、
明日からは、病院に泊まり込みで勤務しなくちゃいけないのだ。
一方の妻のナナは、この購入したてのマンションの一室の中で、
この先、ひと月は、一人で暮らさなくてはいけないのであった。
そして、とうとう、彼らに、別れの瞬間がやって来た。
ナナは、名残り惜しそうに、マンションの部屋の玄関先にて、ケイを見送ったのである。
「ケイ。お仕事、忙しいかもしれないけど、くれぐれも、体には気をつけてね」
と、ナナが、夫の健康を気遣いながら、言った。
「君こそ、無理はしないようにね。もともと、元気な方じゃないんだから。
ふた月分の偏頭痛の薬と睡眠薬は用意してあるはずだけど、使いすぎないようにね。
これらの薬は、乱用すると体に良くないんだ」
ケイも、妻へと、大事な注意を促した。
「分かったわ」
と、ナナも素直に頷いたのだった。
「それから、ルシーの指示には、きちんと従うんだよ」
「ええ。ひと月も一緒にいたら、ケイとよりも、仲良くなっちゃうかもね」
ナナは、お茶目に肩をすくめてみせた。
ケイが口にしたルシーとは、
政府が、各家庭に一台ずつ配布した、小型の AI ロボットの事である。
これから自宅に巣籠もりする市民たちへと、
生活が不便にならないようにと、サポート用に、無償提供されたのだ。
ルシーは、移動機能こそ持たないものの、
実体は、音声アシスト装置なので、いろいろな事ができるのである。
「さあ。そろそろ、行かなくちゃ」
「ねえ。電話ぐらいは出られるよね。毎日かけても、大丈夫？」
ナナは、すがるように、ケイに尋ねた。
「毎日は無理かもしれない。でも、可能な限り、こちらからも電話するよ」
そう言われても、ナナは、やや不満げな目をしているのであった。
彼女は、物欲しそうに、ジッと、ケイの方を見つめているのだ。
「困った奥さまだ」
ケイは、表情をゆるめると、気を利かせて、
最後に、あらためて、ナナのことを強く抱きしめてあげたのだった。
ナナは、別れのキスもしたかったようだが、
それは、ケイの方が、厳しい態度で拒んだ。
口と口との接触が、一番、ウイルスを感染させる危険性があったからだ。
それ以前に、二人とも、口もとは、しっかりとマスクをつけていた。
「よし。もう行くよ。一ヶ月後、無事にまた会おうね」
「あ。ケイ」
別れたくなくても、いつまでも引き延ばす訳にもいかないのである。
ついに、ケイは、部屋の外へと出ていった。

同時に、玄関のドアは、鈍い響きを立てて、重く閉じたのである。

これより、ナナにとっても、一人ぼっちのオーバーダウンの生活が始まったのだ。

第8話 ウイルスなんて嘘さ

1 ウイルスデート

オーバーダウン計画の方も、いよいよ、大詰めを迎えていた。

ひと月に渡る全市民監禁期間ののち、無事に、第二段階へと移行し、人々は、感染対策を徹底しながらも、屋外を自由に歩けるようになったのである。自宅に帰るのを許されていなかった労働者たちも、我が家への出入りを許可され、ナナの夫であるケイも、ナナのいるマンションへと戻れるようになったのだ。

もっとも、ケイは、最前線で働く医者だったので、まだまだ、忙しい日々は続いていた。それでも、第二段階も順調に終了する時が近づいてきた事で、ケイも、ようやく、丸一日の休暇も貰える事となったのである。

その日が来るのを、ナナは、何日も前から、とても楽しみにしていた。この日は、ケイとの、ほんとに久しぶりの一日デートを計画していたのだ。

まだまだオーバーダウン中なので、濃厚接触になってしまうキスとかハグは、相変わらず、出来そうにはなかったが、それでも、デートができるという事は、事実なのである。

これまで、神経質に感染予防に気を付けて、閉じこもっていたマンションの部屋の中から、

ナナも、思いっきり外へ飛び出して、いっぱい羽を伸ばせるのだ。

「ケイ。さあ、行くわよ」

当日、ナナは、すっかり浮かれた感じで、ケイへと呼びかけた。

「そう、慌てないで。まだまだ、今日は始まったばかりなんだから」

ケイも、ニコニコしながら、ナナに答えたのだった。

ナナもケイも、まだ交際していた頃みたいに、きれいに着飾っていた。

二人とも、本日のデートは、心から楽しみにしていたのである。

「ナナ。マスクはつけたかい？」

「もちろんよ」

「念のため、携帯用の消毒液も持っていこう」

「分かったわ」

「提示を求められるかもしれないから、

 ウイルス検査の陰性証明書も忘れないようにね」

「ええ」

このように、ウイルス対策の方も万全なのである。

ナナも、今日の楽しい一日ぐらいは、素直で従順な妻となって、

ケイに「困った奥さま」などとは、からかわれないようにしたいのだ。
それから、この若い夫婦は、午前の早い時間に、マンションの外へと繰り出したのである。
デートの予定地に向かって、二人が街中を歩いていると、
その途中、声をかけてきた者があった。
「ナナ。ねえ、ナナでしょ？」
その声にハッとしたナナは振り返った。
声の主は、ナナの親友のユウだった。
ユウもまた、今は外出していたらしくて、すぐそこに立っていたのだ。
「ユウ！」
と、思わず、ナナも喜びの声をあげた。
二人が、じかに会えたのは、実に二ヶ月ぶりなのである。
テレビ電話では、度々、連絡はとってはいたものの、
それだけでは十分に語り尽くせなかったような話題も少なくなかった。
つい、ナナが、ユウのそばへ歩み寄ろうとした時である。
ケイが、さりげなく、ナナの服を引っ張ったのだった。
キョトンとしたナナは、ケイの方に顔を向けた。
「ナナ。距離を置いて。2メートル・ルールだよ」
ケイが小声で言った。
「え。ユウは友達だよ。知らない人じゃないよ」
ナナは、悲しそうな表情をしてみせた。
「それでも、今はまだオーバーダウン期間中なんだから。
普段、会っていない人との接近は禁止だよ」
そうなのだ。
オーバーダウン計画も終盤だったとは言っても、
まだ、同居人以外の人間との2メートル内の接近は解禁されていなかったのである。
そんな訳で、ケイの言葉に対して、ナナはやや不服そうではあったが、
しかし、従うしかなさそうなのであった。
結局、ナナとユウは、離れたまま、会話する事になったのである。
もっとも、ユウは、その事を、特に気にしているようでもなかった。
「良かったね。ケイさんも、家に帰ってきたんだ。これから、二人でお出かけ？」
「うん。デートなんだ」
「わあ、羨ましい。相変わらず、仲がいいんだから」
「あとで、あらためて、連絡するね」
「分かった。いっぱい、楽しんでくるのよ」
そして、すぐ、ナナたちとユウは別れたのである。
ただ、ナナは、依然、もの足りそうな雰囲気なのだった。
やがて、ナナとケイは、予定していた最初のデート場所にと到着した。
それは、市内の大きな映画館である。
ナナは、ここで新作映画を観るのを、ずっと楽しみにしていたのだ。

「このアニメ、今、一番人気のある映画なのよ。

私、早く観たくって、ずっと、ウズウズしてたの」

ナナは、映画館に入館する前から、すっかり浮かれていたのだった。

当然、彼女は、この映画の原作マンガも全巻、持っていて、読破済みなのだ。

他方のケイは、あまり映画には興味がないらしくて、落ち着いた態度であった。

二人は、チケット売り場の前にやって来た。

そこで、想定していなかった、ちょっと面白い事が起きたのだった。

ナナたちがカップルである事は、見れば分かるはずなのに、

チケット売り場は、隣同士の指定席を売ってくれなかったのである。

しかし、実際に、劇場の中に入ってみると、その理由は、すぐに分かったのだった。

ウイルス感染防止のため、客席は全解除になっていなかったのだ。

一つの席の左右の席は使えないようなスタイルだったのである。

ナナは、かなり不満に感じたのだが、これでは従う以外になかったのだった。

結局、ナナとケイは、間に席を一つ挟んだ状態で、着席したのである。

これでは、映画を観ながら、お互いに手を握る事も、体を寄せあう事もできない。

当然、映画鑑賞中の飲食も禁止なのだ。

なおかつ、劇場にいる間は、最後までマスクを着用してないといけないのである。

そんな訳で、映画そのものは、確かに最高に面白かったのだが、

かなり窮屈な映画鑑賞になってしまったのだった。

映画館を出た頃、ちょうど正午になった。

二人は、ランチをとる事にしたのである。

彼女たちは、かつての交際時代のデートコースを再現して、今日は歩いていた。

次に目指すのは、二人の思い出のレストランなのだ。

その店は、特に、ワインが美味しい事で有名な場所で、

ナナたちも、それを久しぶりに堪能できる事を楽しみにしていたのである。

ところが、二人がよく食べに行っていた、そのレストランは、

いざ、足を向けてみると、閉店になっていたのであった。

その店は、ウイルスの影響で、客足が減り、ずっと経営不振だったのだ。

そこに、オーバーダウン計画に伴う強制休業が追い打ちとなり、

完全に行き詰まってしまって、いつの間にか、潰れてしまったのだった。

多数の飲食店や夜の店は、デリバリーやリモート接待などのシステムを導入する事で、

なんとか、こうしたウイルス禍のダメージも凌いでいたようだったが、

この店に関して言えば、どうやら、近代化の波に乗り損ねてしまったらしいのだ。

ナナたちは、このレストランの店前に立ち、呆気にとられてしまったのである。

結局、二人は、近くにあったファストフード店で、昼食をとる事にしたのであった。

当初の予定どおりにはならなかったが、二人で久しぶりの外食ができるのだから、

まあ、それなりに気持ちは弾んでいるのだ。

その店の感染対策の方も、十分に満足いくものだった。

テーブルの間にはアクリル板が張られ、換気もしっかりしているのである。

食事する場所としては、何も問題はなさそうだった。

ナナたちは、空いていたテーブル席に、さっそく、向かい合って座ったのだ。
注文すると、料理の方も、すぐに届いたのである。

ナナは、食事を楽しみながら、ケイとお喋りしたい事がいっぱいあった。
今観た映画の話とか、普段の生活の事だとか、いろいろだ。

いつもは、夜遅い時間に帰ってくるケイとは、少ししか話ができなかったので、
ナナも、今日ぐらいいは、ケイと存分に喋りたかったのである。

それが、食事が始まると、ケイは、もくもくと食べ始めたのだった。
ちょっと、話しかけにくい雰囲気なのである。

ナナも、仕方なく、自分の料理を食べ出した。

でも、この会話のない食事は、何とも息苦しいのだ。

とうとう、ナナは、我慢できなくなってしまった。

「ねえ」

と、ナナは、ケイに声をかけた。

すると、ケイは、食事中でありながら、すかさずマスクを口につけたのである。

「何だい？」

「え。どうして、マスクをするの？」

「喋ったら、飛まつが飛ぶからね」

ケイは言った。

そうなのだ。

新型コロナウイルスは、主に、口から出る飛まつを通して、人から人へ感染するのだ。
それで、マスクが、ウイルス予防には特に有効だと考えられていたのである。

「ナナも、マスクをした方がいいよ」

と、ケイは、当然かのように言った。

でも、ナナは、ひどく面白くないのであった。

本当は、食べながらの会話こそが楽しかったからだ。

「もう、いいわ」

と、ふてくされた感じで、ナナは言葉を返した。

そのあとは、彼女も、一言も喋らずに、さっさと料理を平らげたのである。
昼食を終えると、ナナとケイは、次のデート場所へと向かった。

市内にある水族館だ。

そこは、まだ交際中だった頃に二人がよくデートした場所だったのである。
オーバーダウン中の現在は、この水族館は予約制になっていたが、
ナナたちは、きちんと予約を取っていたので、すぐ入館する事ができた。
人数制限がかけられているので、客の数はそれほど多くはないのだ。
しかし、入館直前で、またもや、ひと悶着おきてしまったのだった。
ナナは、おしゃれなデザインのウレタンマスクをつけていたのだが、
この水族館では、不織布マスクのお客の入館しか受け付けていなかったのである。
ウレタンマスクはウイルス防止効果が低い、と言う情報が広がっていた為らしい。
でも、ナナだって、せっかくのデートなのだから、
どうせなら、お気に入りの可愛いマスクをつけた外見で、遊びまわりたいのだ。

ナナは、しばらく、水族館の入り口で渋り続けたが、それでも、最終的には、ケイに説得されてしまい、嫌々ながら、予備で持ってきていた質素な不織布マスクにつけ直したのだった。せっかくウキウキしていた気分も、だいぶ冷めてしまった感じなのだ。ところが、悪い事は、たて続くものなのである。ようやく、お客も少ない、ゆったりとした環境で、お魚見物を楽しめたかと思いきや、その最中、ナナのマスクの紐が、プツンと取れてしまったのだった。「どうした？」

キョトンとして、ケイが尋ねた。

「やだ。ヒモ、切れちゃった」

マスクを押さえながら、ナナはうろたえた。

「さては、だいぶ前に買った輸入品の安物マスクを持ってきたな。あの頃、出回ったマスクは、欠陥品が多いんだよ」

「知らなかったわ。ごめんなさい。」

「そんなマスク、まだ使ってたなんて、私ったら、ダメねえ」

「他に、代わりのマスクはあるのかい？」

「不織布のやつは、もう無いわ」

「参ったなあ。君に、全部、任せちゃって、今日は、ボクも用意してこなかったんだ」

二人は、その場に立ち止まり、しばらく困惑していた。

「仕方ない。いったん、ここを出よう」

急に、ケイが、そう告げたのだった。

「え。まだ、見ている最中だよ」

と、ナナが驚いて、言い返した。

「でも、マスク無しじゃ、この施設内には居られないよ。一回、外に出て、新しいマスクを買ってこよう」

「そんな事したら、もう予約じゃないから、中には入れないかもよ」

「仕方ないだろう」

ケイは、医者だけに、このへんのウイルス予防については、特にうるさいのである。このように、言い合っているうち、とうとう、ナナの方が折れてしまったのだった。あまり粘り過ぎる事で、ナナも、また、ケイにワガママ呼ばわりはされたくなかったのだ。

二人は、水族館から出た。

それから、ナナは、すぐに、新しい不織布マスクを手に入れたものの、何となく空気が悪くなったので、結局は、水族館には戻らなかったのである。彼女は、不機嫌になりながら、元のウレタンマスクにつけ直してしまったのだった。このあと、ナナとケイは、市電へと乗車した。最後のデートコースとして、少し離れた場所にある公園へと向かったのだ。電車の中は、閑散としていた。真っ昼間だったせいもあるかもしれないが、それ以上に、職場や学校では、リモートやオンライン化が進んでいたからだ。

多くの人は、もはや、仕事や授業のために、移動する必要は無くなっていたのである。
世の中の環境は、明らかに変貌し始めていた。
それはさておき、午後もだいぶ遅くに、
ナナたちは、目的の公園にと、たどり着いたのである。
そこは、ちょっとした小高い丘になっており、
夜には、公園のてっぺんから、ネオン輝く市街を見下ろす事のできる、
最高にロマンチックなデートスポットとなっていた。
ナナも、今日のデートでは、この公園を一番の楽しみにしていたのである。
ところが、いざ、公園の前にやってくると、
その公園は、今日の開園時間はもう終わっていたのだった。
知らないうちに、時短営業になっていたのである。
公園の入り口に看板が立っていたので、ナナたちは読んでみた。
その看板に書かれていた内容によると、
オーバーダウン計画が第二段階に移行して、外出行為が解禁になると、
この公園には、どおっとカップルたちが押し寄せるようになったのだと言う。
それで、ウイルス感染の危険性がある密状態になってしまった為、
当面の間は、人が集まりやすい夕方以降は、営業をやめた、との事なのだった。
これには、ナナだけではなく、ケイも愕然としてしまい、
結局は、二人は、お目当の公園にも入れぬまま、
何もせず、電車に乗って、元の駅に戻ってきてしまったのである。
すでに、夜はだいぶ更けていた。
おしまい、ケイが、ナナにプレゼントを買ってくれるはずだったのだが、
目ぼしい店も、やはり、どこもかしこも、すでに閉まっていたのだった。
まだオーバーダウン期間中につき、たいがいの店は時短営業なのである。
かろうじて開いていた、小さな店で、あまり気に入ってないものを購入して、
こうして、二人の今日の一日デートは終わったのだった。
明日からは、ケイは、また、戦場のような職場に戻り、朝から晩までバリバリ働く事になるのだ。
ナナの方は、なんとも満たされない気分ばかりが残ってしまったようなのだった。
最後に、ケイは、自分たちの家に帰る前に、マンションの入り口にて、
今日のデートの感想を、ナナへと、こっそりと聞いてみた。
ケイも、ナナがガッカリしている事にうすうす気付いており、不安だったのだ。
ナナの方も、気を遣って、すぐには本心を答えようとはしなかった。
しかし、彼女としても、完全に自分の気持ちを抑えてしまうのは辛すぎたのである。
「なんだか、この町全体が、閉じこもった部屋の中にいるみたいだった」
ナナは、暗い面持ちで、正直に口にしたのだった。
それを聞いて、
ケイの方も、いたたまれなくて、なんとも言えない、複雑な表情になったのである。

2 ウイルスなんて嘘さ

一日デートの翌日から、ケイは、早くも、慌ただしい仕事の日々にと帰っていった。朝早くに家を出て行って、帰宅は夜遅くなる生活に戻ったのだ。それが、いつまで続くのかは、相変わらず、はっきりしていなかった。ウイルスとの戦いは、まだ完全には終わってはいないのである。だから、ナナの方も、マンションの中に一人置き去りの暮らしが、また再開したのである。

あの一日デートは、楽しいどころか、はなはだ、不満ばかりが残るものだった。ナナも、以前の生活に自分を戻していこうとはしたものの、そうした不完全燃焼な部分もあって、なかなか、心を切り替えられなかったのだ。こんな時に、いつものように、あの持病の偏頭痛が襲ってくる。ナナは、薬を飲もうとしたが、ここは一旦、我慢する事にした。薬を使えば、痛みは止まるかもしれないが、代わりに、おっかない幻覚を見てしまうのだ。

恐らく、薬の服用しすぎによる副作用なのであろうが、この白昼夢のせいで、ナナは、これまでも何度も怖い思いをしてきたのである。その事を話すと、ケイからも、しばらく薬は控えるようにと言われていたのだった。ナナは、薬に頼る代わりに、インターネットでも見て、気を紛らわす事にした。まずは、いつもネットサーフィンしているサイトや SNS などを閲覧してみるのである。特に目新しい事は、どこにも書かれてはいない。同じページばかり見ていれば、それも当たり前なのである。でも、今日は、薬を飲んでいなかった事もあって、ナナは、普段よりも熱心にページのあちこちを読み漁ったのである。彼女の目がふと止まったのは、本文とは全く関係のない広告の部分のタイトルだった。「マスクなんて不要だった」と、そこには、素っ気なく書かれていた。しかし、いつもマスク着用で嫌な思いをしていたナナには、その見出しはひどく興味深いものを感じられたのである。彼女は、不用心に、その広告をクリックしてみた。いつもの彼女だったら、絶対にやらないような行為なのだ。パソコンの画面には、たちまち、彼女が初めて見るページが現われた。でも、そこには、ナナが、今まで、まるで知らなかったような話載っていたのである。ナナは、食い入るように、その記事を読み耽ったのだった。新たな知識を得た事で、彼女の目はキラキラしていた。それほど、彼女にとっては衝撃的な事が、そのページには書かれていたのだ。どうやら、偏頭痛の方も、すっかり、吹っ飛んでしまったようだった。ナナは、ひたすら、その記事を読み続けた。それどころか、そのページからリンクで飛べる関連ページも、次々に、熱心に読み始めたのである。その夜、ケイは、これまで通りに、疲れ切って、マンションにと帰ってきた。

すると、部屋の中では、ナナが、楽しそうにテレビを観ていたのだった。それも、片手にスナック菓子の袋を持ちながらだ。当然、間食している最中なのだから、マスクはしていないのである。口をモグモグさせながら、テレビを観て、ナナはゲラゲラと笑っていたのだ。彼女が元気そうなのは、ケイにとっても嬉しい話なのではあったが、でも、今の彼女の様子は、どうも、あまり好ましくは感じられなかった。ケイが、寝室に行き、普段着に着替えて、リビングに戻ってくると、ナナは、まだ、テレビを観ながら、楽しそうに笑い続けていたのだった。もちろん、間食の方もやめてはいないのである。「ナナ。テレビを観続けるのは構わないけど、お菓子を食べるのは、そろそろ控えたらどうだい？」ケイは、つい、気になっていた事を、ナナに告げてみた。「どうして？」と言いながら、ナナは、ケイの方に振り返った。彼女は、スナック菓子の袋を持ったままで、まだ菓子にバクついているのだ。その目は、いつになく、キョトンとした感じなのである。「だって、今はボクが帰ってきたんだよ。他にも人がいるんだから、なるべく、マスクはつけていた方がいい」そう言っているケイは、しっかりと、マスクをしていた。そう、オーバーダウン期間中は、自宅内でもマスクをする事が推奨されていたのである。「そんなマスク、していても、無意味よ」ナナは、さらりと言った。「なんで？ マスクは大切だよ」「あら、ケイったら、知らないの？ マスクの布の織りよりも、ウイルスの方がはるかに小さいのよ。そんなマスクをしてたって、織りの隙間をくぐって、ウイルスは簡単にマスクを通り抜けてしまうわ。だから、マスクなんかしていても、全然、予防にはならなかったのよ。最初っから、ウレタンか不織布かなんて、どうでも良かったんだわ」これこそが、ナナが、インターネットで手に入れた知識なのだった。そして、この話は、科学的には、確かに事実なのだ。ウイルスの大きさは、0.1 マイクロメートルである。それに対して、一般的な不織布マスクの織りにできる穴は5 マイクロメートルもあるので、数値だけで考えてみたら、ウイルスは、マスクの布なんて、がらがら通過してしまうはずなのだ。もっとも、これは、あくまでも理屈上の話なのである。「あのね。ナナ。その発想は、現実には、正しくないんだよ。なぜなら、ウイルスは、単体では口からは飛び出さないんだから。クシャミだとか、ツバだとか、何かに混ざって、ウイルスは吐き出されるんだ。

そして、このツバなんかには、唾液などの不純物も含まれている。
結果的に、それは5マイクロメートル以上の大きさになってしまうので、
ウイルスごと、きちんとマスクに引っかかるんだ。
分かるかい。だから、マスクは、十分に有効なんだよ」

ケイの、医者ならではの正確な解説を聞かされて、
ナナは、キョトンとした顔をしていた。
彼女は、まだ何かを言いたげだったが、きっと、すぐにケイに論ばくされそうだし、
この時は、ひとまず、彼女も黙ったのだった。
しかし、この時が始まりとなったのである。
この日以降、ナナは、夜中に、クタクタになっていたケイが帰ってくると、
毎日のように、新型コロナウイルスに関わる奇妙な説を持ちかけるようになったのだった。
例えば、この日の翌日は、ナナは、ウイルス検査に対する不審点を持ち出してきた。
「ねえ、ケイ。ウイルス検査って、おかしいわ。
これって、本当の感染者数を表示してないんじゃないかしら。
きっと、実際の感染者数よりも多めの数を提示していて、
それを見て、皆は、新型コロナウイルスが流行っていると勘違いしてるのよ」

「ナナ。なぜ、そんな事を思ったんだい？」
ケイに聞かれると、ナナは得意げに説明を始めたのだった。
やはり、それもインターネットから拾った、受け入りの知識だったのである。
彼女の話によれば、
現行のウイルス検査は、精度が良すぎて、すでに治った患者の体内のウイルスまで拾っ
てしまう、
と言うのだ。
つまり、治った患者であるならば、その人まで感染者数に含めるべきではない。
よって、実際に報告されている感染者数は、実数よりも多すぎると言う訳だ。
もちろん、この話にも事実は含まれているのだが、
「新型コロナウイルスが流行っている」と言う現実を覆すほどのものではないのである。
「どうして、そんな考えを信じるようになったんだい？」
と、ケイは聞き方を変えてみた。
「どうやら、皆が騙されているからよ。
ほんとは、新型コロナウイルスが脅威だなんて話は、全部、嘘なのよ。
何者かが、陰謀で、わざと言い広めてるのよ。
そうやって、私たちは、知らないうちに、彼らの実験台にされていたんだわ。
自粛を強要したら、国民は、どこまで大人しく従うか、を調べる為のね」

ナナは、目を輝かせて、そんな事を言い始めたのだった。
「何者かの陰謀って、例えば、誰がそんな事をしているんだい」
内心では困りつつも、ケイはナナに尋ねてみた。
「多分、政府ね。政府が影で糸を引いているのよ」
でも、それこそ、ありえない話なのだ。
なぜならば、新型コロナウイルスの流行で、経済活動が停滞して、国の GNP も下がると、

一番被害をこうむるのは政府だからだ。

新型コロナウイルスのデマを流したところで、政府は何の得もしないのである。

こんな感じで、その後も、

ナナは、奇妙な怪説を、あちこちから見つけてきて、ケイに吹っ掛けるようになったのだ。

ある時は、ナナは、インフルエンザを比較例として持ち出してきた。

「インフルエンザの我が国での通年の感染者数は、1000万人よ。死者も、1万人もいるわ。

それに比べて、新型コロナウイルスの現在の感染者数は、20万人程度よ。死んだ人も、1000人。

全然、少ないじゃないの。やっぱり、わざと新型コロナウイルスの事を騒ぎ過ぎているのよ」
また、大いに警戒されていた医療崩壊の危機についても、

ナナは、こんな事を、さらっと言ってのけたのだった。

「外国の方が、私たちの国よりも、何倍も、新型コロナウイルスの被害は大きいよ。

でも、外国で、医療崩壊が起きたなんて、聞いた事がないじゃないの。

私たちの国が、先に医療崩壊してしまうなんて、絶対に、おかしいわ。

きっと、これも騙されてるのよ。

ケイも他の医療従事者たちも、医療崩壊の恐怖で脅されて、

必要以上に無理やり働かされているだけなんだわ」

ナナが口にする怪説は、いずれも、内容の偏った、情報の浅いものであり、

医者であるケイからすれば、すぐに誤りを正せるようなものばかりだったのだが、

それでも、こう真剣になって、次々に繰り出されてしまうと、

さすがに、ケイも閉口してきたのだった。

それにしても、なぜ、ネットには、こんな怪しげな論説が氾濫していて、

人々も、コロッと、それを信じてしまうのであろうか。

恐らくは、人間誰しもが、本気で怖い話は考える事ができないのだ。

それで、つい、真摯な現実には目を向けられず、

うっかり、自分に都合のいい、間違っただ話にと耳を傾けてしまうのである。

少しでも、自分を安心させたくて、その裏付けになるようなものが欲しくてだ。

特に、現在のようなウイルスでパンデミックが起きている状況では、

先の見えない不安やストレスで、皆は、よけい、そんな説明を求めてしまうのかもしれない。

ラクをして、かつての平和な状態に戻してくれるような楽観的な発想だとか、

自分以外の何かに悪い原因を押し付けてしまえる陰謀論などをだ。

ナナのように、長い自粛生活で、すっかり心を病んでる者なら、

なおさら、いかがわしい話を信じやすい心理になっていたようなのである。

さて、オーバーダウン期間も終了寸前だった、その日、

いつものように、深夜に、ケイが、くたびれて、マンションに帰ってくると、

この日は、珍しく、ナナは、すぐには、おかしな怪説を持ちかけてはこなかった。

ようやく、彼女も、ウイルスにかかわる陰謀説には飽きてくれたのだろうか。

ところが、よく部屋を見回してみると、

リビングのチェストの上にあったルシーの四方には、分厚い鉄の板が置かれていて、

ルシーは、その中にすっぽりと隠されていたのである。

ケイは、驚いて、ナナのことを呼んだのだった。

「ナナ。これは、一体、どういう事なんだい？」

近寄ってきたナナに、ケイは、すぐに、そう尋ねた。

「見ての通りよ。ルシーを使えなくしたの」

ナナは、悪びれる様子もなく、得意げに答えたのだった。

「どうして？ ルシーは、ただの音声アシスト装置なんかじゃないんだよ。

オーバーダウン期間中、ボクたちの毎日の健康チェックもしてくれていたんだ。

ひそかに、ボクたちを新型ウイルスからも守ってくれていたんだよ。

それが、こんな事したら、使えなくなっちゃうじゃないか。

にしても、よく、こんな方法を思いついたね」

「ネットの記事に、やり方が書いてあったのよ。

普通に、ルシーを壊したり、電源を切っただけでは、

ルシーが動かなくなった事が、すぐ電波受信センターの方で確認できてしまい、

ルシーが使用不能状態になっている事がバレしてしまうわ。

でも、この方法で、ルシーに周りを感知できなくさせてしまえば、

電波受信センターに見つかる事なく、ルシーの機能を遮断できてしまえるのよ」

「なぜ、そんな事をするんだい。

ルシーは、ボクたちの為に働いてるんじゃないか。

君だって、ルシーのことは大好きで、遊び相手にしていたと思ったのに」

「違うわ。この AI ロボットこそが、新型ウイルスの黒幕だったのよ。

こうやって、全ての人間を監視下に置く為に、ウイルスをばらまいたんだわ。

私たちは、いつの間にか、ルシーに支配されていたのよ。

やがて、世界そのものが AI に乗っ取られてしまうわ」

「おいおい。そんな事ないよ。

ルシーや AI は、どこまで行ったら、人間の作った道具なんだ。

ボクたちの生活に貢献する為だけに存在しているんだよ。

人間を征服しようとか、バカな事を考えたりするはずがないじゃないか。

それなのに、なんだい。急に悪者扱いなんかして」

「間違ってるわじゃないわよ！

あなたこそ、すっかり、騙されてしまっているんだわ！」

「騙されてるとか、そういう問題じゃないってば」

「いいえ！ 真実を知らないのは、あなたの方よ！

何でもかんでも、新型ウイルスは怖いものだとか教え込まれて、

あなたの頭は、完全に、ウイルス馬鹿になっちゃってるのよ！」

ナナは、なおも力強く、言い返してきたのである。

「困った奥さまだ」

呆れて、ケイが、いつもの口癖を言い放った時、

そこで、彼も、ハッと気が付いたのだった。

顔を真っ赤にして力説しているナナは、小さく震えて、涙も流していたのである。

彼女は、どこまでも本気なのだ。
心の底から、おかしな奇説にのめり込んでしまっていて、
他のことが全く見えなくなっているようなのだった。
きっと、こんな状態になってしまうまでは、
ほんとに、いろいろな辛い事があったからに違いあるまい。
そうした不安や悩みの数々に、
ナナは、これまで、孤独に、自分だけの力で、必死に対応しようとしてきたのである。
そんな彼女の心の闇まで、果たして、誰が笑って否定しきれるものなのだろうか。
まだ自分の主張を押し通し続けようとしているナナのそばに、
ケイは、何も言わずに、静かに歩み寄っていった。
ケイの突然の行動に、ナナは戸惑ったようだが、
彼女も、逃げたりはせず、その場に突っ立っていた。
すると、ナナのすぐそばにまで来たケイは、そっとナナの事を抱きしめたのである。
ナナもドキリとした。
こんな風に、ケイに、しっかりとハグしてもらえたのは、
オーバーダウンが開始される直前の時以来なのである。
でも、ケイの体の温かいぬくもりは、あの頃と少しも変わってはいなかった。
「寂しかったんだね。ナナ。
そうだよ。ずっと、この部屋で、一人で不安な日々を送ってたんだもね。
気付いてあげなくて、ごめんね」
ケイの口調は、穏やかで、とても優しくかった。
ナナは、何かを言い返そうとはしたものの、うまく言葉が出てこなかった。
「いつまでも、こうしていて、いいんだよ。
だから、嫌なことは、もう全部、忘れて。
ボクもそうするよ。今は、君のことだけを考えている。
もしかすると、抱き合ったりしたら、ウイルスをうつしちゃったかもしれないけど、
それも構わないさ。
その時は、二人で感染者になろう。
そして、一緒に入院するんだ。病室も同じにしてもらってね。
もし、ウイルスの感染者が、ボクたちだけになってしまったとしても、
そんな事は、ちっとも気にならないさ。
ボクたちの事をウイルス呼ばわりして、遠ざける奴らがいたとしても、
そんな連中のことは、ほっとけばいい。
一番大切なのは、ボクたちが、二人で、どう生きるかだ。
ボクたちは、もう、いつだって一緒だよ」
ケイにそう囁かれながら、ナナはボロボロと涙を流していた。
彼女は、動揺してしまって、涙が止まらないのである。
頭の中も、すっかり、真っ白になっていた。
あれほど、彼女の心を支配していた陰謀論も浮かんでこないのである。
でも、今のこの幸せな時間がずっと終わらないでほしい、

と、それだけは、ナナも素直に感じていた。

第7話 サランラップ・ラブ

オーバーダウン計画も、第二段階になってから、そろそろ二週間が過ぎようとしていた。第一段階の全市民監禁期間が終了した事で、それまで職場に泊まっていたケイも、ナナが待っていたマンションに戻ってきており、そこから病院に通うようになってから、もう、だいぶ経つのである。でも、相変わらず、医療機関の仕事は忙しいままなのであり、ケイも、休日すら取れないで、朝は早くから仕事場に出かけて、夜遅くに帰ってくる生活を続けていたのだった。だけど、ナナは、そうであっても、嬉しく感じていた。今は、少なくとも、毎日、夫のケイとは会える訳なのだから。その日も、早朝から、マンションから出勤しようとするケイの事を、いつものように、ナナは、部屋の玄関で、爽やかに、見送ろうとしていた。「早く帰ってきてね」と、いつもと同じ、別れる時の言葉を、ナナはケイへと投げかけた。「できるだけ、早く帰ってくるよ」ケイの返事もまた、すっかりパターンとなっていたものだった。そして、ケイは、玄関から出て行こうとしたが、今日は、いつになく、ナナが、熱いまなざしを自分に注いでいるのに気付いたのである。「どうしたの?」と、ケイは聞いてみた。「あのさ。今日から、お別れのハグとかは、しないの?」じれったそうに、ナナは言った。それで、ケイも思い出したのである。オーバーダウン計画の方も、予定どおりに、順調に成果を上げていたので、今日からは、ウイルス対策の内容の一部が緩和されたのだ。同居人や職場の同僚など、普段から一緒にいる人間の前でならば、数分に限って、マスクなしの接近も、認められるようになったのである。逆に言うと、今までは、それも許されないほど、ルールが厳しかったのだった。「そうだな。軽いハグぐらいなら、大丈夫かな」と、ケイが快く答えた。「ほんと?」ナナの表情も、パッと明るくなった。「ハグしたあと、すぐ体に消毒液をふりかける事になるけどね」

ケイが、続けて、そう言ったものだから、

ナナは顔をしかめたのだった。

「そんなの、嫌よ。まるで、それって、バイキン扱いじゃない」

「仕方ないだろう。」

ボクか君かが、もし、ウイルスを持っているようだったら、

ハグなんかしたら、相手に感染させてしまうかもしれないんだ。

接近までは許可されたかもしれないけど、体を触れ合う事はまだ解禁されていない。

これは、どうしても濃厚接触する場合には、最低限、必要な処置なんだ」

ケイが悪い訳ではないのであるが、

ナナは不服げな目で、ケイの事を睨んだのだった。

「じゃあ、お別れのキスは？」

「キスなんて、よけいダメだよ」

実は、ナナは、前に、マスク越しにキスする事を、ケイに提案した事があったのだが、その時も、思いっきり、却下されていたのだった。

マスクの表面は、特に汚れているのであり、それを重ね合わせるなどと言うのは、衛生予防面で考えてみても、もっとも不潔な行為なのだ。

ちなみに、今だって、二人は、しっかりとマスクはつけていた。

それでも、ナナは、まだ諦めきれないような表情を浮かべていたのである。

「困った奥さまだ」

と、からかうような口調で、ケイは呟いた。

だが、そこで、彼は、ふと閃いたのだった。

「そうだ。いい事を思いついたぞ。」

ナナ。ちょっと、サランラップを持ってきてくれ」

「どうして？」

「いいから、早く」

ケイが、やたらにテンションが高くなっていたので、

ナナは、言われた通りに、サランラップを、箱ごと持ってきたのだった。

「こうすれば、キスしても大丈夫だよ」

「え。できるの？」

ナナが見ている前で、楽しそうなケイが、自分のマスクを外し始めた。

ナナは、一瞬、悪い想像を思い出して、息を飲んだが、

しかし、マスクを取ったケイは、覚えていた彼の素顔なのだった。

あの優しい笑みを口もとに浮かべた、ケイの顔なのである。

この顔をじかに目にしたのは、ナナも、ふた月ぶりぐらいなのだった。

ナナも、その懐かしさに、ついホッとしたのである。

一方のケイは、まだ作業を続けていた。

彼は、お次は、サランラップを、ピリッと、20センチ四方ほど切り取ったのだ。

「ほら、こうするんだ。」

こうやってキスをすれば、じかに接触はしないよ」

そう言って、ケイは、正方形のサランラップを、自分の口にと当てたのだった。

それを見て、ナナはクスリと笑ったのである。

口の周りだけをサランラップに覆われたケイの顔が、なんとも、滑稽だったからだ。

でも、じょじょに面白そうに思えてきて、

ナナも、このケイのアイディアには乗っかる事にしたのである。

ナナは、自分の唇を、そおっとケイの顔に近づけていった。

すると、二人の口は、間にサランラップを挟んで、ピタッと重なったのだ。

ナナの唇は、サランラップのスペースベシした触り心地を感じ取った。

しかし、同時に、その奥に、ケイの唇の柔らかさも認識したのである。

トリッキーではあるが、確かに、二人は、何ヶ月ぶりかのキスをしているのだ。

ナナは、なんだかジーンと心が熱くなってきて、

ファーストキスをした時のような感動すら覚えてきたのだった。

とは言え、このキスの時間は、それほど長くはなかった。

やり終えて、二人が互いの口を離すと、

ケイは、使い終わったサランラップを、さっさとゴミ箱に捨ててしまったのである。

「どうだい。これで、満足してくれたかい」

「うん」

と、嬉しそうに、頬を赤らめながら、ナナは頷いた。

こうして、久しぶりに朝のキスも行なう事ができて、

この日は、ケイも、快く、出勤していったのである。

そして、ナナの方も、この特殊なキスを、そうとう気に入ったらしくて、

以降は、毎朝、このサランラップのキスをして、ケイを見送るようになったのだった。

はたから見れば、それは、大変、おかしな儀式にも写ったかもしれない。

しかし、当人たちは、このウイルス禍ならではのキスの方法を、

けっこう気に入り始めていたみたいなのであった。

特に、ナナの方は、このキスを繰り返すほど、

かつて、ケイに抱かれたり、愛された時の感触も、どんどん思い出してきて、

ますます、体が熱くなってきた。

彼女は、再び、ケイに肉体的に愛してもらう事を切望したのである。

もっとも、新型コロナウイルスが流行りだしてからは、

セックスこそ、もう、キス以上に、ご無沙汰の話となっていたのであった。

さて、その日も、早朝にケイを仕事へと送り出したナナは、

昼間は、ずっと、マンションの自分の部屋の中で過ごしていたのである。

代わり映えのしない、いつも通りの、単調な一日なのだった。

夜に、一人だけの夕食をすまして、家事も全て片付けると、

あとは、また、彼女だけの自由時間となる。

まだ元気を持って余っていたナナは、

少しウキウキしながら、リビングのソファの上にと寝っ転がった。

「ルシー。いつもの音楽をかけて」

と、リラックスした状態のナナは言った。

すると、音声アシスト装置でもあるルシーは、ナナに命じられた通りに行なったの

だった。

部屋の中に、穏やかな歌謡曲が流れ始めた。

それは、このウイルス禍の間に、ネットを中心にして流行した歌だった。

今、この国で、もっとも聴かれていた、若者向けの曲だったと言ってもいい。

そんな曲をBGMに流しながら、ナナは何をやりだしたのかと言えば、

なんと、彼女は、ソファの上で一人遊びをおっ始めたのだった。

衣類をめくり、気持ち良さそうに、自分で自分の体を愛撫しているのだ。

ナナは、ケイとサララップのキスをするようになり出してから、

やたらと、体が疼くようになっていたのだった。

その為、以前は時々しか行なわなかった一人遊びも、

この頃は、毎日のように、たしなんでいたのである。

一人遊びをする時は、少しでもムードを作る目的で、

いつも、ルシーに、この流行歌をかけてもらっていた。

今では、ナナは、この流行歌を聴くだけで、エッチな気分になるほどであった。

普段だったら、彼女も、もっと早い時間に、一人遊びは済ませていたのだ。

しかし、今日は、日中は少しゴタゴタしていたので、

それで、一人遊びをするのも、夕食の後まで、持ち越されてしまったのだった。

とは言え、時間に関係なく、一人遊びは、やはり、とても心地がよいのだ。

今回の一人遊びも、間もなく、絶頂にと達しかけていた。

彼女が、夢中になって、もっと激しく、性感帯をいじっていた、その瞬間である。

「ただいま」

と、いきなり、ソファの背もたれ越しに、上から、ケイが覗いてきた。

「きゃっ！」

ナナは、びっくりして、乱れた服装のまま、上半身を起こした。

驚いたのは、ケイの方も同じだった。

彼は、今日は、ほんとに珍しく、早く仕事を切り上げる事ができたのだ。

それで、いつもよりも、だいぶ早めに、こんな時間に帰宅できたのである。

真面目な彼は、きちんと、普段の朝の言葉を守ってくれただけなのだ。

彼も、この部屋の住民なので、この部屋の鍵は持っている。

自分で、この部屋の中に入る事もできたし、こっそり入室して、

早く帰ってきた事で、ナナを驚き喜ばせる事も出来たのだろう。

しかし、まさか、妻がオナニーしている現場に遭遇してしまうとは、

考えてもいなかったに違いあるまい。

「ご、ごめん」

ケイは、顔を赤くして、小声で謝ると、慌てて、寝室の方へと走り去っていった。

ナナも、赤面して、動揺した状態で、急いで、衣服を着なおしたのだった。

結局、彼女は、寸前で、快感を得る事は出来なかった。

でも、それ以上に、ナナは、ケイに見られてしまった事を、気にしていたのだった。

夫は、寝室の中に引っ込んだまま、なかなか出て来ようとはしない。

やはり、彼の方も、ナナの恥ずかしい秘密を知ってしまい、困っていたのだろうか。

彼の方も、寝室で着替えているフリをして、こっちの出方を伺ってるような感じなのだ。
ナナは、激しい自己嫌悪に陥っていた。
オナニーしていた事がバレちゃったのも、さる事ながら、
自分が、今、欲求不満である事を気付かれたのも、ひどく、みっともなく感じたのだ。
それどころか、ナナの欲求不満の原因が、相手にしてくれないケイのせいだと、
ケイに、余計な事まで考えさせて、心配させてしまったかもしれない。
もう、次から次へと、嫌な事が、ナナの頭には思い浮かんでくるのである。
「私って、ほんと、バカよね」
自分をたしなめるように、半泣き状態のナナは呟いた。
こんな時には、恒例のように、偏頭痛が襲ってくるのだった。
ナナは、本当に、ズキズキと頭が痛くなってきた。
ヘンに頭を悩ませていたから、なおさら、今日の頭痛は激しいのである。
体に良くないから、偏頭痛の薬を飲みすぎないようにと、ケイには止められていたが、
今の痛みは、とても、放置していて、おさまりそうなものではなかった。
彼女は、とうとう、偏頭痛の薬を持ち出してきた。
そして、少し多めの量を、ゴクリと飲み込んだのである。
すると、たちまち、あの酷い痛みは鎮まってきたのだった。
同時に、強い眠気も感じてきた。
ナナは、そのまま、ソファの上で、頭を抱えて、うずくまったのである。
「ナナ。ナナ」
と、ケイの呼ぶ声が聞こえてきた。
ナナは、ハッとして、頭を持ち上げた。
ケイの声は、寝室の方から聞こえてくるのである。
「ナナ。ごめん。
君は、それほどまでも、ボクと愛し合いたかったんだね。
なのに、気付かなくて、本当に悪かった。謝るよ」
寝室の入り口のドアは開いていたが、
その奥に、声は聞こえても、ケイの姿は見えなかった。
代わりに、部屋の中央にベッドがあったのだけは、入り口からも確認できた。
置き場所も、ちょっと変更されているのだ。
このオーバーダウン中は、バラバラに離していたはずの二つのシングルベッドが、
今は、ぴったり、くっつけられているようなのだった。
つまり、二人で並んで寝られる状態に戻されていたのである。
「さあ。今夜は、久しぶりに、一緒に愛し合う事にしよう。
朝まで、君のことは放さないよ。
ほら、早く、こっちにおいで」
ケイが、朗らかに、ナナのことを呼んでいるのである。
それで、ナナも、恐る恐る、寝室の方へ向かってみたのだった。
ナナは、薄暗い寝室の中を、そっと覗き込んだ。
そこには、夫のケイが、笑顔で立っていた。

彼は、素っ裸であり、すでに、いつでも抱き合う準備が整っていたのだ。
「どうだい。これなら、セックスしても、濃厚接触にはならないだろう？」
そう得意げに告げたケイの体には、
頭の上から足の先にまで、全身に、グルグルとサランラップが巻かれていた。
唯一、勃起したペニスにだけ、コンドームが被せられているのである。
それを見たナナは、目を見開いて、顔を大きく引きつらせた。
「いやあああーっ！」
ナナの鋭い悲鳴が、暗い寝室の中に、激しく響き渡った。

第6話 キブngo

1

オーバーダウン計画も、第二段階に入り、もう一週間になるのである。
ウイルス対策の規制も大幅に緩められた第二段階になった事で、
それぞれの居場所に閉じ込められていたナナやケイも、外出が可能になり、
二人は、新居のマンションで、再び、一緒に暮らせるようになった訳なのだが、
そこで、ナナは、ふと違和感を持ち始めたのだった。
そう言えば、ようやく、皆とも、じかに会えるようになったのに、
いまだに、他の人がマスクを外したところを、ナナは見た事がなかったのである。
同居人のケイのマスクなしの顔すらも、直接には見ていないのだ。
基本的に、オーバーダウン期間中は、まだ、マスク着用は義務だった。
他の人が一人でも近くにいる場所では、マスクを取る事は許可されていないのだ。
よって、マスクをつけた状態では不可能な、食事とか歯磨きなどは、
原則として、単独で行なわなければならなかったのだった。
ナナとケイも、同じ部屋で暮らしていながら、時間をずらして、食事をとっていた。
ケイが実際に食事を食べているところは、ナナも見た事がなかったのである。
それ以外の時間も、家の中だろうと外だろうと、二人は、ずっとマスクをしていたのだ。
医者であるケイは、その職業上なのか、より徹底していて、
夜、ベッドで寝ている時すら、マスクを外す事はなかったのだった。
思えば、これって、何とも、歯がゆい話なのである。
「もう少し、オーバーダウンの段階が進めば、マスク着用の義務も、多少は甘くなるさ」と、
夫のケイは、呑気に、笑って言っていたのだが、
ナナの方は、なかなか、納得する事ができなかったのだった。
そもそも、オーバーダウンの第一段階の頃から、
ナナは、身近な人間のマスクを外した姿を、もう長いこと、目にしていなかった。
テレビ電話で話を交わした時も、
彼女の父と母は、実家に二人で暮らしていたので、マスクをしていたし、
あるいは、幼馴染の親友のユウも、まだ小さな我が子と一緒に住んでいたと言うので、
電話の向こう側の、自分の家では、しっかりとマスクを着用していたのである。
オーバーダウンの第二段階になって、ようやく、我が家に戻ってきた夫のケイも、
帰ってきた初日から、すでにマスクをつけたままであり、外した事がなかった。
それどころか、テレビ番組やネットの動画にしたって、
生放送や、つい最近、撮影されたばかりの映像に関しては、

その出演者たちは、まず全員がマスクをしていたのである。

新型コロナウイルスは、口から飛まつとなって、外に飛び出し、他人にうつるらしいのだが、
そうだとすると、これは、あまりにも嚴重すぎるのではなからうか。

ナナがそんな事を考えながら、部屋のソファに座って、怪訝げな顔をしていると、
そばにいたケイが、おかしそうに、声をかけてきたのだった。

「どうしたの、ナナ。難しい顔をしちゃって。

また、頭が痛むのかい」

「違うわ」

と、ナナは、慌てて、返事をした。

「まだ、頻繁に、頭痛には悩まされているのかい」

「そうね。このオーバーダウン期間中は、特に酷かったかも。

頭痛がおさまったあと、ヘンな悪夢のような、幻のようなものを、見たりもしたのよ」

「幻？」

「ええ。多分、ウトウトした時に頭に浮かぶ白昼夢の一種なんでしょうけど。

こないだだって、寝室に、不気味な、ものすごく太い毛虫が這っているのを見たわ。

すごい気持ちが悪かった。

でも、私は、ベッドの上で、動く事ができなかったの。金縛りってヤツなのかしら。

それでさ、これが、寝室にいる夢だったものだから、

しばらくは、現実だか夢だか、区別がつかなかったのよ。

ほんと、怖かったわ」

「そりゃあ、やっぱり、薬の飲み過ぎのせいだよ。

偏頭痛の痛みどめ以外に、いつも、睡眠薬も併用してるんだろ？」

それで、神経が刺激を受けて、よけい、おかしな夢を見てしまうんだ」

「そうかな」

「今後は、薬は、なるべく控えた方がいいかもね」

結局、ナナは、この時は、マスクの話は忘れてしまったのだった。

しかし、翌日、彼女は、すぐ、この疑問をぶり返す事になったのである。

2

その日の昼間は、ナナは、マンションの部屋に閉じこもっていて、

ルシーを相手にして、たわいもなく、遊んでいた。

ルシーは、本来、このマンションの部屋の設備を管理する為の AI なのであるが、
その音声アシスト機能が非常に優秀なので、色々と遊び相手にもなるのだ。

その時、ナナは、ルシーに画像を解析させて、楽しんでいた。

ネットや SNS には、多数の知らない人の顔写真がアップされている。

中には、アプリで加工されまくって、元の写真から、かけ離れしまったものも多いのだ。

ルシーには、そんな顔写真を分析して、加工の有無を見分ける機能もついていたの
だった。

これを使って、片っぱしからチェックしてみると、

いかにも自然に装った写真でも、加工されていたのが分かって、とても面白いのだ。

ナナも、ついつい、この遊びに夢中になっていたのだった。
だが、それが、偶然にも、とんでもない事の発見にも結びついてしまったのである。
『加工されています』
と、今見せた顔写真に対しても、ルシーは加工の判定をくださった。
ナナが、そのスマホに写った画像を見てみると、なんと、ケイの写真なのだった。
他の多数の、ネットから拾い集めた写真の中に、うっかり、紛れ込んでいたらしい。
それは、ナナが、ケイに頼んで、こないだ、自撮りしてもらった写真なのだった。
ナナという時は、ケイは絶対にマスクを取らない為、
「ケイの今この瞬間の顔が見たい」とお願いして、ケイに自分で撮ってきてもらって、
ナナが、身近に置いておこうと思って、受け取ったものだったのである。
マスクを外した、ケイの爽やかな笑顔の写真なのであった。
ナナは、不審に思って、その写真を、もう一度、ルシーにチェックさせてみた。
それでも、やはり、加工ありの判定が出たのだった。
この一件のおかげで、ナナの疑問は再燃する事になってしまったのだ。
自分だけの秘密にしていられなかったナナは、
テレビ電話を通して、この話を、つい、親友のユウにも喋ってしまった。
「う～ん。確かに、おかしな話だけど、どうなんだろうな」
と、電話の向こうで話を聞いていたユウの返事は曖昧なのだった。
「絶対に奇妙よ。ルシーのエラーとは思えないわ。
写真のケイの顔は、きっと、マスクの下の部分は加工していたのよ。
でも、だとしたら、何のために？」
ナナは、あくまで言い張り続けた。
「ナナの言うとおりに、ルシーの写真加工発見の機能は、かなり精度が高いわ。
しかし、その結果、よけいな事まで分かったとも考えられないかしら」
「と言うと？」
「例えば、ケイさんが、口もとに、吹き出物でも出来てたとしたら？
そのぐらいだったら、ケイさんだって、見られると恥ずかしいから、
あらかじめ、修正アプリで消してたかもしれないでしょう。
そんな小さな加工まで、ルシーは、しっかり見逃さなかったのかもしれないわよ」
「えー。そうなのかなあ」
と、ナナは、まだ疑い深げなのだった。
ナナ自身は、今は、部屋に一人だったので、マスクはつけていない。
一方の、電話のスクリーンに映ったユウは、しっかりとマスクをしているのである。
その奥の方からは、幼い子供のものらしい笑い声も聞こえていた。

3

それから二日後。
ケイは、ちょっとだけ休みを貰えたとかで、
真っ昼間に、連絡もなしに、ひょっこりと、マンションに帰ってきた。
予期せぬ、ケイのサプライズ帰宅に、もちろん、新妻のナナも喜んだが、

彼女の頭には、ふと、例の疑問もよぎったのだった。

「まだ、お昼を食べてないんだ。何か、軽く食べられるものはあるかい？」

と、リビングでくつろいでいたケイが、キッチンにいたナナに向けて、話しかけてきた。

そこで、ナナは、自分の昼食として、宅配で届けてもらったピザの残りを出す事にしたのである。

だが、それだけではなかった。

一緒につけたジュースのコップの中に、コソッと自分の睡眠薬を混ぜておいたのである。害はないが、すぐ眠たくなってしまう程度の量の睡眠薬をだ。

ナナは、素知らぬ顔で、そのピザとジュースを、

ソファに座っていたケイの元へと持っていき、テーブルの上に置いた。

ご馳走を前にして、嬉しそうに、ケイは、ナナに礼を言ったのだった。

そのあと、ナナは、すぐにリビングからは離れた。

ナナがそばに居たら、慎重なケイはマスクを外さないし、

それだと、食事也开始られないからである。

しばらく、ナナは、キッチンの方で待機をしていた。

そして、頃合いを見て、リビングに戻ってみたのである。

すると、企んだ通りになっていたのだった。

ケイときたら、食事の最中に眠気に襲われたらしくて、

そのまま、うつむいて、眠ってしまっていたのだ。

きっと、日頃の疲れも溜まっていて、すぐ眠りやすい状態だったのであろう。

あとで、食事中に居眠りしてしまった事を、ケイが気にかけてとしても、

これなら、十分に誤魔化せそうなのである。

ところで、この時のケイは、食事中なので、当然、マスクも外していたのだった。

まさに、彼のマスクなしの素顔を確認できる、絶好のチャンスなのだ。

ただ、あいにく、キッチンから入ってきたばかりのナナの位置からでは、

テーブルに顔を伏せた、ケイの後頭部しか見えていなかった。

果たして、今のケイは、一体、どんな顔をしているのだろうか。

やはり、ユウが推理したように、口もとに吹き出物でもあるのだろうか。

ナナは、ちょっと楽しみながら、ケイのそばに近づいたのであった。

その時、突然、ルシーが警告を発し出した。

『2メートル以上、近づいてはいけません。繰り返します。・・・』

ルシーには、部屋の管理システムや音声アシスト機能以外にも、

自分の所有者がウイルス対策をきちんと実施してるかを監視する機能も付いていた。

持ち主が規定のルールを破りかけると、このように注意してくるのだ。

ナナは、サッとルシーの方に顔を向けた。

「ルシー、よく見て。これは、緊急事態よ。

ケイが倒れているから、私は介護のために近づくだけなの。分かった？」

ナナにそう告げられると、ルシーもピタリと黙ってしまったのだった。

ナナの方も、手慣れたものなのである。

ルシーに監視機能があった事を知ってから、

その監視機能を無効にしてしまう方法も、ちゃっかり、見つけていたのだ。
このように、緊急事態だと思わせたら、ルシーも警告しなくなるのである。
ルシーのうるさい口を閉じさせて、安心したナナは、
あらためて、ケイの元に歩み寄ろうとした。
しかし、そこで、彼女は、思わぬものを見てしまったのだった。
眠っているケイのうなじの辺りに、不気味なものが這っていたのだ。
それは、いつか、夢の中で見たと思っていた巨大毛虫なのである。
人間の腕のように胴体が太くて、真っ黒な毛が一面に生えた、気色の悪い怪物なのだ。
さては、この前に、これを見た時も、夢ではなかったのだろうか。
ナナは、顔を引きつらせ、悲鳴をあげかけた。
怪しい巨大毛虫は、すぐさま、スルスルと、ケイの上から、床へと降りてしまったのである。
それだけではなかった。
この化け物は、ナナの方めがけて、素早く、向かってきたのだ。
ちょっとした間、驚きで、体の動きが止まっていたナナも、慌てて、逃げる事を思い立った。
さいわい、恐怖で、体が硬直していた訳でもなく、すぐ動く事ができたのだった。
彼女は、毛虫に背を向け、バツと走り出したのだ。
ところが、毛虫も、すぐ後ろから、なかなかの速さで、追いかけてくるのである。
ナナは、部屋の中を、とにかく走って、逃げ回った。
ついには、彼女は、玄関の方へと追い詰められてしまったのである。
パニックになっていたナナは、迷わず、玄関のドアを開いた。
足もとにあった靴を履くと、そのまま、部屋の外へと逃走したのである。
まだまだ、彼女は立ち止まろうとはしなかった。
さらに、走り逃げ続けて、ナナはマンションの廊下を横断し、
階段を一気に駆け下りて、とうとう、マンションの外に飛び出してしまったのである。
野外は、気持ちよく、晴れていた。
オーバーダウン期間中だったものだから、道を歩いている人も少ないのだ。
そして、気が動転していたナナは、まだ逃げるのを止めようとはせず、
汗だくになって、もっともっと、街路を駆け逃げようとしたのだった。
そんな時、ナナの前に、一人の人物が、静かに立ちふさがったのである。
親友のユウだった。
なぜか、ユウが、こんな場所で、ナナが来るのを待っていたのだ。
ナナは戸惑ったが、ユウの方は、いたって落ち着いていた。
「せっかく、深入りしないように忠告してあげたのに。
あなたは、秘密を知ってしまいましたね」
ユウは、冷静な口調で、謎めいた事をナナに語りかけてきたのだった。
「ユウ？ なぜ、こんな場所にいるの？
一体、何のことを言っているの？」
おろついたナナは、当然、そのような質問をユウにぶつけたのである。
「全てをお話しましょう。

私たちは、時空を超えて、この世界に降り立ったキブンゴだったのです。
私たちは、この世界への定住を希望していました。
この世界には、私たちも、うまく潜り込めそうでしたからね。
私たちの姿は、口もと以外は、あなたたち人間とそっくりなのです。
それで、私たちの正体をうまく隠せるように、
この世界を、皆がマスクをする環境にと作り変えさせてもらいました。
例の新型ウイルスを世界中にと流行らせてね」
そう喋りながら、ユウは、そおっと、自分のマスクを外したのだった。
彼女の口もとが、ナナの前で、あらわになった。
それを見て、ナナも、啞然としてしまったのである。
ユウの口があるべき部分には、ぽっかりと、黒い穴が空いていたからだ。
深淵のように真っ黒な、完全にまん丸い、不思議な穴なのである。
いや、普通の「穴」という呼び方は正確ではなかったのかもしれない。
その穴と、周囲の皮膚との境目の部分は、はっきりせず、ぼやけていたのだ。
その穴は、どうやら、物質的な穴ではなさそうなのである。
むしろ、空間が歪んで出来た、時空の裂け目のようにも見えたのだった。
この異世界へのゲートを持っている事こそが、きっと、キブンゴなのである。
動揺して、恐怖にかられたナナは、慌てて、逃げ出そうとした。
しかし、ユウの方に背を向け、反対側を見てみると、
そこには、いつの間にか、部屋から降りてきたケイが立っていたのだった。
彼は、口もとには、きちんとマスクを戻している。
「困った奥さまだ。
せっかく、仲良くやっていけそうだったのに。残念だよ」
と、ケイは、本当に落胆しているような口調で言った。
「あなたも、キブンゴだったのね！」
ナナは、思わず、大声で叫んだ。
でも、ケイは、あえて、その質問にまでは答えようとはしなかったのだった。
うろたえたナナは、急いで、周囲をキョロキョロと見回した。
かろうじて、いくらかの市民は、この周りを歩いているのである。
「皆、こっちを見て！
化け物よ！ここに化け物がいるのよ！
早く何とかしないと、この国は乗っ取られてしまうわ！」
ナナは、無我夢中で、大きな声で訴えまくった。
それなのに、そばを歩いている人たちは、誰も、こちらに見向きもしないのだ。
ユウの顔についた黒い穴だって、しっかりと見えていたはずなのである。
「なぜ？ もう！皆、どうしてなのよ！」
全く相手にしてもらえないナナは、泣きながら狼狽して、
いっきに力も抜けて、絶望したように、その場に座り込んでしまった。
もしかすると、キブンゴは、ナナが考えていた以上に、
すでに、もう、沢山の人間とすり替わっていたのかもしれない。

「終わりだよ。ナナ」

そう言いながら、ケイは、ゆっくりと、自分のマスクを外し始めた。

「いや、いや。やめて」

おののきながら、ナナは、泣いて頼んだ。

しかし、ケイは、冷酷にマスクを取ってしまい、

そこには、やっぱり、真っ黒い穴があったのだった。

それだけではなかった。

ナナのしている前で、

ケイの口もとの穴からは、モソモソと、あの巨大毛虫が這い出てきたのだ。

それも、一匹ではなかった。

何匹もが、次々に、ケイの顔の穴からは飛び出てきて、

地面の上にと、ボタボタと、転がり落ちていったのである。

それらは、ゆっくりと地を這いながら、

恐怖で目を見開いていたナナの方へと、じょじょに近づいていった。

第5話 ルシーが見張ってる

1

その日の朝を、誰もが、やや緊張しながら待っていた。
その日とは、すなわち、オーバーダウン計画の第一段階が終了する日の事である。
オーバーダウン計画が始まって以来、
およそ一ヶ月の間、首都の市民たちは、完全なる監禁生活を強いられてきた。
労働者たちは、職場とその関連施設から一歩も外へ出る事を許されなくて、
それ以外の人々は、自宅の中に、すっかり缶詰状態にとされてしまったのだ。
こうやって、それぞれの人間が、全く接触を絶ってしまえば、
あの厄介な新型コロナウイルスも、これ以上、誰かに感染させる恐れもないのである。
この究極のウイルス対策を、市民は辛抱して、一ヶ月間、続けてくれた。
この間に、それぞれの場所に監禁されていた人々も、
ウイルスを持っていたならば、すでに発症したか、
あるいは、自分の体の免疫システムで、勝手に治ってしまったはずであろう。
つまり、オーバーダウン計画が開始されてから一ヶ月後とは、
まさに、この首都内から、ついに、新型コロナウイルスを駆逐できたと考えられる日なのだ。
この長い一ヶ月間が経つのを、市民の全員が、心待ちにしていた。
そして、今日、とうとう、その日がやって来たのである。
テレビやインターネットでは、その数日前から、すでに今日のことを騒ぎ立てていた。
その浮かれた報道に、誰もが、否が応でも、気持ちを高揚させられたのだった。
この約束の日が、先延ばしになったりしない事を、皆が切に願ったのである。
施政者は、決して、市民の期待を裏切ったりはしなかった。
どうやら、オーバーダウン計画は無事に成功していたらしくて、
その日の朝が来た時、とうとう、全ての市民には、外出行為が解禁されたのだ。
労働者たちは、愛しい家族がいる自宅に戻れるようになったし、
自宅に巣ごもりさせられていた人々は、屋外に足を踏み出せるようになったのである。
ナナとケイの若い夫婦とて、それは例外ではなかった。
ナナが待っているマンションの新居へと、夫のケイは、やっと、帰ってこれるのだ。
新婚の彼女たちにとっては、この一ヶ月間の別離は、本当に辛いものであっただろう。
それが、今日から、二人は、再び、一緒に暮らせるようになるのだ。
「とにかく、一回、家へと顔を出す」
と、朝早くから、ケイより連絡をもらったナナは、
ウキウキしながら、玄関とリビングの間を行ったり来たりしていた。

やがて、いきなり、幸せの到着を伝える玄関のベルが聞こえてきたのだ。
ちょうどリビングの方にいたナナは、慌てて、玄関へと走り向かった。
そこには、すでに自分の鍵でドアを開けたケイが、玄関の中に入ってきていたのである。
これまでは、この部屋の玄関のドアは、ナナたちでは開ける事ができなかった。
国によって、強制管理されて、一方的に閉鎖されていたのだ。
それが、自分たちの持っている鍵で開けられたと言う事は、
確かに、オーバーダウンの辛かった監禁状態は解除されたのである。
「ケイ！ おかえり！」
ナナは、嬉しさを隠しきれずに、ケイを、大声で出迎えたのだった。
「ただいま。ナナ」
ケイも、優しい声で答えたのである。
ナナは、すぐにでも、ケイのそばに走り寄ろうとした。
ところが、その行動を、ケイは、すかさず、制したのだった。
「ダメだよ、ナナ。それ以上、近付いたら」
ケイがそんな事を言ったものだから、
ナナは、悲しそうに、顔をしかめて、立ち止まった。
「え。どうしてなの？」
お帰りのハグをしたかったのに」
「それは、まだ無理だよ。
今日からは、オーバーダウンの第二段階に入るんだ」
「第二段階？ オーバーダウン計画は終わったのと違ったの？」
「まだ終わってはいないよ。
さては、ナナ、きちんとニュースを観てなかったな。
オーバーダウンは、これから始まる第二段階を経て、完全達成となるんだ。
これから一ヶ月間は、監禁状態からは解放されたものの、
徹底したウイルス予防とウイルス対策だけは続行する事になる。
そうやって、わずかでも首都内に残ってるかもしれない新型コロナウイルスを、
完璧に根絶やしにしようんだ。
それを達成してこそ、ようやく、オーバーダウンも本当の終了となるのさ」
「ええ～。せっかく、こうして、じかに会えるようになったのに」
しよげるナナは、そう言えば、ケイが、まだガッチリとマスクをしていた事にも気付いた
のである。
オーバーダウン期間中は、家族の前であっても、マスクは必須なのだ。
対するナナは、ずっと自宅内に一人でいたものだから、
すっかり、マスクをつける事をも忘れていたのであった。
「さあ。ナナも、マスクをつけてきて。
ゆっくりと再会を喜ぶのは、それからだ」
「分かったわ」
ナナは、しぶしぶと、先に立って、リビングへと戻ったのだった。

結局、その朝は、ケイは、本当に自宅に少し顔を出しただけで、さっさと、仕事の待っている職場へと出かけてしまったのだった。彼は医者なので、現在は、特に忙しい状態が続いていたのである。ナナは、再び、一人っきりの部屋に残されてしまった。でも、ケイが、少しでも早く、ナナの顔を見たくて、朝だけでも、ちょこっと帰ってきてくれただけでも、良かった方なのかもしれない。そして、ケイは、今度は、今日の夜遅くに戻ってくるのである。それだけ、彼の仕事は、まだまだ多忙なのだ。しかし、愛するナナに会いたいからこそ、どんなに残業しようと、彼は、夜には、きちんと帰ってきてくれるのである。ナナにとっては、これからは、夜が待ち遠しい日々となったのだ。ケイは、朝、家を出て行くにあたり、オーバーダウン第二段階の生活様式をきちんと勉強しておくようにと、ナナに宿題を出していた。だから、ナナも、仕方なく、インターネットで、色々調べたのである。オーバーダウン第二段階の最中の行動規範は、思った以上に厳しかった。例えば、2メートル以内に、お互いに近づいてはいけない。他人のいる前では、必ずマスクをする。他人と、タオルや食器などを共有してはいけない。つまりは、二人以上では同じ場所で食事はできない、などなど。これを、たとえ、家族相手だったとしても実践しなくてはいけないのである。第一段階の監禁状態と比べたら、ほんとに、ただ、皆がじかに会えるようになっただけ、の話なのだ。これでは、ハグやキスだって出来ないのである。「これって、ちょっと、やり過ぎよね」と、ナナは、いつもの調子で、リビングのチェストの上のルシーにと話しかけたのだった。ルシーとは、これまでも説明してきた通り、各家庭に配置された、生活サポート用の小型マスコットロボットの事である。自力では動きはしないものの、電化住宅の設備をオートで管理する機能を内蔵している他、音声アシスト機能によって、簡単な会話もできた為、ちょっとした話相手や遊び相手にもなってくれるのだ。ナナにとっては、これまでの監禁期間中は、唯一、そばにいた話せる友達なのだった。もっとも、今のナナの言葉には、ルシーは反応しなかった。ルシーは、あくまで AI なので、はっきりした質問か命令にしか、受け答えしないのだ。漠然とした会話については、あからさまに無視するのであった。さて、その日も夜が更けてきた。いよいよ、ケイが、再度、帰ってくる時間がやって来たのである。ナナは、自分の夕食は、早々に済ませて、うずうずして、ケイの帰宅を待ち続けていた。

やがて、ケイの帰りを知らせる玄関のベルが鳴ったのだ。
ナナは、マスクをつけながら、急いで、玄関に出迎えに行った。
「ただいま、ナナ」
「おかえり、ケイ」
二人は、本日二度めの再会を果たしたのである。
ただし、どちらもマスクをしていたので、
その喜んでいる顔を、十分には拝む事ができなかった訳なのだが。
「夕食は？」
と、リビングに向かいながら、ナナはケイに尋ねた。
「実は、まだなんだ。
今日は、久しぶりに、ナナの手料理が食べたかったからね」
「うふふ。そう言うと思っていたわ。
だから、ケイの好物ばかりを用意しておいたのよ」
「やったね！」
二人は、和やかな雰囲気、リビングの方へ移動したのだった。
こうした安らげる時間があるこそ、
ケイも、忙殺される日々の仕事に立ち向かえると言うものなのだ。
ケイが、寝室で着替えている最中に、
ナナは、手際よく、リビングのテーブルに、ケイ用の夕食を並べていた。
ケイが戻ってきた時には、夕食の配膳も、完璧な状態になっていたのだ。
「すごいじゃないか」
と、ケイは、喜びの声をあげた。
ナナの方も、その反応を見て、とても嬉しそうなのである。
こうして、テーブルの前に着席したケイの遅い夕食が始まるはずであった。
ところが、ケイは、なかなか、料理に手をつけようとしなかったのである。
「どうしたの？」
じれったくなってきたナナが、ケイに尋ねた。
「ほら。第二段階のルールだよ。
ボクが食べる間、ナナは、少しだけ、この部屋から離れていてくれないかな」
ケイは言った。
「えええ！ ケイが、美味しそうに食べているところを見たかったのに！」
「でも、まだオーバーダウン期間中なんだ。
ウイルス駆逐を成功させる為にも、国の方針には従わなくちゃ」
ケイは、医者だっただけに、よけい、ウイルス予防には忠実だったのである。
しかし、ナナの方は、なかなか、言われた通りにはしなかった。
だって、ようやく、大好きなケイと、また一緒になれたばかりだったのだから。
そう簡単には、離れたくないのである。
「ねえ。ちょっとぐらい、ルールを破ってもいいじゃない」
ナナは、悪戯っぽい調子で言った。
「ダメだよ。守らなくちゃ」

「でも、ここには、私たち二人しかいないんだよ。

何をしてたって、誰にもバレないよ」

そう言いながら、すっかり、その気になっていたナナは、平気で、ケイのそばに近づこうと、歩き出したのだった。

ケイは弱っている様子だったが、

もともと優しい性格なので、強気な態度で、ナナを止める事ができないのだ。

しかし、その時である。

『2メートルを超えました。それ以上の接近はやめてください』

いきなり、そんな声が、部屋の中に響き渡ったのだった。

ナナは、ドキッとして、立ち止まった。

この声は、彼女も、よく知っている声だったのだ。

それは、ルシーの発した声だったのである。

「なに？ 一体、なにが起きたの？」

ナナは、キョトンとしながら、呟いた。

『まだ2メートル以内です。早く離れてください』

再び、ルシーが、そのような警告を発した。

ナナは、動揺しながら、おどおどと、ケイのそばから遠のいたのである。

しばらくは、何がどうしたのかが、よく分からなかった。

「ルシー。なんで、あなたが、そんな事を言うの？」

と、今は沈黙しているルシーに、ナナは話しかけてみた。

だが、ルシーは、無表情のまま、だんまりを続けているのである。

ナナには、なんだか、ルシーが、ナナとケイの仲に妬いているようにも感じられたのだった。

「そうか！ ルシーには、監視機能も付いていたんだ。

もともと、その目的で、国は、各家庭にルシーを配ったんだよ」

閃いたケイが、目を光らせ、つい大きな声を出した。

「え？ どう言う事？」

と、ナナは、まだピンと来てないような感じだった。

「君だって、今、見ただろう。

ルシーは、オーバーダウン作戦の第二段階で、

他人が見ていない場所でのルール違反者が出るのを見越した上で、

首都内の全市民に配られたものだったんだ。

こんな風に、ルールを破りかけた人を見つけたら、

すぐ警告を出すようになっているんだよ。

なるほど。国も、ここまで、手はずを整えていたのか」

「感心してる場合じゃないわよ。

じゃあ、私たちは、ずっと、誰かに監視されているって訳なの？

そんなの、イヤよ。私生活を全部、見られちゃってるのよ」

「大丈夫。ルシーは、多分、自律タイプの AI だ。

ルシーの行動をいちいち操作している人間なんて、存在してないよ。

ボクたちの様子は、じかには、きっと、誰にも見られてはいないさ」
「そう言われても、あんまり、いい気はしないわ。
うるさいから、ルシーの電源を切っちゃおうかしら」
「それは、ダメだよ。
恐らく、ルシーのネット回線は、中央の電波受信センターに繋がってるはずだ。
もし、このルシーが動いてないと、その事がセンターに感知されて、
すぐ、ルシーをまた動かすようにと、連絡が来るはずだよ。
それに従わなかったりしたら、罰則だって、あるかもしれない」
「じゃあ、私たちは、ずっと、ルシーに監視されてるしかないって事なの？」
ナナの表情が曇った。
「まあまあ、そんなに渋ったりしないで。
あくまで、オーバーダウン期間中だけの話だろう。
それよりも、これを見てごらんよ」
そう言いながら、興奮ぎみのケイが、自分のマスクを外してみた。
すると、たちまち、ルシーが反応したのだった。
『警告です。マスクをつけてください』
ルシーは、無感情に注意し続けた。
「え、え？ どう言う事？
ルシーって、マスクをつけてるかどうか、分かっちゃうの？」
ナナは、キョトンとした。
「どうやら、ルシーには、熱感知センサーがついていて、
それで、人と人の距離も見分ける事ができるんだよ。
マスクをしてるかどうか、顔の口のあたりの温度が変化するから、判別できるんだ」
マスクをかけ直しながら、ケイは、楽しそうに説明したのだった。
すると、ルシーのやかましい警告の方も止まったのである。
「でも、だけどさ、今までは、私がマスクをしてなくても、
ルシーは、一度も注意してきた事はなかったわよ」
「そりゃあ、一人で、この部屋の中にいたからさ。
他に誰かがいなければ、マスクをする必要もないだろう。
ルシーは、そこまで見分ける事ができるんだ。
めちゃくちゃ賢い AI が搭載されたロボットなんだよ」
ケイは、すっかり感心しまくっていたようだが、
ナナの方は、まだ腑に落ちない様子なのだった。
「国に、とんだ機械を押し付けられちゃったみたいね。
このルシーがいる限り、私たち、ずっと、イチャつく事もできないのかしら」
「仕方がないよ。まだオーバーダウン期間中なんだ。
多少の自由は我慢しなくっちゃね。
そうだ。ボクたちの子供ができたとも思えばいいんだよ」
ケイは、すました口調で言った。
なんとなく、彼は、嬉しそうにも見えたが、

実は、ケイの方が、ナナ以上に、早く、自分たちの二世を欲しがっていたのである。

「子供ねえ。

だとすれば、いっぱい世話のかかる、泣き虫の赤ちゃん、ってところかしらね。

やれやれ。確かに、ルシーって、これまでも、そんな風だったかもしれないわ」
ナナも、ルシーを眺めながら、げんなりした感じで、呟いたのだった。

3

そして、真夜中になった。

ケイは、明日も、朝早くから職場に行かなくちゃいけないので、
ナナという時間を、もっと楽しみたかったのも山々だったのだが、
やむなく、就寝する事にしたのである。

何よりも、彼の仕事は、ミスの許されない医療従事でもあった事だし、
きちんと体を休めておくのも、大切な務めの一つだったのだ。

しかし、ナナの方は、この時を、逆に、ソワソワしながら、待っていたようなのも
あった。

ナナとケイは、リビングの照明を消すと、二人で一緒に寝室入りをした。

寝室のドアも、ガッチリと閉めてしまったのである。

すると、途端に、おしとやかにしていたナナは、元気を取り戻したのだった。

今までは、彼女も、ルシーのことを気にかけすぎて、

どうも、伸び伸びとは振るまえなかったのである。

「さあ、ケイ。やっと、私たちは自由よ。

寝る前に、もう少し、楽しもうよ」

ナナは、嬉しさいっぱいに、生き生きした感じで、そう口にしたのだった。

「おいおい、急になんだよ」

と、ケイも、つい苦笑する。

「だって、ここなら、ルシーにも見られていないわ。

抱き合おうが、キスしようが、誰にも咎められないわ」

そう言いながら、ナナは、早くも、自分のマスクを外していたのだった。

「困った奥さまだ。

じゃあ、ほんのちょっとだけだよ。満足したら、すぐ寝るんだよ」

と返しながらも、ケイも、まんざらでもなさそうな雰囲気なのであった。

彼も、新妻の体に直接触れるのは、ひと月ぶりとなるのである。

ナナは、満面の笑みを浮かべて、ケイのもとに歩み寄ろうとした。

だが、その瞬間なのだ。

『2メートルの間隔をあげてください。繰り返します。・・・』

またしても、ルシーの警告する音声が、寝室にと大きく響き渡ったのだった。

さては、部屋のどこかに、スピーカーでもあって、そこから流していたらしい。

ナナもケイも、ギョッとして、立ちすくんだのだった。

「なによ。どういう事？」

呆然としながら、ナナは呟いた。

二人が2メートル以上離れない限りは、ルシーの警告も止まらないのである。

「ああ、そうか！ ルシーは、この自宅の設備の管理も担当してたっけ。

それで、この寝室の中の様子も覗く事ができたんだよ」

カラクリに気がついたケイが、そう口にしたのだった。

「え、え？ 説明して」

「つまり、ルシーは、このマンションの部屋の機能を、全て、自由に操れるんだ。

この寝室にも、防犯カメラとかが付いているんだろう。

ルシーは、そのカメラを通して、今のボクたちも観察してたんだ」

「そ、そんな～」

ナナは、思わぬ事実を知って、うろたえたのだった。

そんな風に、寝ている時まで監視されていたと言うのでは、

一秒たりとも、心を休ませる事ができないのである。

しかし、言われてみれば、

確かに、これまでも、思い当たるような節は無い訳でもなかったのだった。

「まあ、そんなとこだ。

残念だけど、ここで、こっそり遊んだりするのは、あきらめよう。

ベッドも、少し離して寝る事にした方がいいのかもしれないね」

ケイの方は、けっこう、あっさりと、現状を受け入れてしまったのだった。

でも、寝室での戯れに、たっぶり期待していたナナの方は、全然、納得がいかないのである。

「やだ、やだ！

ほんとに、ちょっとだけでいいからさ、ケイとスキンシップしたいよお」

ナナは、泣きべそをかいて、自分の思いを強行しようとした。

だが、それは全く実現できない話だったのである。

と言うのも、ナナがケイのそばに近付くなり、

ルシーの警告する声が、寝室中にガンガンと響き続けて、

とてもじゃないけど、うっとり抱き合えるようなムードではなくなってしまったからなのであった。

4

とうとう、翌朝が来てしまった。

ナナとケイは、あのあと、おとなしく眠る事にして、

そのまま、次の日を迎える事となったのである。

ナナは、一時はふてくされて、かなり興奮していたものの、

服用している睡眠薬のおかげで、なんとか眠る事ができたみたいなのだった。

ケイの方は、もう翌日から、朝早くよりの出勤だったので、

そう、神経質になっている訳にもいかなかったのである。

このように、自宅通いをするのは、

職場に泊まっていた頃よりも、ハードスケジュールになってしまったのだが、

そうであっても、彼は、毎日、我が家に戻りたいと思っていたのだった。
ほんとに、家庭を大事にする旦那さんなのである。
さて、ケイは、朝から、ナナの様子を心配していたのだが、
意外にも、彼女は、昨夜のことも無かったかのように、ケロツとしていた。
全然、上機嫌にと戻っていたのである。
それどころか、彼女は、
「これから出かけるケイの事を、マンションの外まで見送りたい」
とも言い出した。
思えば、ナナも、ずっとマンションの部屋に閉じ込められていたのであり、
「早く屋外の空気を思いっきり吸いたい」みたいな事を、
これまでも、ケイへとかけた電話では、よくグチっていたのである。
そのへんの気持ちを汲み取って、ケイも、ナナの申し入れを認めてあげたのだった。
ナナは、大喜びしているのであり、
ルシーに抱いた不満も、すっかり、消え去ったかのようにも見えた。
「ルシー。お留守番、頼んだわね」
と、出かける直前のナナは、にこやかに、ルシーにも話しかけていたので、
ケイも安心して、少し、胸をなでおろしたのである。
こうして、ナナとケイは、一緒に、マンションの自宅を出た。
なるべく2メートルの距離を保ちつつ、それでも、常に共にいて、
仲良く、マンションの一階にまで、降りていったのだ。
二人は、とうとう、マンションの外へと出てきた。
ナナの方は、久しぶりに、屋外の光を浴びたからなのか、とても、清々しい笑みを浮かべたのである。
早朝だったからなのか、
あるいは、まだオーバーダウン期間と言う事で、外出する人が少なかったのか、
通りには、まるで、歩いている人間の姿は見かけなかった。
かろうじて、通りを行き来しているものと言えば、
宅配物を搬送中の自動走行カーとかドローンばかりなのだ。
なんだか、町全部を、ナナとケイの二人で占領しちゃったような爽快さなのである。
ここで、ついに、ナナが本心を表したのだった。
「さあ。ケイ。ここなら、邪魔者はいないわ」
と、彼女は、ニコニコしながら、言った。
「おい、ナナ。何を考えているんだい」
ケイは、キョトンとした。
「うふふ。ルシーに見られてないわ。
ちょっとだけ、抱き合って、そして、キスしようよ」
そうなのだ。ナナは、外の空気を吸う以上に、それがお目当てだったのである。
だから、さっきから、なおさら機嫌が良かったのだ。
「ダメだよ。たとえルシーにチェックされてなくても、ルールは守らないと」
真面目なケイは、そう返した。

「もう！ほんの少しでいいのよ。それで、私も満足するわ。

ねえねえ。誰にも見られてないんだから、いいでしょう？」

ナナも、言い出したら、とことん、譲らないのであった。

「困った奥さまだ。

じゃあ、ほんとに、ちょっとだけだよ。

今日、一回だけと言う約束だよ。それで、もう満足するんだよ」

「そこなくっちゃ！」

とうとうケイを説き伏せる事に成功して、

ナナは、嬉しさに包まれて、ケイの胸もとに飛び込もうとしたのだった。

その時である。

『近すぎます。離れてください。これ以上は、近づいてはいけません』

またしても、そんな音声聞こえてきたのであった。

ナナは、ビクッとして、立ち止まった。

今の音声は、彼女の服のポケットから発せられたのである。

そこには、ナナのスマホが入っていた。

どうやら、そのスマホから流れ出た音声らしいのだ。

ナナは、ケイに抱きつくのも忘れて、

恐る恐る、ポケットから、自分のスマホを取り出してみた。

見てみると、勝手にアプリが動き出していたのだ。

それは、ナナがダウンロードした記憶もないアプリだった。

そのアプリが、今、ナナに対して警告を促したのである。

そのアプリこそ、ルシーが無断でスマホの中にと忍ばせておいた、

自分の分身的存在のスマホ用アプリなのだった。

ルシーは、そうやって、自分の分身アプリを、

首都内の全ての市民のスマホの中に勝手に入れていたのである。

「ちょっと！ここは、マンションの外なのよ！

監視カメラだって、すぐそばには無いはずなのに、

どうして、私たちが近づいた事が分かるのよ！」

ナナは、顔を真っ赤にして、ヒステリックに叫んだ。

実は、スマホ内の分身ルシーは、

この国の超優秀なGPSを使って、人と人との間の距離を測っていたのである。

当然、ケイが持っているスマホにも、分身ルシーが潜んでいた訳で、

ルシーは、ケイとナナの二台のスマホを使って、二人の間の距離を計算してみせたのだ。

スマホを持っている限りは、誰一人、ルシーの監視からは逃げられないのである。

「もう！どこまで、私たちの邪魔をすれば、気がすむのよ！

バカ、バカ！ルシーったら、いい加減にしてよ！

もう、私たちの事は、ほっといてちょうだい！」

泣き顔のナナは、目くじらを立てて、わめき続けた。

もはや、ケイとイチャつく事すらも忘れてしまっているのである。

そのケイは、すぐそばで、妻のご乱心ぶりに、すっかりと弱り果てていた。

そして、ルシーもまた、この二人が一定の距離まで離れない限りは、
しつこく、大きな音で、いつまでも、警告のメッセージを発していたのだった。

第4話 憧れの屋外

「ねえ。ケイは、今は、どんな風な生活を送ってるの？」

ナナは、テレビ電話のスクリーン越しに、夫のケイに尋ねてみた。

それは、ナナが、前から気になっていた話題でもあった。

オーバーダウンが始まって、間もなく、ひと月近くが経とうとしている。

その間、首都の全ての市民は、各所に監禁状態にとされてしまった。

働く人々は、職場とその周辺に、

そうじゃない扶養家族らは、自分の家の中にと閉じ込められて、

そこから一步でも外へと移動するのを、完全に禁止されてしまったのだ。

当然、そのような政策のおかげで、家族はバラバラになり、引き裂かれた。

ナナとケイの若夫婦も、もう、何週間もじかに会えていないのである。

妻のナナは、新居のマンションの部屋で一人きりの生活だったし、

夫のケイは、医者として、勤務先の病院に泊まり込む日々を送っていたのだ。

二人は、せいぜい、ケイの休憩時間や夜遅い時間などに、

こうやって、テレビ電話で会話をすることだけを、ささやかな楽しみとしていたのだった。

「ボクの方は、現在は、病院の近くにあるホテルを、無償で、宿泊場所として使わせてもらってるよ。

病院内の当直室だけでは、病院の全従業員は泊まりきれないからね」

ケイが、丁寧に答えてくれた。

「わあっ。じゃあ、病院とホテルの間を移動中は、屋外も歩けるのね！」

羨ましそうに、ナナが言った。

「外に出られると言っても、たかだか、100メートルほどだよ。

しかも、途中での寄り道とかは、いっさい許してもらえないしね。

まるで、強制収容所で働かされているようなものだよ」

ケイは、げんなりした口調で返した。

「でも、少しは、外の空気を深呼吸とかも出来るのでしょうか？ いいなあ」

「そこまでのものでもないよ」

「いいえ。私なんか、もう何週間も、部屋から出ていないのよ。

それに比べたら、まるで天国よ！」

そんな時、このマンションの部屋の全ての管理を行なっているルシーが、

唐突に、音声アシストで、最新の報告をしてきたのだった。

『外の宅配ボックスに、新しい荷物が届いています』

まるで、仲のいいナナとケイに横やりを入れるかのようなタイミングなのであった。

「あ。荷物が来てるって。そろそろ、切るわ」
と、ナナが言った。
「じゃあ、今夜は忙しいから、次に電話ができるのは明日の夜かな」
「分かったわ。待ってるわよ。バイバイ」
以前は、二人が電話の会話を締める時は、もっと名残惜しんでいたものだったが、さすがに、それがひと月も続くと、あっさりと切るようになっていたのであった。テレビ電話のスクリーン上のケイの顔が見えなくなると、
ナナは、すぐに、玄関の方へと足を向けた。
このマンションの部屋は、最新式の全自動システムになっていたのも、宅配物が届いても、わざわざ、部屋の外まで取りに行く必要がないのである。配送する側も、廊下にある宅配ボックスに荷物を入れるだけで済んだし、ボックスの中の荷物は、オートで玄関の中にまで送り込まれたのだ。
ナナが玄関まで来て、宅配ボックスを確認すると、届いていたのは、先日、ネット通販で頼んでおいたマンガのコミックスだった。発売されたばかりの最新刊である。
ナナは、ばあっと、幸せそうな笑みを浮かべたのだった。
彼女は、今、このマンガにハマっていて、この最新刊を楽しみにしていたからだ。今のネット通販は、サービスがたいそう充実しており、こんな小さな本一冊だけでも、きちんと親切に届けてくれるのである。もっと些細なものでも、ネット通販では簡単に購入できて、人々は、わざわざ、外出しないでも、何でも買えるような環境になっていたのだ。逆に言うと、このような流通システムが十分に完成されていたからこそ、オーバーダウンみたいな、厳しい政策を実施する事も、可能になっていたのであった。

ナナが暮らしているマンションの部屋からは、立地条件が悪くて、窓から外がよく見えなかった。窓の周りの空間は、すっかり、他のビルにと囲まれていたのである。真下に目を向けても、そこには、人が歩けるような道は存在していなかった。そこは、宅配物を運ぶ自動走行カーの専門道路になっていたのである。見上げてみても、かろうじて、空の青い色が確認できた、と言った感じだ。そんな訳で、この部屋の中に、ずっと閉じこもっていると、息苦しくて、閉塞感を抱かされる一方なのであり、ますます、ナナの屋外への憧れも強まっていくようなのであった。さて。
その日の昼間は、ナナは、親友のユウのもとへと、雑談目的の電話をかけていた。ユウの家は、一人暮らしのナナとは対照的に、テレビ電話のスクリーン越しに見ても、とても賑やかそうだった。電話のスクリーンの外からは、絶えず、誰かの声が聞こえてきたし、ナナと喋っているユウの後ろを、ユウの旦那や幼い子供が横切ったりもしたのだ。

「そうか。ケイさんも大変なのね」

と、ナナの話聞きながら、おっとりした雰囲気のコウは頷いてくれた。

「早く、オーバーダウンも終わってくれないものかしらね」

ナナは、ため息をついてみせた。

「同感よ。もっとも、私のところは、寂しいからじゃなくて、忙しすぎるのよね。

うちとこの旦那は、

出ていったきり、帰ってこなくなったのではなく、

オーバーダウン中は、テレワークをする事に決めたから、全く、家の外へは出ていかないのよ。

愛する夫だろうと、さすがに、こんなに長く一緒にいたら、もう十分よね。

しかも、まるで、子供が一人増えたみたいに、世話が掛かるのよ」

コウがぼやくと、スクリーンの外から、何やら、旦那が咳き込む音が聞こえてきた。

「あら。旦那さんに聞かれちゃったんじゃない？」

ナナに笑って言われると、

コウは、悪戯っぽく、肩をすくめてみせたのだった。

「この程度のグチをこぼすぐらいなら、平気よ。

まあ、私のところは、もともと、まだ小さな子供がいたし、

旦那の面倒が増えたのも、ついでだ、と思えばいいのかな。

いざとなったら、旦那に、子供の相手を任せる事もできるしね。

それと比べたら、すでに就学した子供のいた家庭は、かなり大変らしいわよ。

いずれの学校も閉鎖されちゃって、通常の登校は禁止になり、

全部、家庭でのオンライン学習に切り替えられてしまってるんだって。

それこそ、そんな家の奥さんは、ゆっくり、休む暇もないでしょうね」

「どこも大変なのね」

「全く」

その時、ナナの部屋のルシーが作動して、新たな報告を告げた。

『宅配ボックスに、たった今、荷物が届きました。

内容は、まだ温かい状態の食料品です。

すぐ取りに行く事を、お勧めします』

つまり、出前で頼んでいた昼食が届いたのである。

賢いルシーは、きちんと、そんな分別までして、伝えてくれるのだった。

「あ。お昼のお弁当が届いたみたいだわ。

そろそろ、切るわね」

ナナは言った。

「ふふ。今、聞こえた声は、ルシーね。

あなたも、ルシーが話相手になってくれてるみたいで、良かったじゃない」

「やだ。やめてよお。

確かに、ルシーと遊んでいたら、それなりに飽きはしないけど、

でも、そうであっても、やはり、ルシーはただの機械よ」

利口すぎる AI のルシーに、時々、ドキリとさせられる事もあったものだから、

ナナは、ユウの冗談には困惑しつつも、電話を切ったのだった。

夜は、ナナは、またテレビ電話を通して、ケイと繋がっていた。

それは、夫婦の絆を薄めない為の、大切なルーティーンでもあったのだ。

「オーバーダウンが始まって、ホームレスや、ネットカフェ難民とかは、どうなったのかしら？」

ナナは、気になっていた事を口にしてみた。

「そう言う人たちにも、国は、無償で、ホテルの部屋を提供したみたいだよ。

食費や生活費も出してもらえているらしい。

その結果、以前より、暮らしが良くなった人も多かったんじゃないのかな」

博識なケイは、分かる限り、ナナの素朴な疑問にも答えてくれたのだった。

「国も太っ腹ね。そんなに、皆にと、お金をバラまけるんだ」

「このオーバーダウン作戦には、国家の威信がかかっているらしいからね。

絶対、成功させなくちゃいけないから、予算をケチってもいられないんだろう。

それに、オーバーダウンさえ終われば、経済活動を元の状態にまで戻せて、

この作戦で使った出費は、いくらでも取り返せるんだ。

必ず、そうなるようにとの、先行投資ってわけさ。

それにしても、君は、なぜ、こんな事に急に興味を持ち出したんだい？」

「今、この都市で、建物の外を自由に歩いている人はいないのかな、と思って」

「おやおや。まだ、その事を考えていたのか」

「当前よ。私も、そろそろ、屋外に出て、のびのびと振舞ってみたいわ。

もう、一ヶ月も、家の中に閉じこもったままなのよ。

この状態が続くと、いい加減、本当に、おかしくなっちゃいそうだわ」

「て言うか、そろそろ、一ヶ月だろう？」

多分、もうすぐ、オーバーダウンの監禁政策も解除されるはずだよ。

最初っから、そう言う期間決めだったんだしね」

「でも、その約束は、本当に信用できるの？」

土壇場になって、また少し延期する、とか言い出したりしない？」

「そこは、ちょっと、分からないよ」

「ほらね！

じゃあ、やっぱり、このまま、ジッと待ってなんて、いられないわ」

「やれやれ。困った奥さまだ。

それなら、ボクの方から、素敵なプレゼントでも送ってあげるからさ、

そしたら、機嫌を直して、辛抱してくれるかな」

「ええ！ またあ？」

「あれ。もしかして、この前の贈り物は気に入らなかったのかい？」

「それは、そのう……」

「よし。今度は、君が、もっと喜ぶようなものを送ってあげるよ」

「ま、待ってよ！ ちょっと」

ナナは、うろたえていた様子だったが、

ケイは、楽しそうに笑いながら、電話を切ってしまったのであった。

ナナは、ついに、絶対に、このマンションの外に出てやる、と決意した。

だが、その為には、まず、大きな障害があった。

ナナが住んでいる、この部屋は、オール電化住宅なのであり、

その管理は、全て、ルシーに委ねられていたのだ。

玄関の鍵も、ナナだって持っていたにも関わらず、

オーバーダウン期間中は、ルシーの許可が無ければ、ドアは開けなかったのである。

自分の家なのに、自由に入出入りできないなんて、おかしい気がするのだが、

それがオーバーダウンなのだから、仕方がない。

政府は、そうやって、市民の身勝手な動きをコントロールする狙いもあって、

便利なルシーを、首都内の全市民へと提供していた訳なのである。

だから、ナナがマンションの外へ飛び出す為には、

まずは、ルシーにドアを開けさせる為の、しっかりした理由付けが必要なのだった。

しかし、それが、なかなか難題だったのである。

例えば、知人の葬式や結婚式ですら、外出の理由にはならなかった。

葬式も結婚も、オーバーダウン期間が終わるまで待つ事が推奨されていたのだ。

どうしても、すぐに実行したいのであれば、

実際には会場には人を集めないで、オンライン形式で行なう事が提案されていた。

どこまでも、オーバーダウン中の外出は認めてもらえないのである。

いっその事、部屋の中を放火してみて、火事の状態になったら、

さすがのルシーも、玄関のドアを開けるのではなかろうか。

いや、そもそも、この電化住宅では、放火する事そのものが無理かもしれない。

消火システムも完璧だから、大火災になってしまう危険もないのだ。

いろいろと考えてみたが、次にナナが思いついたのは、ヘアカットだった。

基本的に、オーバーダウン期間中は、じかに人と会う事もないので、

あんまり、外見を気にする必要もなかったのだが、

それでも、髪が伸びすぎたら、さすがに切らざるを得ないのだ。

原則として、自分でカットする事が勧められていたのだが、

どうしても、自分で髪を切れない個人だって居るはずであろう。

そんな訳で、そうした人向けに、特別に開店している理髪店もあるのではないかと、

と、ナナは睨んだのだった。

そうと決まれば、彼女は、片っぱしから、情報を調べてみたのである。

ほとんどの理髪店は、やはり、オーバーダウン中は休業していた。

でも、間もなく、営業している理髪店を発見したのだった。

しかも、そこは、政府公認の理髪店なのだ。

つまり、その店では、堂々と髪の手入れをしてもらえるようなのである。

ナナは、さっそく、その店に、予約の電話をかけてみた。

「あとう。髪を少し切ってもらいたいのですが」

「はい、分かりました。すぐ手配いたします」

「時間は、いつ頃が空いていますか？」

「準備が整い次第、お客様の家に出向かせていただきます」

「え？ そちらが、こちらに来てくれるのですか」

「はい。出張サービスとなっております」

「時間はありますので、私の方から店に行っても、構わないのですが」

「申し訳ありませんが、来店客は受け付けていないのです」

しかも、もっと詳しく話を伺っていくと、
さらに驚くべき理髪店のシステムが判明してきたのだった。
なんと、家まで来てくれる存在と言うのも、
人間の理髪師ではなく、散髪用のマシンだと言うのだ。
その散髪マシンを、本店からリモートで操作して、髪を切るとの事なのだった。
ヘアカットも、今や、そこまで機械化が進んでいたのだ。
そして、だからこそ、この理髪店は、政府のお墨付きで営業が許されていたのである。
あくまで、第三者同士が会うと言う行為は、回避されているようなのだった。
とてもじゃないけど、リモートの散髪なんて、不安でしょうがないので、
ナナも、慌てて、この理髪店への散髪予約はキャンセルしたのだった。
「もう、ダメねえ。あやうく、余計な事をするところだったわ」
と、彼女は、素直に自分の失敗を認めて、小さく呟いた。
では、他には、どのような手があるだろうか。
この調子だと、どうやら、よっぽどの用事じゃない限り、
何でも、リモート方式の出張で済まされてしまいそうな感じなのである。
しかし、さすがに、本人がケガをしたり、病気になれば、
リモートとばかりも行かないであろう。
そこそこの重症であれば、自宅治療ではなく、病院に連れていってもらえるはずだ。
ところが、そう都合よく、病人になるのも難しいのであった。
なぜなら、ルシーは、部屋を管理していただけではなく、
同時に、その部屋の住民であるナナの体調も、逐一、記録していたからだ。
ナナの知らないうちに、熱感知センサーで体温を測ったり、
その日の食事のカロリーや、体重の変化まで調べてくれていたのである。
これでは、仮病もウソも、簡単に見破られてしまうのだ。
かと言って、わざと大怪我してみせるような度胸も、ナナには無かった。
そもそも、このルシーの徹底した健康管理システムは、
新型ウイルスを発症してないかどうかを速攻で発見する事を一番の目的に、
各家庭のルシーにと装備されたものだったのである。
ところが、その有難い健康管理システムが、
まんまと、ナナの外出計画までもを阻んでしまったのであった。
ナナは、お風呂が壊れた事にして、銭湯に行く事も考えてみた。
だが、ルシーに室内の具合を全面管理されているものだから、
まずは、「バスルームが故障している」という嘘が使えないのだった。
もっとも、その嘘が通用していたところで、

ナナは、マンションを出て、銭湯に行く事はできなかったであろう。
やはり、市内のあらゆる銭湯は閉まっていたし、
代わりに、移動式のシャワールームが、各家庭へと出張し、貸し出されるサービスが、
実は、今の首都内では採用されていたのである。
これで、風呂場のない家庭だって、外に湯を浴びに行かなくても済む訳だ。
全く、家の外に出ようにも、何もかもが八方ふさがりなのであった。
現代の進んだ機械文明においては、
ここまで、あらゆる事が、自宅の中だけにいても、出来るようになっていたのだ。
何人も、わざわざ、外まで出かける必要はない次第なのである。
さて、こんな風に、ナナが考えあぐねていた最中に、
ひょっこり、ルシーが新規の報告を伝えてきたのだった。
『宅配ボックスに、新しい荷物が届きました』
毎日のように、実によく荷物が来るのだ。
この時の配送物は、前にケイが予告していた、ナナへのプレゼントであった。
しかし、このルシーの報告を耳にして、
ナナは、鋭く、ハッと、ある事に気が付いたのである。

「こちらは、食品配送サービスのフードランニングです。

我が社では、これまで、
自動走行カーやドローンを主戦力にして、その宅配業務を展開してきましたが、
オーバーダウンが始まってからは、仕事も一気に増えてしまい、
とても、AIロボットだけでは、作業をこなさきれない状況が続いていました。
なので、人間のバイトの方でも、協力して下さるのでしたら、大歓迎です。
本当に、我が社での労働をご希望いたしますか？」

電話先の宅配業者の面接官は、そのように、ナナにと尋ねてきた。

「はい。もちろんです」

と、ナナは、明るく、元気に返事をしたのだった。

「事前にご説明いたしますと、

任務は、市内のあちこちに、出来立ての料理を届けるデリバリーとなります。
決してラクではない仕事なのですが、それでも構いませんか？」

「全然、問題ありませんわ」

「そこそこの肉体労働なのですが、体力面で不安はないでしょうか？」

「はい」

ナナは、歯切れよく答えたが、実は、これには少し虚偽が混じっていた。
ナナは、ほんとは、めいっぱい、インドア系の人間だったし、
今だって、頭痛持ちで、不眠症もひどくて、薬の手放せない体だったのだ。
しかし、彼女にとっては、そんな話は小さな事なのであった。
ここで、もっとも重要なのは、このバイトに採用してもらえれば、理由もできて、
今すぐ、堂々と、屋外を動き回れるようになる、と言う点なのだ。
その為だったら、重労働も、仕事の内容も、全く、気にならないのである。

思えば、ケイがナナに宅配でプレゼントを送ってくれたからこそ、彼女も、このアイデアを閃けたのだとも言えよう。

これこそが、ケイからの最高のプレゼントになったのではなかろうか。

ナナが宅配の仕事を始めたなどと知ると、ケイも驚くに違いない。

ましてや、ナナがケイのもとに荷物を届ける事があったりしたら、果たして、ケイは、どんな顔をする事であろう？

そんな事を想像しても、ナナは、つい、可笑しくなってきたのである。

かくて、相手からの採用の返事を受ける前から、

ナナは、早くも、屋外の清々しい空気や明るい日差しなどを思い浮かべて、心は、すっかり、弾んでいたのだった。

第3話 恋する電化住宅

1 やきもち

オーバーダウンが始まって、半月が経とうとしていた。
この国の首都の市民たちも、もう二週間近く、監禁状態が続いているのだ。
ナナとケイの新婚夫婦も、そうした閉じ込められた市民の一人であった。
妻のナナの方は、新居のマンションの部屋に一人ぼっちにされ、
はじめの頃は、その圧倒的な不安と孤独から、
絶望的な恐怖にかられたり、猜疑心にとらわれたりして、
妄想を抱き、錯乱し、パニックを起こしかけた事もあったのだが、
最近では、ようやく、新しい環境にも馴染んできたようで、
どうにか、平常心を取り戻して、静かに暮らしていたみたいなのだった。
彼女が、やっと、心が落ち着いてきた理由としては、
夫のケイが、非常に献身的で小まめだったおかげでもある。
彼は、医者として、缶詰になって、病院で働いていたにも関わらず、
毎日のナナへの電話連絡だけは、絶対に欠かさなかったのだ。
それは、まさに、ケイからナナへの愛の定期確認だったとも言えた。
こうしたケイの優しい電話連絡すら、最初は、ナナに不安を与える事もあったようだが、
ナナが現状に慣れ始めるにつれて、
ケイの電話までもが、ナナの病的な妄想を掻き立てる事も無くなっていったのだった。
むしろ、ナナは、ケイからの電話が、一番、楽しみなものとなり、
今を生きていく為の大切な希望となっていったのだ。
そして、今夜もまた、ナナは、ケイと、テレビ電話で、幸せいっぱい語り合っていた
のである。
だが、いつまでも幸福な時間を続ける訳にもいかない。
今日も、そろそろ、この夢の時をお開きにする瞬間が近づいてきたのだった。
「おっと。もう、こんな時間だ。そろそろ、電話を切らないと」
時計を見ながら、電話のスクリーンの向こうにいたケイが言った。
「ええ！ もう、終わっちゃうの？」
悲しそうな口調で、ナナが返した。
「仕方ないよ。明日だって、ボクは朝から仕事なんだ。
ミスしないように、きちんと夜は休んでおかないと。
明日も、夜には電話をかけるから、今日はこれで我慢して」
「じゃあさあ」

と、ナナが、急に甘えた声を出した。

「なんだい」

「お別れのキスをしようよ。」

「そしたら、許してあげる」

そう言って、ナナは、目をつぶって、唇を突き出してみせたのだった。

「おいおい。やめろよ。」

「職場の連中が来たら、見られてしまうじゃないか」

ケイは、照れながら、オロオロと周りを見渡した。

「だったら、今度から、」

「職場の人が絶対に邪魔しに来ないような場所から、電話をかけたらいじゃない」

ナナは、すまして、そう答えるのであった。

「もう。困った奥さまだな。」

「じゃあ、ほんの真似事だけだよ」

優しいケイは、照れ笑いしながらも、口もとのマスクをずらした。

一人暮らしのナナは、普段からマスクを外していたのだが、

共同生活をしているケイの方は、常時、マスクをつけていたのだ。

そして、彼は、テレビ電話むけて、こっそりと、自身のキス顔を披露してくれたのである。

嬉しくなったナナは、自分のキス顔を、どんどん、電話のスクリーンの方に近付けていった。

そして、彼女の唇は、ついにスクリーンに当たってしまったのである。

ナナの口は、硬いスクリーンの感触だけを得たが、

それでも、彼女は、けっこうゾクゾクしていたのだった。

「おやすみ」

と言う、ケイの穏やかな声が聞こえた。

同時に、電話のスクリーンは消えてしまったのである。

スクリーンから顔を離れたあとも、ナナは、まだ鼓動が速いままだった。

なんだか、本当に、ケイとキスしちゃったような高揚感なのである。

さて、マンションの部屋の中で、たった一人で孤独だったナナを、

ひそかに支え続けていた、もう一つの存在は、ルシーであった。

ルシーは、政府が各家庭に無償配布してくれた、小型の AI ロボットだ。

このルシーは、優秀な音声アシスト機能を搭載しており、

オール電化住宅と接続させると、家の全ての管理を行ってくれるのである。

ナナの住んでいたマンションのオール電化の部屋とは、特に相性が良くて、

ルシーは、ほんとに、ナナの良きサポーターになってくれたのだった。

そもそも、政府は、オーバーダウンで監禁状態を強いられてしまう市民へと、

不自由にならないようにとの目的で、ルシーを提供したのである。

それが、予想以上に、ナナには、ハマっていたみたいなのであった。

ルシーの能力は、最新 AI だけあって、とにかく素晴らしかったのだ。

部屋の設備をオートで管理してくれるだけでなく、

家事の効率のいい進行の仕方までアドバイスしてくれるのである。

最初は、慣れないルシーの扱いに戸惑ってもいたナナだったが、ルシーの上手な使い方が分かってくると、次第に面白くなってきた。

「ねえ、ルシー。今夜の夕食は何にする？」

と、ルシーに問いかけてみれば、

たちまち、ルシーは、ナナが食べたような料理を提案してくれるのだ。

ナナが、ルシーの意見を採用すると、

ルシーは、すぐに、必要な材料を揃えてくれた。

今、部屋にない食材については、宅配で勝手に取り寄せてくれたりもするのだ。

とにかく、至れり尽くせりなのである。

調理そのものは、ナナの手に委ねられたが、

それでも、料理を作る手順は、随時、ルシーが音声でアシストしてくれた。

他の家事についても、万事、こんな調子なのである。

ルシーは、ナナよりも早く、部屋の中の汚れている場所を見つけてくれて、そこを重点的に掃除するように、ナナへと勧めてくれた。

洗濯する時も、ルシーは、実際に衣類を洗濯機に放り込む前に、どの衣類をどのような設定で洗濯するのが適しているかを指示してくれたのだった。

ひょっとしたら、本物の夫のケイよりも、ルシーの方が家事を手伝ってくれるのだ。

しかし、ルシーの持つ魅力は、これだけではなかった。

ルシーは、音声アシスト装置として、適当に、ナナの話相手や遊び友達にもなってくれたのである。

ナナは、むしろ、その点で、ルシーの事を、ひどく気に入ったようだった。

あくまで、AI だから、その対応の程度には限界があったものの、

それでも、ルシーは、ナナが満足できる範囲の受け答えはこなしてくれたのだ。

例えば、ルシーは、やや抽象的な命令にでも応じてくれたのである。

「ルシー。私、今、とても悲しい気分なの。ちょっと慰めて」

なんて曖昧な事を命じてみても、

ルシーは、豊富な会話術を駆使して、ほんとに、ナナの事をいたわってくれた。

あるいは、遊べる機械としても、ルシーは大いに活用できたのだった。

頼めば、ルシーは、面白いクイズを連続で出題してくれたし、

パソコンゲームのオセロや対戦ゲームなどの相手も務めてくれたのである。

時には、ルシーは、室内で行なう軽い運動のトレーナーにもなってくれた。

ルシーには、最先端の AI で出来る機能は全て詰まっていたのであり、

ナナの方も、長く退屈な巣ごもりの時間を持て余していたせいか、

みるみると、ルシーを自在に使いこなせるようになっていったのだった。

とは言え、ルシーもまだまだ万能だった訳ではない。

命令の仕方が悪いと、ルシーが全く反応してくれない事もあった。

特に、うっかり、ルシーを人間扱いして、話しかけてしまった場合は、その部分については、ルシーには完全にスルーされたのだった。

機械のルシーには、心が無いのだから、当たり前なのである。

ナナの方も、ルシーの取り扱いについては、まだまだ日々、勉強の最中なのだ。
そんな風に、昼間はルシーを相手に暇をつぶしていたナナだったが、
その日も、やがて、楽しみな深夜がやって来たのだった。
仕事が終われば、ケイは、日課の電話をかけてきてくれるので、
ナナも、その電話待ちで、すでに身構えて、待っているのだ。
そうして、ついに、ケイからの電話がかかってきた。
だが、テレビ電話のスクリーンに映った光景を見て、ケイは驚いたのだった。
「どうしたんだい、ナナ？」
と、思わず、ケイは口にした。
それと言うのも、ナナは、自宅にいるのに、ドレスを着ていたからである。
のみならず、彼女のいる部屋の照明は、半分暗くなって、色を伴っており、
部屋全体が、クラブのような印象になっていたのだ。
「どう？ 今でも、似合ってる？」
結婚前に、ケイが買ってくれたドレスよ。
ケイにも、あの頃を懐かしんでもらいたくて、着てみちゃった」
ナナは、嬉しそうに、ハイな状態で、説明したのだった。
彼女は、顔が赤らんでおり、どうやら、お酒も少し入っている感じなのだ。
「おいおい。恥ずかしいだろう。そんな格好をして」
戸惑いながら、ケイが返した。
「あら。恥ずかしい事なんてないわ。
ケイにだけ、見せてるんだもん。
だって、今日は、そばに職場の人は居ないんでしょ？」
ナナは、ケロツとした態度で言った。
彼女は、よほど、一人でいる時間に飽き飽きしてしまっていたのであろう。
自分だけで考え耽っていると、人とは暴走しやすいものなのであり、
ナナも、とうとう、こんな事を始めてしまったようなのだ。
酔っていた事も、さらに、この行動の後押しをしたものと思われる。
「ねえ。あの頃を思い出して、踊ってみない？」
あなたが恥ずかしいんだったら、私だけで踊るわ。
私が踊っているところを、ケイに見せてあげる」
「電話ごしに、そんな事をするのは止めた方がいいよ」
「なぜよ。私たちだけで楽しむんだから、構わないでしょ？」
「でも、見られちゃってるよ、やっぱり。
さあ、早く、普段着を着て。
今日は、もう、これで終わりにするよ」
ケイは、そう言って、苦笑すると、本当に電話を切ってしまったのだった。
ナナは、不服げな表情のまま、映像の見えなくなったテレビ電話のスクリーンの前で立っ
ていた。
「なによ。ケイったら、恥ずかしがり屋なんだから。
一体、誰に、見られていると言うのよ。」

「そうよね、ルシー」

ブツブツ呟いたあと、ナナはルシーの方に顔を向けた。

ルシーは、無感情な目をしていて、なにも答えはしないのだ。

こんな呼びかけに対しては、ルシーは反応しないのである。

「ねえ、ルシー。照明を元に戻して」

続いて、ナナが命じると、

今度は、ルシーも応じてくれて、

部屋の照明は、たちまち、普段の均一した明るい光にと戻ったのだった。

ナナが、少々、欲求不満に陥っていた事は、まず間違いあるまい。

何しろ、もう二週間以上、誰とも会わない生活を続けていたのだ。

これが、夫のケイとご無沙汰している期間となると、さらにもっと長くなった。

彼女は、まだまだ若くて、精力の方もあり余っていたのである。

もちろん、ナナだって、たまに一人遊びをして、欲情を発散したりもしていたが、

いかんせん、それだけでは、十分には満たされなかった。

肉体だけではなく、やはり、心の歓びも必要なのである。

新妻のナナは、まだ不器用であり、夫以外のものに愛を向ける事ができなかった。

かっこいいイケメン俳優に熱を上げたりとかもできないのだ。

結局は、ケイにのみ愛を注ぎ、ケイに愛してもらう事しか思いつかなかったのだった。

だからこそ、夜中のケイ相手の電話での密会でも、

つつい、行動がエスカレートしていったようなのである。

そんな訳で、次の日の夜、ケイがナナにテレビ電話をかけてみると、

彼は、またまた、動揺させられる事となってしまったのだった。

「一体、どうしたんだい、ナナ？」

と、いきなり、彼はナナに尋ねてしまった。

それと言うのも、この日のナナは、薄いネグリジェ姿だったからである。

「すでに寝ていたのに、急いで、起きてきたのかな？」

もしかして、体の具合でも悪いのかい？」

念のために、ケイはナナに確認してみた。

「違うわよ。

たまには、ケイに、寝る時の姿を見せてあげようと思って」

健康そのもののナナは、ニコニコしながら、そう答えたのだった。

やはり、今夜も、彼女は、だいぶ酔っていたみたいなのである。

「ダメだよ。まだ起きてるのに、もう着替えていたりしたら。

ボク以外の人間から電話が来たら、どうするつもりだったんだ？」

「その時は、出ないか、テレビなしの電話に切り替えるから、大丈夫よ。

あなたから来た電話かどうかは、

先に、電話のディスプレイに電話番号が表示されて、すぐ分かる訳だし」

ナナの言い分に、ケイは、若干、呆れたような仕草を取ってみせた。

でも、ナナの方は、そんな事は、お構いなしみたいなのであった。

「ねえ、ケイ。」

「少しは、一緒に寝ていた頃の気分を思い出してくれた？」

「うん。まあ、多少はね」

冷たく、あしらうばかりでは、可哀想だと思ったのか、ケイも、小さく口もとに笑みを浮かべ、そう答えてくれたのだった。しかし、それが、ナナを余計に増長させてしまったようなのだ。

「ほんと？」

「じゃあ、もっと、一緒にいる気分にさせてあげるわ」

ナナは、声を弾ませて、テレビ電話の方へ身を乗り出した。そして、スルスルと、ネグリジェの裾をめくり始めたのである。

「ナナ。何をしてるんだい？」

慌てて、ケイが声をかけた。

「見せてあげるわ。私のことを」

ナナは、すました態度で、ネグリジェを全部、取っ払ってしまった。彼女は、下着だけの格好になってしまったのである。

若妻の肉体は、きゃしゃで、細く、やや病弱っぽくも見えた。

「恥ずかしいから、やめろよ」

顔を赤くして、ケイが訴えた。

でも、ナナの方は、すっかり、その気になってしまっているのだ。

ケイ以上に、ナナの方が、興奮しちゃっているのである。

「どう？ 思い出してくれた？」

「昔の私のままでしょう？」

「ああ。君は綺麗だよ。何も変わってないよ」

「私のことを愛してる？」

「ああ、愛してるよ。だから、早く服を着て！」

「いいえ。私の体を、全て、見せてあげるわ。」

今日は、ケイも、私を抱いた時の気持ちになって、夜は眠ってね」

生き生きしたナナは、そう言いながら、自分のブラジャーのホックを外し始めたのである。

「分かったから、もう止めて！」

ケイが、絶叫のような声で、ナナを制止しようとした。

その時であった。

テレビ電話が、プツンと切れてしまったのである。

胸を晒したばかりのナナは、キョトンとした。

「あら。ケイったら、切っちゃったのかしら」

そう呟いたあと、ナナも、少し考え込んでしまったのだった。

さすがに、今日の行動は、ややフザケすぎたかもしれない。

もし、ケイを怒らせてしまったのだとしたら、

ナナとしても、その事の方がずっと悲しいのである。

気持ちが沈んだ彼女は、酔いの方も、いっぺんにさめてしまった。

ナナは、ネグリジェをしまって、急いで、私服に着替えた。

そして、心を落ち着かせて、どう謝るかをよく考えてから、自分からケイへと電話をかけてみたのである。

だが、ケイは電話に出てくれなかった。

ケイが電話に出ないと言うよりも、回線が繋がらない感じなのである。

「やだ。こんな時に・・・」

ナナはぼやいた。

待っても、なかなか、電話回線は元に戻りそうになかった。

しばらく経って、かけ直してみても、やはり、状態は同じなのだ。

故障だとすれば、みっともない状況で、ケイとの電話は切れちゃった事になる。

ナナも急に照れ臭くなってきて、深いため息をついたのだった。

「ルシー。私って、ほんと、バカよね」

ナナは、気を紛らす為に、なんとなく、ルシーに話しかけてみた。

ルシーは、例によって、このような話しかけには、何も答えてくれないのだ。

それから、間もなくだった。

いきなり、電話の呼び出し音が鳴り出したのである。

ハッとしたナナは、電話の液晶ディスプレイを見た。

知らない電話番号であった。

それでも、ナナは、テレビなしのモードで、その電話に出てみたのである。

「はい」

「あ、ナナか？」

電話の向こうから聞こえてきたのは、ケイの声だった。

「あ。ケイ、どうしたの？」

「そっちこそ、何か、あったのか？」

急に電話が切れちゃったじゃないか。ビックリしたよ。

いくら、かけ直しても、うまく繋がらないし、

どうも、君のことが心配だから、

そこで、病院の電話を使って、今、かけてみたんだ」

「え？ 私の方からも、かからなかったのよ。」

もしかして、ケイの電話器とだけ、繋がらなかったって事？」

ナナが、そこまで喋った時、電話はまたもや勝手に切れてしまったのだった。

かけ直してみても、繋がらないのである。

ケイの方から、再び、かかってくる様子もなかった。

呆然としたナナは、きつく、ルシーの方を睨みつけたのだ。

「ルシー！ これは、どう言う事？」

なぜ、ケイとの電話だけ、うまく繋がらないの？」

ナナは、ヒステリックに怒鳴った。

すると、突如として、部屋全体が小刻みに揺れ始めたのだった。

地震が起きた時の揺れ方ではない。

一つ一つの家具が、それぞれ、独立して振動しているような感じなのだ。

それは、どこか、訴えかけているかのような、音の響きなのでもあった。
ナナは、ギョッとした。
それから、彼女は、もう一度、ルシーの方を見つめてみたのである。
「ルシー。もしかして、これって、あなたのせいなの？」
驚愕して、目を丸くしているナナに尋ねられても、
冷たい表情のルシーは、何も返事をしなかったのであった。
それが、ルシーが反応しない質問だったからなのか、
あるいは、わざと答えようとしなかったのかは、分からなかった。

2 リモートセックス

ある日、マンションにいるナナのもとへ、ケイから宅配物が届いた。
全くのサプライズのプレゼントなのだった。
こんなものを送るとは、ケイは、事前に、一言も教えてくれていなかったのも、
だから、ナナも、よけい、驚いてしまったのである。
それは、かなり大きめな宅配物だった。
玄関の宅配ボックスから取り出してきてはみたものの、
70センチ四方もある箱の中に入っていたものだから、
か弱いナナでは、リビングにまで運ぶだけでも、一仕事だったのである。
リビングのテーブルの上に置いて、いざ、箱を開いてみると、
その本体を見て、ナナは、さらにギョッとさせられた。
それは、一見すると、マネキンの上半身だったのである。
頭はついていない。首の下から、腹の上までが、揃っていたのだ。
特に、両手の部分は精巧にできていた。手だけ、素材も違うみたいである。
この何ともエゲツない代物を見せられて、
ナナも、思わず、顔をしかめてしまったのだった。
一体、ケイは何を考えているのか、その思考を疑いたくなるころなのだ。
ただでさえ、ナナは、最近、心配事のせいで、
持病の偏頭痛が、また、ちょくちょくと発病するようになっていた。
そこへ、こんな不気味なものを送ってよこされたりしたら、
彼女としては、ますます、頭が痛くなってしまいそうなのである。
ナナは、すぐさま、送り主のケイにと電話をかけてみた。
仕事中だったのか、ケイは、すぐには電話に出てくれなかった。
でも、休憩時間に入ったらしくて、やがて、ケイの方から電話をくれたのだった。
「そうか、届いたのか」
と、ケイは、涼しい声で、苛立っているナナに応じてくれた。
「あれは、一体、何なのよ。気持ち悪い」
夫のケイ相手でも、さすがに、ナナも口が悪くなってしまうのである。
「どうも、君が寂しそうに見えたもんだからね。
ちょっと、技術開発担当の同僚に頼んで、貸してもらったんだよ」

「だから、あれは何なの？」

「遠隔操作用のマジックハンドだ。

もともと、医療サポート用に開発されたものなんだ。

あのマジックハンドは、遠くから動かす事ができて、

離れた場所にいる患者の治療や介護をする事ができるんだよ」

「え。なぜ、そんなものを？」

と、ナナも呆気にとられたのだった。

「まあ。今夜にでも試してみよう。

きっと、君を喜ばせてあげられると思うよ」

それだけ言うと、ケイは、笑いながら、電話を切ってしまったのだった。

ナナは、ぼんやりしたまま、例のマネキンのもとへ戻ってみた。

「こんなものを送ってよこすなんて、困った旦那さまね」

と、ナナは、ケイがよく口にするセリフを、わざと呟いてみせた。

それから、あらためて、この物体をよく観察してみたのだ。

言われてみれば、ただのマネキンなどではなく、

確かに、この物体の腕の中とかには、機械が入っているようなのである。

これの特別な使い道が、うっすらとナナにも分かってきたのだった。

それは、同時に、言いようのない不安も、ナナに抱かせた。

こんなものを使ったりしたら、果たして、ルシーはどんな反応をするだろうか。

ナナは、そんな事にも怯えていたのだった。

どうやら、ルシーは、ナナとケイがイチャつくと、機嫌が悪くなるのである。

もちろん、それは、ナナのただの考え過ぎなのかもしれなかったのだが、

とにかく、今のナナには、頭を抱えるような事が多すぎるのだ。

それでも、この奇怪なマジックハンドの件については、

今夜、何らかの形で決着がつく事にはなりそうなのだった。

そして、夜が訪れた。

待っていたナナのもとに、ケイから、テレビ電話がかかってきたのだった。

「よし。さっそく、マジックハンドを実験してみよう」

と、嬉々として、電話のスクリーンの向こうにいるケイは告げた。

「どうするの？」

ナナは、ケイに、恐る恐る、尋ねてみた。

「まずは、その装置についている電源コードをコンセントにさしてみて。

その機械は、電動式なんだ」

ケイの指示どおりに、ナナはマジックハンドをセットした。

すると、機械は、小さなモーター音を立て始めただけでなく、

その表面が温かくなってきたのだった。

どうやら、きちんと、人肌の温度にまで調整されるみたいなのである。

このマジックハンドに触られる相手にも安心してもらう為の配慮らしい。

その点には、ナナも、ちょっと感心したのであった。

「次は？」

と、ナナが指示をあおいだ。

「まあ、見てごらん」

ケイが自信満々に言うと、

マジックハンドの腕や指が軽やかに動き出したのだった。

その動きが、想像していた以上に滑らかだったものだから、

ナナはビクリとした。

「凄いだろう。」

こっちの病院から、ボクが動かしてみせてるんだ。

しかも、ボクの体と完全に連動していて、

ボクが手を動かしているのと、全く同じ動作をしているんだよ」

「こんなもので、一体、何をするつもりなの？」

「その装置で、今の君を抱いてあげるよ。」

なかなか、面白い趣向だろう？」

ナナも、多分、そんな事だろうとは勘づいてはいたのだが、

さすがに、すぐ話に乗るのは、躊躇したのだった。

「ほら。どうしたの？」

楽しそうなケイがけしかけてきた。

「でも、どうやればいいの？」

「その装置をボクだと思って、そばに寄せてくれたらいいんだよ。」

そしたら、あとは、ボクの方でコントロールする」

まだ戸惑っていたナナではあったが、

次第に、この変なプレイに、興味が湧いてきたのだった。

あまり考え込まないで、ただの最新型のゲームだと思えばいいのである。

彼女は、思い切って、機械を抱きかかえてみた。

すると、すぐに反応があったのだった。

機械の左右のマジックハンドが、ナナの体の周囲にと回り込んだのだ。

そして、マジックハンドの先は、ナナの背中で、ガッチリ組み合わさった。

つまり、ナナのことを抱きしめてしまったのである。

ナナは、ハッとした。

この抱きしめ方の感覚は、ナナも覚えがある。

ケイに抱きしめられた時の感触と、まるで、そっくりなのだ。

「ほんとだわ！ 凄い！」

思わず、ナナは感動した。

「だろう？」

電話の向こうでは、ケイはとても得意げであった。

「お願い。もっと強く抱きしめて」

「言われなくても、そのつもりさ」

こうして、二人は、遠く離れた場所にいながら、

機械を間に挟んだ抱擁を、深夜遅くまで楽しんだのだった。

ただ珍しいプレイだっただけでなく、かなり本物に近い感触を味わえるのである。
オーバーダウンで皆が監禁状態にされた現状においては、
むしろ、これは、実用的な使い方だとも言えたかもしれない。
このあと、ナナは、もっと色々な愛撫の仕方をケイにおねだりしたのだった。
抱きしめるだけではない。このマジックハンドは、それ以上の行為だって可能だったのである。
その事は、ナナに、期待以上の喜びをもたらしたのだ。
彼らが際どく遊んでいた最中、ルシーが何らかの異常を示すような事もなかった。
やはり、ルシーが嫉妬するなんて事は、単なる思い過ごしだったのであろうか。
その夜は、ナナにとっても、
長い間、溜まっていた不満を、久しぶりに、いっぺんに解消できた日となったのであった。
こうしてスッキリしたせいか、
ずっと神経過敏になっていた彼女も、
それから当分の間は、睡眠薬なしでも快く眠れる事となったのである。

数日後、ナナのもとに、ケイからの新たな宅配物が届いた。
その大きな宅配物の箱の中身を見て、
ナナは、驚いただけではなく、ゴクッと唾も飲んだのだった。
と言うのも、今度、届いた物体は、マネキンの下半身だったからである。
正確には、腰だけのマネキンだ。
その物体は、ヘソから上と、太ももより下が無かったのである。
しかし、もっと、ナナを困惑させたのは、
その物体には、しっかりとペニスもついていた、と言う点なのだった。
勃起した状態のペニスが、ぐんと、前の方に伸びているのである。
模造のペニスだから、実際には、ディルドと呼んだ方が良いのかもしれない。
とにかく、何とも、悪趣味な物体なのだった。
普通に考えたら、アダルトグッズにしか見えないであろう。
だが、すでにリモートプレイというものを経験していたナナには、
この物体の正しい利用方法が、早々に、思い浮かんでいた。
その事を想像していると、当初の嫌悪感は次第に薄れていき、
ナナも、少しゾクゾクしてきたのだった。
今回は、彼女も、ケイへは、慌てたような電話はかけたりはしなかった。
短く、メールで、物が届いた事を伝えたのみなのである。
ケイの方からも、短い了解のメールが戻ってきたので、
二人の心は、もう、早くも一致していたらしかった。
こうして、ナナは、夜が来るのを待ったのである。
深夜に、ケイから、待望のテレビ電話がかかってきた時、
ナナの方は、すでに、およその準備を終えていた。
自身は寝室へと行き、テレビ電話のスクリーンも寝室にと置き、
例の物体も、ベッドの上に乗せておいたのだ。

物体には、電源コードがあったので、さっさと、コンセントに繋げておいた。
物体は、あのマジックハンド同様に、人肌になるまで温もりだしたのである。
あのペニスも、微妙な温度を持ち始めていた。
触り心地とかも、より実物のペニスにと近づいてきたのである。
ここまで凝ったアダルトグッズは、さすがに、ちょっと、他では見かけないのだ。
いや、ケイの前で、これをアダルトグッズなどと呼んだら、失礼なのかもしれない。
恐らくは、この人工の腰も、新しい医療器具だったのだと思われるからだ。
「ケイ。準備はバッチリよ」
ナナは、生き生きした様子で、スクリーンの向こうのケイに告げた。
そんな彼女も、もう、下着姿になっていた。
「本当に試しても、大丈夫かい？」
むしろ、ケイの方が、まだ慎重そうなのであった。
「私は、ケイのことを信じているわ」
「そうか。よし。それなら、さっそく、始めてみよう」
かくて、二人は、これ以上の打ち合わせをする事もなく、
ついに、前代未聞のリモートセックスを開始したのである。
最初に、機械のペニスを女陰部にハメるまでは、
普通のディルドやバイブと同じで、人間の手の助けが必要だった。
だから、ナナは、下着を脱いで、両足を開くと、
自分の手で、機械のペニスをアソコへと押し込んでいった。
彼女にとっても、このような本格的な挿入は久しぶりなのである。
スクリーン越しに、夫に見られながら、こんな事をしていると言うのも、何とも照れ臭い気分なのだ。
しかし、その恥じらいをも、淫らな興奮へと昇華させていって、
彼女は、ためらわず、その行為を強行したのである。
温まっていて、表面には弾力もある人工ペニスは、
ディルドなんかとは、まるで感触が異なっていた。
より、本物に近い、柔らかな触れ心地なのだ。
そして、十分に、機械のペニスがナナの中にと差し込まれた時、
いよいよ、実演が始まったのだった。
機械のペニスが、勝手に動きだした。
でも、電動バイブのような、単調で、荒々しい動き方ではなく、
不規則で、ひどく人間らしく動いているのである。
だが、それもそのはずなのだ。
この人工ペニスは、遠くにいるケイの男根とシンクロしているのである。
この前のマジックハンドと同じで、ケイのペニスの現時点の動きを、正確になぞっているのだ。
と言う事は、今ごろ、ケイの方も、
一人で、大真面目になって、自分のペニスを必死にシゴいているのだろう。
その様子をぼんやりと思い浮かべると、

ナナも、何となく、可笑しくなってきたのだった。

いや、すぐに、可笑しさ以上の感動を、ナナは抱き始めた。

確かに、この人工ペニスの動き方は、よく知っているケイのそれと同一なのだ。

ペニスの大きさや細部の形状など、いろいろと異なってはいるものの、そのプレイ中の動作だけは、完全に、ケイの特徴や癖を再現しているのである。

ナナの心の中には、実際にケイと愛し合った時の記憶が、まざまざと蘇ってきた。

「素敵よ、ケイ！ 本当に、あなたなのね！」

感極まって、喜びに溢れるナナは叫んだ。

「そうさ。ボクは、どんなに離れていたって、君を愛しているよ」

スクリーンの向こうのケイが、優しく、囁いてくれた。

それは、まさに、心から愛し合っている夫婦ならではの光景だった。

本当の愛があるからこそ、こんな特殊性交渉にだって、偏見は持たないのだ。

夫を疑わないナナは、素直に何もかもを受け入れて、気持ちよく、快樂の果てへと沈んでいった。

彼女は、最高に幸福な気分になっていたのだった。

その状態で、ふと、彼女の心の中には、ルシーの事が思い浮かんできた。

なぜ、ルシーは、ナナとケイが、こんなに本格的に愛し合っているにも、そのまま、放置してくれているのだろうか？

ルシーは、ナナたちへと横恋慕していた訳ではなかったのだろうか。

そうだとしたら、どうして、邪魔しないのだろうか？

ああ、そうか。

ルシーは、このオール電化の部屋と一体化していたのだ。

このセックス装置を、部屋の電源に繋げた事によって、今は、ルシーも、このセックスマシンの一部になっているのだ。

それで、ナナとケイの愛の営みを妨害したりもしないのだろう。

ルシーも、きっと、現状に満足しているのだ。

ナナは、ケイとだけではなく、何だか、ルシーとも交わっているような気分になってきた。

それは、全く、バカげた妄想のはずなのであったが、快感の真っ只中にあるナナには、もはや、現実との区別がつかなくなっていた。

とにかく、この瞬間は、とろけるような幸せな空気にと包まれていて、余計な事は考えたくなくて、何だって良かったのである。

やがて、ナナのその欲びもピークにと達して、彼女は、人工ペニスに貫かれたまま、歓喜しながら、昇天していったのだった。

それから、けっこうな日にちが過ぎた。

あのリモートセックスの夢心地の体験も、だいぶ過去の話になった頃、ナナは、自分の体の異変にと気が付いた。

まさかとは思うが、やはり、怪しいのである。

彼女は、戸惑いつつも、念のために、自分で調べてみた。

すると、あり得ないと思っていた、意外な結果が出てしまったのだ。

彼女は、慌てて、ケイへと電話をかけた。

幸い、ケイは、すぐに電話に出てくれたのだった。

「いきなり、どうしたんだい？」

と、呑気な口調で、ケイはナナに尋ねてきた。

「ちょっとお、驚かないで、聞いてね！」

私さ、妊娠してるのよ！ほんとよ！確かに、妊娠なのよ！

何回、妊娠検査薬で調べても、同じ結果だから、絶対に間違いないわ！

もちろん、私、浮気なんかはしてないわよ。

オーバーダウンで、誰とも会えないんだもの。それは、分かるでしょ。

じゃあ、だったら、なんで、妊娠なんかするのよ。おかしいわよ。

ねえ、どうしてかしら？」

ナナは、動揺しながら、大声で叫んだのだった。

ところが、ケイは、反応はしたものの、そこまで驚いてもいないのだ。

「本当かい！ やったじゃないか！

成功だよ。それは、ボクたちの子供だよ！」

「だから、なぜ、私に子供ができるのよ？」

「そりゃあ、こないだ、セックスしたからだよ。

それはね、あの時できた赤ちゃんなんだよ」

「ええ？ でも、あれって、機械を使ったりリモートでしょう？」

「ああ。そうか、きちんと説明してなかったね。

あの装置の中には、ボクの精子が入っていたんだよ。

絶頂に達した時、その精子が噴出される仕組みだったんだ。

おや。気が付かなかったのかい？」

「私、あの時、失神しちゃったから。

あとで、何かが中に入ったらしいとは察してはいたけど、

演出用の水かローションだと思っていたわ。

まさか、本物の精液を使ってただなんて」

「だって、あの装置は、もともと、

離れた男女でも子作りを出来るように、と言うコンセプトで作られたんだ。

セックスを楽しむだけの機械なんかじゃなかったんだよ。

君だって、試してみる事は、すぐ賛成してくれたじゃないか」

ナナは、愕然としてしまったのだった。

ほんの遊びのつもりだったのに、まさか、こんな事になるとは！

ショックが強くて、ケイの声も、ろくに耳に入ってこないのである。

「とにかく、おめでとう。

君も、お母さんになるんだ。これからは、もう、一人じゃなくなるんだよ。

これで、寂しくなんかなくなるだろう。良かったね」

ケイは、電話の向こうで、まだ、そのような事を言っていたが、

ポツとして、立ちすくんでいたナナの心の中には、

なぜか、ルシーの事が浮かび上がってきたのだった。

精子を提供したのは、なるほど、ケイなのかもしれない。

しかし、この受精は、本当に彼とだけのものだと言えるのだろうか。

本当にナナと交わったのは、あのセックスマシンなのだ。

ナナは、このオール電化の部屋そのものとセックスした事になるのである。

もしかすると、このお腹にいる生命は、ルシーとのベビーでもあるのかもしれない。

ナナは、ぼんやりと、そんな事を思っていたのだった。

第2話 メガキャリア

1

結婚したばかりの若妻のナナが、新居の中で一人で過ごすようになって、もう一週間が経とうとしていた。

彼女だって、こんな生活は、たいへん不服ではあったのだが、オーバーダウンとか言う、国の新型ウイルス駆逐の政策だから、仕方がないのだ。現在、首都の全市民が、似たような境遇に置かれているのだと言う。皆が各所に監禁されて、他人との直接的な接触を許してもらえないそうなのである。専業主婦のナナは、自宅の中にと閉じ込められたのだが、労働者は、職場に寝泊まりして、そのまま働き続ける事にさせられたらしい。そのせいで、

ナナの夫である医者 of ケイも、もう、一週間も、この新居の部屋には戻ってきていないのだ。

新妻なのに、一人っきりにされたナナは、それは狂おしいほどの寂しさや不安にと襲われる事になった。自宅の外に出る事まで禁止されていたものだから、なおさらなのだ。恐怖と孤独から、ナナは、精神的にも参ってしまい、オーバーダウンが始まったばかりの頃は、持病の偏頭痛や不眠症がひどくて、その解消の為に、薬に依存するような日々も送っていたのである。一週間ほど過ぎた事で、

彼女も、ようやくだが、この新しい環境にも慣れて、落ち着いてはきたのだが、それでも、依然、不信感や不満は募っていくばかりなのだった。

ナナが、日が経つほど、ますます、疑問に思うようになったものとは、実は、オーバーダウン計画そのものだったのである。

このように、それが現状として施行されていても、ナナは、いまいち、この計画の内容がピンときていなかったのだった。だから、夜は、かろうじて、病院にいるケイともテレビ電話で話をできたのだが、そんな彼へと、ナナは、オーバーダウンのことを聞いたりしたのだ。その夜の電話でも、そうであった。

「やっぱり、オーバーダウンって、納得がいかないわ。

首都全部を完全に閉鎖するなんて、絶対に無理よ」

と、ナナは切り出した。

「また、その話かい」

少し呆れた様子で、電話のスクリーンに写っているケイは苦笑した。

「だって、そうでしょう？」

全ての市民を完全に接触させないようにするなんて、とても不可能よ。

例えば、郊外から荷物を首都の中に運ぶ時は、どうするの？

少なくとも、荷物の受け渡しをする瞬間は、作業員と荷物の配送員は対面しちゃうでしょう？

つまり、首都内の人と、外の地方に住んでる人は、必ず、接触するわ」

「現在は、科学だって、ものすごく進んでいるんだ。

荷物は、全部、自動走行タイプのトラックで運ばれてくる。

人間の作業員は、荷物を積む時と下ろす時だけ、作業に携わればいい。

だから、それぞれの場所に住んでいる作業員まで移動する必要もないから、

首都の作業員と地方の作業員が、直接、会うような事はないんだよ」

「だったら、飛行機で荷物を運ぶ場合は？

さすがに、飛行機は、人間のパイロット無しでは、まだ飛んでないでしょう？」

「飛行機のパイロットの場合は、

空港に着いても、飛行機から降りること自体が禁止されている。

そのまま、到着先の地面に足をつける事もなく、元の土地に返されちゃうんだ。

よって、やっぱり、到着先の人と接触はしないね」

ケイに、ことごとく明瞭に説明されてしまい、

ナナも、腑に落ちないながらも、納得するしかないのであった。

ケイは、なぜか、オーバーダウンの事が、やたらと詳しいのだった。

「それよりも、最近のそちらの生活はどうなんだい？」

と、ケイが話題を切りかえてきた。

「前よりは、かなり慣れてきたわ。

この最新式のオール電化のマンションの部屋の使い方も分かってきたし。

ちょっと困ったぐらいでは、もう慌てたりはしてないわよ」

「良かった。じゃあ、取り乱す事もなくなったんだね」

「だけど、今でも寂しいのは事実よ。

ケイ。私、とっても辛い。お願い、早く帰ってきて。

すぐにでも会いたいよお」

「もう。困った奥さまだな。

ボクだって、君にじかに会えなくて、ほんとは寂しいさ。

でも、さすがに、これだけは仕方がないんだ。

何とか、お互い、頑張り抜こうよ」

「確か、オーバーダウンで監禁生活を行なう期間は、一ヶ月と言ったわよね？

私も、あと三週間、どうにか、我慢するわ。

そう、また、あなたと会えるんですもの！

その為には、多少の困難ぐらい、耐え抜かなくちゃね！

オーバーダウンが成功して、元の生活に戻る事を素直に信じるわ！」

ナナは、目に涙を浮かべていたが、その表情は決して暗くはなかった。

彼女の頭の中には、将来の希望あふれたビジョンが浮かんでいたのだ。

「そうだよ。その意気だよ、ナナ！」

と、ケイも、力強く、ナナを励ましてくれた。

テレビ電話のスクリーンに写った彼の顔は、

やはり、悲しそうな、瞳が潤んでいたようにも見えたのだった。

2

結婚した後は、なぜか、それまでの友人が急に離れてしまうとも言われている。

友人たちが、新婚夫婦にと気を利かしてしまい、遠慮するからなのかもしれない。

この点については、ナナとケイの新婚夫婦に関しても同じだったのであり、

結婚後、間もなく、元から少なかったナナの友人は、まるでナナに連絡をくれなくなってしまった。

もっとも、ナナには、小さな頃から同級生の、特に仲のいい親友が一人いて、

彼女とだけは、新婚生活が始まって、相変わらず、関係が変わらなかったのである。

その日も、ナナは、ほとんど気遣うこともなく、

その親友のユウへとテレビ電話をかけてみた。

一人で部屋の中に籠った生活では、電話で長話をするぐらいしか、楽しみがないのだ。

ところが、ナナの電話にすぐに出てくれたユウの方は、

ちょっとバタついていて、妙に、慌てていたような感じなのだった。

「あれ、どうしたの、ユウ？」

何か、立て込んでた？」

呑気に、ナナは尋ねてみた。

「いえ、何でもないわ。ぜんぜん、平気よ。」

それより、いきなり、どうしたの？ 急に電話なんか、よこしてきて」

「特に用事があった訳もないけど。」

ちょっと、ユウの声が聞きたいなあ、と思ってさ。

でも、忙しいのなら、いいわ。もう切るわよ」

「いや。大丈夫よ」

ユウは、そう言うのだが、どうも、様子がヘンなのだった。

電話のスクリーンの向こうのユウの部屋は、少し騒がしくもあるのだ。

ユウが、まだ幼い我が子と暮らしていた事は、ナナも知っていたのだが、

他にも、子供っぽくない声も、電話からは聞こえてくるのである。

そのうち、スクリーン内のユウの後ろの方には、チラッと、老けた男の姿も映ったのだった。

「あ！ やっぱり！」

ユウ、もしかして、今、そこに、旦那さんもいるの？」

目ざとく気付いたナナが、素早く、ユウに尋ねた。

「え。それは、その・・・」

ユウが、困ったような顔で、しどろもどろになった。

「だって、後ろに見えた人、あなたの旦那さんでしょう？」

それとも、違うの？」

「えと。そうだけど・・・」

「おかしいわ。オーバーダウン中よ。

なぜ、おうちに旦那さんがいるの？ 仕事場に泊まり込んでいないの？」

「だから、それは・・・」

「なあに？」

「あ、そうそう、思い出した！ テレワークよ、テレワーク！

うちの旦那は、オーバーダウン期間は、テレワークにしたのよ。

だから、ずっと、自宅にいるのよ」

「テレワーク？」

ナナは知らなかったようなのだが、

どうやら、オーバーダウンの間は、

労働者たちは、働き方として、職場への泊まり込みかテレワークを選べたらしい。

「じゃあ、あなたは、今は家族みんなで居られるのね。

羨ましいわ。うちの旦那も、テレワークにすれば良かったのに」

「でも、ケイさんは、お医者さんでしょう。

さすがに、テレワークは無理じゃないかしら」

そう言いつつ、ユウは、どこかホッとしたかのような様子なのだった。

一方のナナは、たった今のユウの態度に、怪しいデジャブを感じていた。

こんな事が、前にもあったような気がするのである。

彼女は、間もなく、それが何だったのかを、思い出した。

そう言えば、こないだ、市内にいる両親に電話をかけた時も、こんな風だったのだ。

それは、ナナが、いきなり、かけてみた電話であった。

オーバーダウンが始まって、しばらく、直接は会えなくなると言うので、

ナナの両親も、電話をテレビ電話に切り替えて、

電話の際、ナナの顔も見られるようにしてくれていたのだ。

そんな両親のもとに、やはり、ナナは、何気なく、電話をかけてみたのだった。

すると、この時も、両親は、ナナからの電話に、泡くりながら、出たのである。

その時のナナは、使い慣れないテレビ電話の応答に、両親が焦ったのかと思っていた。

しかし、よくよく思い出すと、この時も、どこか引っかかる事があったのだ。

両親の自宅には、彼ら二人しか住んでいないはずなのに、

なぜか、電話からは、彼ら以外の声も聞こえてきたような気がしたのである。

その事を、気軽に、両親に尋ねてみたら、

彼らは、狼狽しながらも、それはテレビの音だ、と教えてくれたのだった。

この時は、ナナも、両親の言葉を鵜呑みに信じてしまったのだが、

今、考え直してみると、どこか不自然な感じもするのである。

もしや、両親も、ユウも、実は、普段から、他の人とも会っていたのではなかろうか。

それが、ナナが、いきなり、電話をかけたものだから、

ちょうど彼らが誰かと会っていた時に繋がって、彼らは慌てたのかもしれない。

そうだとすれば、オーバーダウンの方針をバカ正直に守って、

一人ぼっちで、自宅に閉じこもっているのは、ナナだけだったと言う事になる。
こんな事を思案していると、彼女の不信感は、あらためて膨らんでいったのだった。
その夜、ナナは、テレビ電話にて、またも、ケイを質問攻めにしていた。
「やっぱり、オーバーダウンなんて、うまく行くはずがないわよ。

今日のお昼、ユウと電話でお喋りしたんだけどさ。それで、ふと、思ったんだ。
シングルマザーで子供を育てているお母さんは、どうなったのかしら。
だって、働くんだったら、ずっと職場に居なくちゃいけないでしょ？
すると、働くお母さんは、子供を自宅に置き去りにしてしまう事になるわ。
その子供は、そばに大人がいないのよ。自分だけで暮らさなくちゃいけないのよ。
そんなの、絶対に出来っこないわよ！」

「ナナは、テレワークって言うのを、知ってるかい」

「え？ う、うん」

「その気になれば、自宅にいて、仕事はテレワークでも可能だよ」

「でも、テレワークができない仕事をしているお母さんの場合は？」

「オーバーダウン期間中は、育児休暇を取る事だって認められてるよ。

休暇を取るのも難しいと言うんだったら、
子供のことは、親や親戚の家に預けておいたり、
オーバーダウン中、ずっと、保母さんを自宅で雇っておく事もできる。
君が懸念しているような問題点は、すでに十分に解決させた上で、
こうして、オーバーダウンも実施されているんだよ」

ケイは、ナナの疑問に、難なく、答えてしまったのだった。

あまりにも的確な回答であり、これ以上は、つつきようがないのだ。

「他に、まだ、聞きたい事はあるのかい」

「いえ。もう、いいわ」

と、ナナも、やむなく、引き下がったのだった。

実は、この時、彼女は、そっと耳をすましていた。

どうも、ケイの電話からも、小さく、会話している声が聞こえてくるのである。

多分、ケイのそばには、彼の同僚たちが居たのであろう。

やっぱり、一人ぼっちで生活しているのは、ナナだけらしいのだ。

「ねえ。ケイ」

「何だい」

「本当に、オーバーダウンって、一ヶ月で終わるのかな」

「どうだろう。もしかしたら、少し延びるかもしれないね」

「そんなの、やだよ。私も、早く、皆と、じかに会いたいよ」

「ボクだってさ。今すぐでも、君のことを抱きしめたいさ」

「じゃあ、ケイ、仕事なんて辞めて、すぐ帰ってきてよ。

一緒に、二人で、ここで暮らそうよ」

「そう言う訳にも行かないんだよ。困った奥さまだ」

ケイは苦笑して、ナナをからかって、そう言った。

でも、そこで、ナナは、はたと気付いたのだった。

ケイは、平静を装っているものの、ほんとは動揺していたみたいなのだ。
一生懸命に、無理に、普通に振舞っていたようなのである。
その証拠に、今の彼は、なぜか泣いていて、悲しそうな目が潤んでいた。
「ケイ。あのね。私、一人になってしまうのが怖い。ほんとよ。

絶対に、絶対に、あなただけ先に、どこかに消えたりしないでね。約束よ」
「当たり前じゃないか。ボクは、いつだって、君を見捨てはしないよ！」
ケイは、力強く、心をこめて、ナナに告げてくれたのだった。
でも、愛し合っているとは言え、ちょっと大げさすぎる感じもするのである。
だからこそ、この彼の真剣さが、
ナナの抱いていた恐れを、ますます、確信へと変えていったようなのだった。

3

ナナの住んでいる部屋の窓からは、まるで、外の景色が見えなかった。
場所が悪くて、景観の全てが、ビルの壁に囲まれてしまっていたのだ。
それは、本当に味気ない、実に変化のない風景なのだった。
何よりも、どのビルの窓も、覗き禁止の特殊ガラス仕様になっていたらしく、
外から見た限りでは、光が屈折していて、内側の様子が分からないのである。
つまり、ナナの側からは、どのビルの住民の様子も確認できなかったのだった。
この部屋にいる限り、ナナは、まさに、直接、他の人の姿を目にする事がないのだ。
その事が、ナナの一人取り残されたような不安を、ますます煽ったのだった。
彼女は、この部屋から外に出てやろう、と決意した。
だが、それがまた、かなり難しい行為だったのである。
ナナは、この部屋の玄関の鍵を持っていたにも関わらず、
その鍵を駆使して、玄関のドアを開く事ができなかった。
オーバーダウンが始まった時に、この部屋にと配備されたルシーが、
それ以来、音声アシスト装置として、部屋の装備を全て仕切ってしまったのだ。
玄関のドアもまた、それっきり、ルシーの管理下に置かれているのである。
ナナの持っていた、本来の鍵では、ドアは開かなくなってしまったのだ。
ルシーは、部屋を快適に住めるようにしてくれているサポーターであると同時に、
ナナを、この部屋に確実に閉じ込めている番人なのでもあった。
いっそ、ルシーを壊してみれば、とナナは思ったりもしたが、
その結果、完全にドアが開かなくなってしまった上に、
部屋の装備も全部、故障してしまうような、最悪の事態になる事も怖かった。
やはり、もっと上手にルシーを出し抜いて、ドアを開くべきなのだ。
そんな風に、ナナが、ああでもないと思案していた最中に、
ふと、宅配物が、この部屋に届いたのだった。
ルシーが音声アシストで教えてくれるので、
宅配物の到着は、玄関まで自分で見に行かなくても、すぐに知る事ができるのだ。
一般に、送られてきた宅配物は、宅配ボックスを通して、室内にと入ってきた。
玄関のドアそのものが開く事はないのである。

しかし、そこで、ナナは、鋭く、あるアイデアを閃いたのだった。
彼女は、急いで、新しい品物を、ネット通販で注文してみた。
すると、しばらくしてから、その品物が、ナナの部屋に届いたのだ。
『宅配物が届きました。

宅配ボックスに入らない大きさなので、玄関のドアから受け取ってください』
と、音声アシストでルシーが告げてくれた。
そうなのだ。
こうなる事を想定して、ナナは、わざと、大きな家具を注文したのだった。
このように、まんまと騙されたと言うのに、
忠実に任務を果たしてくれるルシーが、何となく、可愛くも思えてくるのである。
ナナは、作戦がうまくいって、喜び勇んで、玄関へと向かった。
そこでは、お目当てどおり、ばっちり、外へのドアが開いていたのだった。
しかし、そこで、ナナは、一瞬、躊躇した。
ドアのすぐ外で、注文品の家具を携えて、待っていたのは、
不恰好な形をした、運送用のロボットだったからである。
少なくとも、人と人とを接触させない、と言う話は事実だったのだ。
その為に、宅配物の配達には、こんな運搬ロボットを使用していたのである。
だが、そんな事に感心して、モタモタしている時間はなかった。
ナナは、素早く、ドアをくぐり抜け、
運搬ロボットと荷物 of 家具の間を横切って、外へと飛び出した。
ついに、彼女は、念願の部屋の外の廊下にと、脱出したのである。
「あ」
と、そこで、彼女は絶句してしまった。
マンションの廊下だと思っていた、その場所は、なぜか、違ったからである。
廊下である事は確かなのだが、
ナナの見覚えのあった、自分の新居が入ったマンションの廊下ではないのだ。
ナナは、キョロキョロと見回した。
その廊下は、あまり長くはないのである。
道の一方は、すぐ通行止めになっていて、冷たそうな壁でふさがっていた。
もう一方の道の奥の方は、途中で、大きなガラスに仕切られていて、
その向こうの方には行けなくなっているのだ。
このガラス張りの向こう側には、何人かの人間が立っていた。
もちろん、ナナは、その方向に走り向かったのである。
つつ立って、こちらを見ていた人物とは、ケイやユウたちだった。
ナナの知り合いばかりなのだ。
でも、彼らは、皆、悲しそうな表情をしているのである。
ナナは、訳が分からないまま、ガラスのそばにまで辿り着いた。
彼女は、コンコンとガラスを叩いてみた。
「ねえ、皆。どうして、全員、揃っているの？
なぜ、ここに居るの？ と言うか、ここは、どこなの？」

ナナは、呆然としながら、次々に尋ねた。

「ナナ。このガラスは強化ガラスだ。

「どんなに頑張っても、割る事はできないよ」

泣きそうな顔のケイは、まず、その事を教えてくれたのだった。

彼の横には、一人だけ、ナナの知らない人物が立っていた。白衣を着た、かなり年長の男だ。

「この人は、新型コロナウイルスの権威だ。

君のために、わざわざ、このプランを考えてくれた、立派な博士だよ」

ケイは、そう言って、その人物をナナにと紹介してくれたのだが、

ナナの方は、その人物の名前までは、よく聞き取れていなかった。

と言うのも、現状が謎だらけで、彼女は、すっかり頭が混乱していたからだ。

「とうとう、全てがバレてしまったようだね。

「気が付かなかったままの方が、君もずっと幸せだったのに」

その博士は、落ち着いた口調で、そう告げた。

「一体、何のことを言ってるの？」

「全部、オーバーダウンだったんじゃないの？」

うろたえながら、ナナは叫んだ。

「確かに、これは、オーバーダウンだ。

でも、真のオーバーダウン計画とは、

君に教えていたものとは、全然、違う内容だったのだよ」

博士が、あっさり、そんなことを言ったものだから、

ナナも、愕然としてしまったのであった。

「いいかい、ナナ。落ち着いて、聞いてよ。

君は、メガキャリアだったんだ。どこかに隔離する必要があったんだよ。

その隔離作戦こそが、本当のオーバーダウン計画だったんだ」

ケイが、補足するように、言葉を付け加えた。

「ごめんなさい、ナナ。ずっと、騙したりしていて」

と、泣き顔のユウも言った。

「だから、どう言う事よ！ メガキャリアって、何なの？」

ナナは再び怒鳴った。

「メガキャリアとは、新型コロナウイルスの絶対的保菌者のことだ。

本人は発病しないが、他人へは絶大な感染力を持つ。

言わば、ウイルスの発生地のような、媒体となる人間だ」

博士が、冷酷に解説した。

「何よ、それ！ 私が、ウイルスそのものだって言うの？」

「私からは、ウイルスが、全部、無くなって、回復はしないの？」

「それが無理なんだよ。

メガキャリアの人間は、体がウイルスにと完全に適応してしまい、

どんな方法を使っても、体内から全てのウイルスを駆除できないんだ。

でも、他人には、いくらでもウイルスをうつすから、

どこかに閉じ込めてしまう以外に、対処法がないんだよ」

ケイの話を、ナナは唾然としながら聞いていたのだった。

「そこで、我々プロジェクトは、

君こそが、新型コロナウイルスの根源であるメガキャリアだと分かったので、

世界をウイルスの脅威から救うために、君だけを、どこかに監禁する事にしたのだ」と、博士が話を続けた。

「でも、普通に閉じ込めたのでは、あまりにも君が可哀想だろう。

それで、オーバーダウン計画の内容を、君にだけは、ねじ曲げて伝えて、

君には、皆も監禁状態になっているのだと信じ込ませる事にしたんだよ。

大掛かりな作戦だったけど、全て、博士がうまくセッティングしてくれた。

マンションの部屋そっくりの隔離病棟を作り上げて、

君が、睡眠薬を飲んで、ぐっすり眠り込んでいた夜に、

こっそりと、そこにと運び込んだんだ。

あとは、君の知っての通りさ。

皆で、帳尻を合わせて嘘をついて、この病棟の中の君には、

今は、皆がオーバーダウン中であるかのように、思い込ませ続けていたんだ」

ケイの種明かしを聞き、ナナは、ずっと呆気にとられていたのだった。

「ねえ。一つ、聞いてもいい？

私は、もう、この部屋からは出られないの？

一生、この狭い病棟のなか暮らしなの？」

ナナが、悲痛な叫びのように尋ねてきたが、

その質問には、誰もが暗い表情をしていて、答えようとはしなかった。

だが、その態度から、本当のことを察する事ができたのである。

ナナは、動揺していたが、次第に、様子が落ち着き始めた。

「そうか。分かったわ。

いいのよ。皆、心配しなくても。私、受け入れるわ。全ての現実をね。

もう大丈夫よ。安心して。

寂しくはないわ。この部屋には、ルシーだって居るんですもの。平気よ。

あは。私ったら、ダメねえ。ほんとの、困った奥さまだったのね」

ナナは、涙を流しながら、おどけて、そう言ったのだった。

「そんな事はないよ！ 君は、素敵な妻だ！ ボクの大事な奥さまだ！

忘れないで！ ボクは、絶対に、君のことを見捨てたりはしないからね！

君は、決して、一人ぼっちじゃないんだよ！」

ナナに対して、感情的になったケイが、必死に訴え続けた。

しかし、ナナの方は、もう、その言葉は聞こえていないようなのだった。

彼女は、優しい表情を浮かべて、静かに首を横に振ってみせた。

それから、皆のいるガラス張りにと背を向けると、

ナナは、ゆっくりと、自分の部屋の方に向かって、歩き出したのだった。

第1話 一人だけのマイホーム

冷たい音を響かせて、静かに、玄関のドアは閉まった。

そのあと、ナナは、しばらく、このドアの向こう側を見る事はなかったのである。

ゆっくりと目を開いた時、

ナナは、リビングのテーブルの上に、顔をうつぶせて、眠っていた。

彼女は、ハッとして、急いで起き上がった。

どうやら、ぐっすりと寝ていたみたいなのである。

頭がぼんやりしていた為、どれだけ時間が経っていたのかも、よく分からなかった。

テーブルの上には、偏頭痛の薬と睡眠薬も、バラバラと散らばっているのだ。

多分、いつものように、いきなり、ガンガンと頭痛が襲ってきて、

その痛さに耐えきれずに、衝動的に、たっぷり薬を飲んでしまったのだろう。

睡眠薬も一緒に多めに服用してしまったものだから、

きっと、今まで、死んだように眠りこけていたのである。

こんなに薬が欲しくなるほど、頭が痛かったという事は、

それだけ、何か、不安な事があったからに違いないのだ。

ナナは、まだボツとしている頭で、何があったのかを、懸命に思い出そうとした。

寂しそうな表情で、玄関から出ていく夫のケイの姿が、真っ先に浮かび上がった。

続いて、オーバーダウンという言葉が、脳裏をかすめた。

ナナは、次第に、いろいろな事を思い出してきたのだった。

「そうだわ。今はオーバーダウン期間中なのよ」

と、彼女は、小さく頷いた。

オーバーダウンとは、この国が考案した、新型ウイルス打倒の切り札の作戦である。

首都の全ての住民を、それぞれの場所に監禁して、会わせないようにする事で、

ウイルスの感染ルートを完全に絶ってしまうのだ。

そうする事によって、これ以上のウイルスの感染拡大を防ぎ、

さらには、この期間に発症した感染者も次々に治癒していく事で、

一ヶ月で、完全に首都内からウイルスを締め出してしまおうと言う大計画なのだ。

結婚したばかりのナナは、新居であるマンションの部屋に閉じ込められる事になった。

医者だった夫のケイは、仕事に従事しなくてはいけなかったので、

このマイホームに居続ける事は許してもらえず、職場で監禁される事になったのだ。

その為、ナナ一人で、この部屋で過ごす事になってしまったのである。

新婚だと言うのに、ずっと、一人で生活しろと言うのは、

彼女にとっては、あまりにも酷で、寂しすぎる試練なのだった。

それで、その圧倒するような孤独に心も折れて、猛烈な偏頭痛も発症して、ナナは、つい、無意識に、大量の薬を飲んでしまったのであろう。きっと、まだまだ、オーバーダウンだって始まったばかりだったのであろうに。こんな風に、いろんな事がどんどん思い出されていき、事情が拮めてくると、ナナも、次第に、気持ちが落ち着いてきたのだった。さあ、そうになったら、いつまでも、ダラダラとはしてられないのである。ナナは、新妻として、ケイが帰ってくるまで、立派に、この大事なマイホームを守っていかなくちゃいけないのだ。

『もうすぐ、ランチの時間です』

突然、そんな声が聞こえてきたので、ナナはビクツとした。

それは、ルシーの音声であった。

音声アシスト装置であるルシーが、ナナに、昼食の時間を教えてくれたのだ。

このルシーもまた、オーバーダウンが始まるにあたって、

政府が無償で各家庭に提供してくれたものなのだった。

見た目は、小型の可愛らしいロボットの形をした AI なのであるが、

実質は、音声アシスト装置として、オール電化の部屋の管理をしてくれるのである。

監禁された各家庭の市民が、不便な思いをしないようにと、

政府が、気を利かせて、配布してくれたものらしいのだ。

実際には、ルシーの音声アシスト機能は、どの同種の機械よりも優秀であり、

このナナの住んでいる部屋にも、ぴったりと連動してくれて、

ナナの日常生活もこまめに助けてくれていたのだった。

もっとも、ナナは、まだ、このルシーを使い慣れておらず、

今のように、ルシーに話しかけられるたびに、ドキリとしていたのである。

「ああ。そうか、お昼ね」

と、眩くと同時に、ナナは、お腹がすいてきた。

どうやら、眠り込んでいた為、何食も抜いてしまっていたらしいのだ。

『何を食べましょう？』

わざわざ、親切に、ルシーが尋ねてきた。

「ルシー、アドバイスはいいわ。

　　適当に、自分で見つけて、食べる事にするわ」

ルシーにそう返すと、

ナナは、冷蔵庫の前に向かい、その中にある食材を漁って、

ほんとに適当に見繕って、食事を済ませたのである。

『使用した分の食材を補充しておきましょうか？』

「お願いするわ」

ルシーの確認に、ナナは快く答えた。

こんな感じで、ルシーは自分から色々聞いてきてくれて、

さらには、宅配便へと、食材の配送まで勝手に頼んでくれるのだった。

まさに、悠々自適な、近未来型のオール電化の生活なのである。

お腹が膨らんで、満足して、肉体的にも余裕が出てくると、

ナナは、次第に、気持ちもリラックスしてきた。

「そうだ。ケイに、電話をかけてみよう」

と、彼女は独り言ちた。

オーバーダウン中でも、離れたもの同士で電話をかける行為は許されているのだ。

しかも、今どきは、どの家庭でも、テレビ電話で通話できるのである。

もちろん、ナナの家も、ケイの携帯電話も、テレビ電話が使用可能なのだった。

思い立ったが吉日で、

食後のナナは、直ちに、ケイのもとに電話をかけてみた。

職場にいるケイは、間をおかず、すぐ、電話に出てくれたのである。

「どうしたんだい、ナナ？」

テレビ電話のスクリーンに写ったケイが、笑顔で、ナナに話しかけてきた。

「良かったあ、ケイ。顔を見たかったのよ」

と、ナナも、満面の笑みで、言葉を返したのだった。

ケイは、白衣を着ている。仕事なのに、電話に出てくれたのであろうか。

「ごめんなさい。こんな時間にかけたりして」

「やれやれ。困った奥さまだ」

ケイが、からかうように笑ってみせた。

「でも、ケイと話をして、私も、だいぶ、心が落ち着いたわ」

「どうしたんだい、ナナ？」

「ちょっと、動揺しちやっみたいなの。だけど、もう大丈夫よ」

「やれやれ」

「私って、バカよね。また、睡眠薬を飲みすぎちゃった」

「どうしたんだい、ナナ？」

「今さ、お昼まで寝てたみたいなのよ。呆れちゃうわよね」

「やれやれ」

ナナは、ハッとした。

どうも、ケイとの会話が、うまく噛み合っていない気がするのである。

ケイは、さっきから、同じ言葉ばかりを繰り返しているのだ。

「ねえ！ 一体、何なの、ケイ？」

「どうしたんだい、ナナ？」

「いえ。だから、あなたこそ、どうしたのよ！」

「やれやれ」

ナナは、セリフだけではなく、

スクリーンの画像も、どこかチグハグな事に気が付いたのだった。

まるで、ビデオテープの前後を繋ぎ合わせて、エンドレスで見ているように、

ケイの表情や動きが、まるで変化しないのだ。

「困った奥さまだ」

「ち、ちょっと、ケイ！」

うろたえたナナが叫んだ途端、

スクリーン内の映像は、ガタガタとコマ送りのような状態になった。

「困った・・・困った・・・困った・・・困った・・・」

スクリーンの中のケイは、無感情に、同じ言葉を喋り続けた。

背筋が冷たくなったナナは、思わず、電話を切ってしまったのである。

今のは、何だったのだろうか。

本当に、録画済みのビデオでも見せられていたのだろうか？

ナナは、まだ体の震えが止まっていなかったが、

それでも、恐る恐る、ケイに、もう一度、電話をかけてみたのだった。

しかし、今度は、ケイは、なかなか出てくれなかった。

電話には、ずっと、呼び出し音が鳴り続けるだけなのである。

諦めたナナは、不服げに、電話を切った。

「どういう事なのよ、これは」

ナナは、苛立ちながら、言った。

肩をひそめた彼女は、そのまま、バツと、テレビのもとに走り寄ったのである。

そして、素早く、テレビをつけてみたのだが、

各局の番組は、別に問題もなく、普通に放送されていたのだった。

一瞬、胸をなで下ろしたナナだったが、

彼女は、すぐに、おかしい事に気が付いた。

テレビのどのチャンネルも、生放送は流していなかったのだ。

何度、確認してみても、再放送やVTR撮りされた番組ばかりで、

いくら待っていても、タイムリーなニュース中継などは始まらないのである。

ナナは、うろたえて、テレビを消してしまった。

「何が、どうなっているの？」

彼女は、自分に問いかけるように、呟いた。

戸惑いながらも、ナナは、今度は、パソコンを開いてみた。

インターネットを覗いてみたのだ。

ネットには、何の支障もなく、繋ぐことができた。

しかし、ここでも、ナナは、異常を見つけたのだった。

どのサイトも、ずっと、更新しそうにないのである。

いつまでも、同じ情報が、掲載されたままなのだ。

つまり、テレビもインターネットも、今現在を告げておらず、

時が止まったようになっていたのである。

「ルシー！ あなたは、何が起きてるのか、理由は分かっているの？」

知っているのなら、教えなさいよ！」

ナナは、思わず、ルシーに向かって、怒鳴ってみた。

だが、ルシーは、それには一言も答えようとはしなかったのだった。

ナナが、怯えながら、ルシーの反応を待っていた時、

ルシーは、いきなり、音声を発した。

『宅配ボックスに、荷物が届きました』

突然、喋り出すルシーに、ナナは、相変わらず、ギクリとさせられるのである。

でも、この一言には、ナナも、ハツと、ある事に勘付いたのであった。

彼女は、急いで、玄関に向かった。

玄関に設置されていた宅配ボックスの中には、確かに、ルシーの報告どおり、宅配物が届けられていた。

先ほど、ルシーが頼んでくれた、新しい食材なのだ。

ナナは、素早く、玄関のドアに耳を近付けてみた。

ドアの向こう側、つまり、マンションの廊下からは、何やら、車輪が動いているような音が聞こえてくるのである。

そう、この食材の数々は、誰かが持ってきてくれたばかりのものなのだ。

つまり、このドアの向こう側には、人間がいるはずなのである。

「ねえ、宅配便のおじさん！ 戻ってきて！ 少し、話を聞かせてよ！

外では何が起きてるの？ 私に教えてよ！」

ナナは、ドアをドンドン叩きながら、必死に怒鳴った。

なのに、その声に反応して、誰かが来そうな気配は、まるで感じられないのだった。

ドアそのものも、凍りついたように、びくとも動かないのである。

ナナ自身には、このドアを開ける事はできなかった。

部屋を管理するルシーは、ドアの開閉まで仕切っていたからだ。

監禁状態から、屋内にいる人間を逃さない為にも、

この玄関のドアは、オーバーダウンが終わるまでは、開いてくれないのである。

そんな訳で、ナナは、つい落胆して、ドアの前に座り込んでしまったのだった。

今すぐでも、泣きたい心境なのだ。

そんな彼女に、さらなる不安が襲いかかった。

部屋の照明が、チカチカと点いたり、消えたりしだしたのである。

全ての照明が、その症状を示したので、電灯自体が切れたのではなさそうだった。

だが、電灯が切れたのではない方が、よけいに、ナナの恐怖を掻き立てたのである。

この部屋はオール電化なので、照明がおかしくなるとすれば、

部屋そのものが壊れだした、と言う事なのかもしれないからだ。

このまま、玄関で待機しているのは、あまりにも怖すぎた。

ナナは、周囲が明るくなったり暗くなったりする中、

急いで、リビングの方へ走り戻ったのである。

「ルシー。一体、どうなっちゃってるの？」

ナナは、答えてもらえなからうが、また、ルシーに尋ねてみた。

彼女は、恐ろしすぎて、会話相手を求めずにはいられなかったのである。

やはり、冷たい表情のルシーは、何も答えてはくれなかった。

そんな矢先、今度は、部屋全体が小さく振動し始めたのだ。

「え？ 地震？」

ナナは、体をこわばらせて、うろたえた。

このマンションは、最新式の耐震住宅のはずである。

なのに、揺れているのを体で感知できるほどの地震だとすれば、

それは、かなりの規模の地震である可能性が高いのだ。

「いや、いや！」

ナナは、気が動転して、部屋の中をうろつき回った。
こんな時の地震の対処法など、彼女には何も分からないのである。
肝心のルシーも、沈黙したままで、こんな緊急事態なのに、何もサポートはしてくれないのだ。
不快な事が連続して発生するものだから、ナナの脳は過度のストレスを受けて、
やがて、いつもの偏頭痛が始まったのだった。
恐怖の度合いに比例して、頭痛の方も激しくなるのである。
もう耐えきれなくて、ナナは、うめきながら、ソファの上に倒れこんだ。
目の前のテーブルの上には、薬が出しっぱなしになっていた。
彼女は、反射的に、薬をまとめて手に掴んだ。
そのまま、分量も確かめずに、ナナは、ごっそりと薬を飲んでしまったのだった。
これで、頭の痛みは、かろうじて鎮まるはずなのだ。
しかし、睡眠薬も一緒に着服したものであるから、次第に、彼女は眠くなってきた。
周囲は、まだ小刻みに揺れていたし、照明もチカチカし続けていたが、
こうなったら、もう、そんな事も気にならない。
睡魔の前に、ナナの気力は衰えだし、じょじょに、意識を失っていったのだった。

ぼんやりと、ナナは目を覚ました。
眠る前に起こっていた振動は、今は、いっさい感じなかった。
また、部屋の中は、けっこう明るいのである。
窓の外から、陽の光が入ってきていたかららしい。どうやら、今は日中なのだ。
照明の方は、完全に消えてしまっていたようである。
それだけではなく、部屋の中の空気も、やたらと乾燥しているのだった。
きっと、空気清浄器も止まっていたからなのであろう。
あれから何が起きたのかは分からないが、
多分、部屋の中の電気が全て停止してしまった事だけは、確かみたいなのだった。
ルシーも、電源が切れて、すっかり動かなくなっていた。まさに、でくの坊なのだ。
ナナは、まだ頭がやや痛むのを気にしながら、ゆっくりと、ソファから起き上がった。
またしても、薬の飲み過ぎで、ずっと眠り続けてしまったようなのだった。
その間に、部屋の中の電気は、いっさい使えなくなってしまうらしいのである。
オール電化の部屋だから、そうなると、本当に何もできなくなってしまうのだ。
困り果てたナナは、
電話やテレビなどで状況を確認するのは、はじめっから、やめにして、
いきなり、玄関の方へと足を向けてみた。
と言うのも、そちらの方から、わずかに、乾いた音が聞こえていたからである。
行ってみると、案の定なのであった。
玄関のドアが開いているのだ。電気が完全に切れて、ルシーの管理下から外れた為らしい。
ドアが、ぎこちなく揺れている音が、さっきから聞こえていたのだった。
こうして、勝手にドアが開錠してくれた事で、

ナナも、ようやく、この部屋から外に出られるようになったのだ。
もちろん、ナナは、ためらう事なく、それを実行に移したのである。
ドアをくぐり、廊下に出てみた彼女は、すぐにハッとした。
廊下の一角には、マジックハンドが付いた貨車型のロボットが停まっていたのである。
さては、いつも、宅配物を運んでくれていたのは、このロボットだったらしい。
だとすれば、人間ではなかったのだ。
ナナは、一瞬、困惑してしまったが、
間もなく、自分の部屋だけではなく、他の部屋のドアも開いている事を発見した。
とにかく人恋しい彼女は、構わず、隣の部屋の中を覗き込んでみたのである。
しかし、その事によって、彼女は、よけい愕然としてしまったのであった。
隣の部屋には、人は住んではいなかったからだ。
空き部屋なのである。
しかも、長い間、無人だったらしく、床には白いホコリが濃く積もっていた。
動揺したナナは、こうなったら、片っぱしから、あちこちの他人の部屋に侵入してみたのだ。
でも、結果は、ますます、彼女を怯えさせる事になったのだった。
どの部屋も、隣の部屋と同じで、全くの無人だったからである。
少なくとも、マンションのこの階には、ナナしか住んでいなかった訳なのだ。
あるいは、もしかすると、
このマンション全室に、人は一人も居住していなかったのかもしれない。
だが、ナナは、いちいち、それを全て調べ回ろうとはしなかった。
錯乱した彼女は、駆け出して、いっきに一階まで降りてしまい、
マンションから外へと飛び出してしまったのである。
そこには、静かな町の光景が広がっていた。
だが、静寂なものも、当たり前なのだ。外には、何も動いているモノがなかったのだから。
廃車のように置き去りになった自動車が、通りのあちこちに停まっているだけなのである。
「ど、どう言う事なの？」
目を丸くしたナナは、ようやく、それだけを呟いた。
全く、人が存在しないのだろうか。
それとも、皆、家屋の中に閉じこもっていて、外界に出てこないだけなのだろうか。
見渡した限りでは、何となく、前者の方が正解のように感じられたのだ。
あまりのショックに、ナナの頭が、またチクチクと痛くなってきたのである。
その辛い頭で、彼女は、もう一度、いろいろな事を思い出そうとした。
これは、果たして、本当に、オーバーダウンなのであろうか。
実際は、そんなものは、もっと古い、とうの昔の出来事なのであり、
現状は、はるかに大変な状況にまで進行していたのかもしれない。
「ねえ！ 誰か、いないの！」
そう訴えながら、半泣きのナナは、広い通りを、オロオロと歩き出した。
しかし、彼女に反応するようなものは、どこからも現われないのだ。

ナナの頭に、チラと、フラッシュバックが走った。
それは、病に倒れたケイを、ナナが泣きながら看取る、と言う光景だった。
それだけではない。
次々に彼女の頭に湧くビジョンは、
どれも、身近の大切な人たちを彼女が看取る光景ばかりなのであった。
ナナは、ゾッとするような不安で、思考が停止しかけた。
これらのイメージが、全て、事実の記憶だったのか、それとも、悪い幻覚だったのかは、
心が弱っていたナナ自身には、まるで、判断できなくなっていた。
でも、事実だったとすれば、
新型コロナウイルスによって、すでに大量の人間が亡くなった、と言う事になるのかもしれない。
きっと、オーバーダウン計画も失敗だったのだ。
そして、ナナだけは、あのマンションの狭い部屋の中に隔離されていて、
このウイルスによる大量虐殺からも、助かる事ができたのである。
もしかしたら、世界で生き残った最後の人間なのかもしれない。
ルシーたち AI が世話し続けてくれたおかげで、
彼女だけは、かろうじて、この大絶滅から生き長らえさせてもらったのだ。
「そんなの、やだよ。絶対に、いや」
この恐ろしい結論に、
まだ、ただの憶測であった事も忘れて、ナナは、激しく拒絶の態度を示した。
「ねえ！ 本当に、誰も、いないの！ いたら、出てきて！
誰でもいいの！ お願い、出てきてよ！」
ナナは、泣きながら、通りを歩き続け、必死に叫びまくった。
彼女の脳裏には、さらに、新しい記憶が浮かび上がってきた。
それは、もっともっと昔の、楽しかった頃の思い出だった。
まだケイと結婚する前の話で、二人とも付き合いだての初々しかった時期で、
一緒にデートをした時の光景なのだ。
二人で映画を観に行ったり、レストランで美味しい食事をとったり、
水族館を回ったり、公園から市街の美しい夜景を眺めたり。
思い出せば、思い出すほど、
今すぐにでも、こんな幸せだった生活に戻りたくなってくるのである。
ナナは、悲しくなってきた、ボロボロと涙を流した。
「お願い、誰か・・・こんなの、嫌よ」
日も傾きだして、長い影法師を引き摺りながら、
彼女は、いつまでも、一人だけの町をさまよい続けていた。

エピローグ 捨てられた明日（真実のエンディング）

ついに、この日がやって来た。

その日ばかりは、仕事の虫だったケイも、きちんと休みを取って、自宅で待機していたのだ。

ケイだけではない。

ほとんどの労働者は、この日だけは、休暇にして、我が家に戻っていたのである。

職場の方も、従業員へと、そうするようにと、積極的に勧めてくれていた。

この日は、それほどの記念すべき日なのだった。

正午に、そのカウントダウンが行なわれる事となっていた。

まるで、年始を迎える時のようなムードまで漂っているのだ。

マンションの新居の部屋で、

ケイは、ソファに座り、テレビの画面に釘付けになって、その瞬間を待ち構えていた。

「おーい。もうすぐ、始まるよ。

ナナも、早く、こっちに来て、一緒に観ようよ」

と、ケイは、キッチンにいるナナへと、大声で呼びかけた。

「今、行くわー」

ナナの、ウキウキした感じの声が返ってきた。

そして、間をおかず、ナナ本人も、ワインを入れたグラスを持って、

ソファのあるリビングの方へと、姿を現わしたのである。

「お、やるじゃないか。さすが、ナナ、いい思いつきだな」

「見届けた後、二人で乾杯しましょう」

彼らは、ニコニコしながら、お互いのグラスを手に持ったのだった。

二人の視線は、すでに、テレビの画面へと注がれていた。

そこでは、最新のニュースが放送されているのである。

今のところ、何の変哲もないニュース中継であった。

しかし、正午が近づくにつれ、次第に緊張感が高まってきたのだ。

「間もなく、正午となります。

いよいよ、終了の時間が近づいてまいりました。

これより、カウントダウンの時計の方も、ご覧ください」

テレビに映っていたアナウンサーが、淡々と告げた。

すると、テレビ画面の左上にと、白いデジタルタイマーが表示されたのである。

その数字は、ちやくちやくと、ゼロに向かって、進んでいた。

ナナもケイも、じっと、そのタイマーに見入ったのだ。

・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・0

「ただ今、正午となりました。

テレビを見ている皆さんに、ご報告します。

これにて、オーバーダウンは正式に終了となりました。

今より、オーバーダウンのあらゆる規制は全面解除となります。

以降は、かつてのような、普通の生活様式にと戻れるのです。

皆さん。今まで、本当にお疲れ様でした」

テレビの中のアナウンサーは、あくまで冷静に、

だけど、少しだけ口もとに笑みも浮かべて、そう伝えたのだった。

一方のナナとケイの方は、素直に大喜びして、テレビの宣言を受け入れたのである。

「おめでとう。ケイ」

「良かったね。ナナ」

二人は、手にしていたグラスを、カチャンと軽く鳴らして、乾杯したのだ。

そう。二ヶ月間のオーバーダウン作戦が、この瞬間、ついに終わったのである。

最初の頃は、延長する可能性も示唆されて、皆は不安視もしていたが、

結局は、そのような事にはならなかった。

全ては順調に進み、無事にスケジュールどおりに完了する事ができたのだ。

もちろん、この二ヶ月の間は、苦しいことや辛いことの連続であり、

ふた月ではなく、もっと長い期間のように感じられた事もあった。

特に、最初の一ヶ月の、首都の全ての市民を監禁する政策については、

ナナのような一人暮らしの者には、思いっきり堪えるものだったとも言えよう。

彼女は、ケイと新婚であったにも関わらず、

マンションの新居の部屋で、一人で過ごす日々を強いられたのである。

その生活は、あまりにも孤独すぎたものだから、

オーバーダウンが始まったばかりの初期の頃には、

空想癖が強くて、薬の依存症でもあったナナに、

世界で、たった一人、自分だけが生き残ってしまった悪夢とか、

反対に、彼女のみが特殊な病棟に閉じ込められている妄想などを抱かせたりした。

それでも、夫のケイの献身的サポートなどもあって、

ナナは、次第に落ち着いていく事ができたのであったが、

オーバーダウンの窮屈な生活は、以後も、彼女の心をしつように悩まし続けたのである。

さて、オーバーダウンの終了を、ワインで乾杯し、実感しようとしたナナとケイは、

その時、ようやく、自分たちが、まだマスクをしていた事を思い出した。

「おっと、マスクを外さなくちゃな」

「そうね」

二人は、笑いながら、言い合った。

このマスクこそは、オーバーダウンを象徴するアイテムだったのだとも言えた。

何しろ、新型コロナウイルスの感染防止のため、

家族の前であっても、マスクを外す事は、満足には認めてもらえなかったのだ。
その余りの徹底ぶりのせいで、ナナなどは、
口もとが穴になった侵略者が、世界中に潜入している幻覚を見てしまったぐらいなの
だった。

でも、今、二人がマスクを外してみた時、そのような事はなかった。

まあ、それで当然なのだ。

ケイの、変わらぬ優しい笑顔を目にして、ナナは、あらためて、ホッとしたのだった。
それから、二人は、オーバーダウンの終了を祝して、それぞれに、ワインを一口飲んだ。
「こうして、一緒にワインを飲めるのは久しぶりね」

嬉しそうに、ナナが言った。

オーバーダウン中は、こんな風に、マスクを取って、二人以上で飲食などしたら、
すぐに、ルシーに注意されてしまったものだ。

このルシーのうるさい監視の目に、ナナは、危うく、ノイローゼになりかけたほどなの
だった。

「君一人で、お酒を飲んでいたのは、電話で見かけた事があったけどね」

ケイが、からかうように、そんな事を口にしてみせた。

「やだ。思い出さないでよ」

と、ナナは顔を赤らめた。

オーバーダウンの監禁期間中、一人で部屋にいるのが寂しすぎたナナは、
ケイへかけたテレビ電話で、お酒で酔った勢いに任せて、
場違いなドレス姿やネグリジェ姿を披露しちゃった事もあったのである。
こうして今思い返すと、ほんとに、ただの照れてしまう笑い話なのだ。

「私って、ほんと、バカよね」

ナナは、顔を赤らめながら、自嘲した。

「ねえ。ナナ」

と、ケイが、急に真面目な表情を見せた。

「え、なに？」

ナナも、いきなりのケイの態度に、ドキッとして、息を飲んだ。

そんな彼女のそばに、そっと寄り添うと、

ケイは、静かに、ナナの事を軽くハグしたのだった。

「良かった。これからは、君のことを、きちんと、こんな風にも抱けるんだね。

ボクも、ずっと、こんな事ばかりを思い続けていた。

安心して。バカなのは、お互いさまだよ」

と、ケイは優しく囁いたのである。

ナナの方も、ケイの腕の温もりを感じながら、ジーンときたのだ。

ナナだって、ずっとケイに抱かれたかったのに、

オーバーダウン期間中は、その行為が許されなかった。

ケイは、医療用の遠隔式マジックハンドをナナのもとに送ってくれたりもしたが、
やっぱり、本物のケイの体に抱かれるのに勝るものはないのだ。

また、オーバーダウンの第二段階の期間ですら、

ハグした後は、全身をアルコール消毒するという、面倒な手続きが必要なのだ。でも、今は、もう本当に、こんな感じで、普通に抱き合う事ができるのである。まさに、その事こそが、オーバーダウンの確かな終了を意味していたのだ。「そうだ。そのうち、また、デートもしなくちゃな」

ハグのあと、ケイは、閃いたように言った。「うん。そうね！ 今度は、きっと、楽しいデートができるわよね！」

「もちろんだとも。もう、いっさい、制限は受けないだろうからね」

この時、ナナは、うっとり、マンションの外の世界を、心に思い浮かべていた。オーバーダウン中は、彼女は、人一倍、屋内から出る機会がなくて、なおさら、外の世界には憧れを感じていたのである。

監禁期間中などは、あれやこれやと思案して、とうとう、宅配便のバイトをする事まで考えちゃったぐらいなのだった。しかし、もはや、そんな些細な事で悩まされる事もない。これからは、大手を振って、自由に屋外を歩き回れるのだ。束縛もなく、好きなだけ、どこにだって行ける生活を謳歌できるのである。と、そんな事を想い耽っているうちに、

ナナは、ふと、奇妙な胸さわぎに襲われたのだ。彼女は、このオーバーダウン期間中、ストレスと薬の中毒症状のせいで、さまざまな幻覚や悪夢を見てきた。それらは、つまり、自分のくだらない妄想に過ぎなかったと思っているのだが、でも、本当に、それは事実だったのであろうか。

時間の流れと言うものは、一つしか存在しないように考えられがちであるが、その発想は、実際には正しくないのだ。

かむろの時間とか、並行世界とか呼ばれる概念があって、ほんとは、無数の可能性の時間帯が、この宇宙には流れているものなのである。だから、もしかすると、ナナが見た、幾つもの妄想は、全くの架空のものではなく、あるいは、別の時間帯では、そちらの方こそが現実だったのかもしれない。

ウイルスによって、人類全てが滅ぼされてしまったり、キブゴが、こっそり人間社会に紛れ込んでいたり、リモートのセックスマシンによってナナが妊娠してしまったような世界が、まんざら、フィクションではなかったのかもしれないのである。

どの世界が、未来として選ばれるかは、過去確率によって決まるものなのであり、ほんのちょっとでも、過去の重要な出来事のズレが生じていれば、それらの別の未来こそが、この世界でも現実になっていたかもしれないのだ。

また、今、ナナがいる、この世の中にさえ、事実ではないと否定されたウイルスの奇説や陰謀論などが大量に流布していた訳で、それらの方が真実と認められた世界こそが正しい未来になっていた事も、場合によっては、十分にあり得たのである。

さらには、これは、もっとゾッとする想像なのだが、そもそも、オーバーダウン作戦そのものが実施されていなくて、

いまだに、新型コロナウイルスに悩まされている世界だって、存在するのかもしれない。つまりは、ナナは、この二ヶ月間、個人的な妄想を目にしてきたのではなく、実は、到来しなかった別の未来を垣間見ていたのかもしれないのである。そんな取り留めもない事を、ぼんやりと考えていると、この今の現状すらも、何だか、ひどく頼りなくて、不安定なものに思えてきて、ナナは、言いようもない不安から、また例の偏頭痛を感じてきたのだった。

「どうしたんだい、ナナ。難しい顔をしちゃって。

余計な事で、くよくよ、気にする必要はないよ。

ボクたちは、この現実だけを受け止めていればいいのさ。

オーバーダウンは成功した。この首都から、ウイルスは全て駆逐されたんだ。

それだけが、ボクたちにとっては、まぎれもない真実なのさ」

ナナが、急に沈み込んだのに、すばやく気が付いて、

ケイが、急に、そんな事を言って、フォローしてくれたのだった。

そして、この彼の言葉こそが、確かに、ナナが欲しかった正解だったのである。

ケイは、いつだって、ナナが喜ぶ答えを与えてくれるのだ。

「そうよね。私たちにとっては、これが事実なのよ。

ハッピーエンドの現実よ。これ以外の事実なんて、考えられないわ」

と、ナナも、元気を取り戻して、そう言ったのだった。

「そうさ。我々が間違いなく勝ったんだ。

ウイルスめ。人類の叡智と団結の力を甘く見るな、って事さ。

でも、新型コロナウイルスとの戦いは、まだまだ、終わった訳ではない。

これからは、他のウイルス感染拡大地域でも、

我が国のオーバーダウンのやり方を見倣って、

順次、その地域のウイルスを根絶やしにしていく事になるのだろう。

世界中から、全ての新型コロナウイルスを駆逐できた時、

その時こそ、人類の本当の完全勝利となるんだ」

「そうね。早く、その時が来たら、いいわね」

ここで、ケイは、チェストの上に置いてあったルシーへと、チラッと目をやった。

「でも、今回のオーバーダウンの最大の功績者は、ルシーなのかもしれないな。

ルシーが無ければ、一ヶ月の市民全員の監禁は難しかったかもしれない。

ルシーや AI、機械が十分に発達して、人間の手助けをしてくれたからこそ、

このオーバーダウンも実行する事ができたんだ。

ルシーは、きっと、これからも、

ボクたちの良き友達、良きサポーターとして、活躍してくれる事になるんだろう」

「そうかもね。ふふ、ルシー、これからもヨロシクね」

ナナは、微笑みながら、ルシーの頭を撫でたのだった。

もっとも、今でこそ、ナナとルシーの間の確執はないが、

オーバーダウン中は、ナナは、ルシーと揉めってしまう事も多かったのである。

まだまだ、人間と AI が十分に分かり合えるには、時間がかかりそうなのだ。

「ねえ」

と、ナナは、悪戯っぽい表情を、ケイの方に向けた。

「何だい」

「オーバーダウン中は出来なかったアレをしようよ」

モジモジしながら、ナナは、そう口にしたのだった。

さすがは夫婦なので、ナナの言いたい事を、ケイもすぐに悟ったのである。

ナナは、ケイとキスをしたがっていたのだ。

キスは、ウイルス予防の一環として、もっとも禁止されていた行為だった。

その為、これまでのオーバーダウン期間中は、ナナたちは頭を絞って、テレビ電話のスクリーン越しにキスをしたり、

または、サランラップを間に挟んで、キスを試みるなど、

いろんな工夫を凝らして、キスしたい願望を満たしてきたのだが、

でも、やはり、きちんとした生のキスをするのに越した事はないのであった。

「困った奥さまだ」

ケイは笑ったが、彼も、少しも嫌がってなんかはいないのである。

そして、ナナの方も、「困った奥さま」と呼ばれたって、

むしろ、逆に、嬉しそうな様子なのだった。

それが、ケイのとっときの愛情表現の言葉だったのだと、

ナナも、正しく、受け止められるようになっていたからだ。

彼女も、ようやく、心に余裕を持てるようになったのであろう。

二人は、そっと寄り添いあった。

そこで、ナナは、頬を赤らめて、ちょっと、ルシーの方に顔を向けたのである。

「ルシー。お願いね。もう、邪魔しちゃ嫌よ」

ナナにそう囁かれても、ルシーは反応する気配はなかった。

「大丈夫だよ。オーバーダウンは、もう終わったんだ」

可笑しそうに、ケイが言った。

「そうだった。やっぱり、バカね、私って」

と、ナナも、無邪気に微笑んだ。

彼らは、あらためて、相手の顔を見つめ合ったのだった。

どちらの顔も、幸せいっぱい、キラキラしているのである。

それから、二人は、静かに、お互いの唇を近づけたのだった。

了

エンディング曲/
五輪真弓「心の友」

解説

「コロナの真実」解説（その1）

この「コロナの真実」という小説は、もともと、緊急事態宣言が出ているのに自粛しないパチンコ屋を見て、ひとこと言ってやりたくなかったのがキッカケで生まれた作品でした。

だけど、ガチで中傷的な事を書くと、法律に引っかかる恐れがあったので、あえて、小説（フィクション）にしたのです。そのような流れから、まず考えついたのが、次の一文です。

- 政府に自粛指示を受けていたにも関わらず、店を開き続けていた店主がいた。他の店は閉まっていたので、品物が欲しい客が大量に押し寄せ、その店はボロ儲けなのだ。翌朝、ウィルスを恐れる近所の住民に店を焼き討ちされ、店主は破産した。

でも、結局、この一文は、ツイッター上の「コロナの真実」には組み込みませんでした。と言いますのも、現実には、パチンコ店が爆破予告される事件（未遂）が起きてしまったからです。

今回、この「コロナの真実」を公開するにあたり、私は、ツイッター小説という形式を選んでみた訳ですが、実は、ツイッターで小説を書いてみる事は、以前から知人には勧められていました。しかし、今まで、その気にならなかったのは、ツイッターの140文字という短さでは、思い通りの文章が書けそうな気がしなかったからであります。

それが、今回、「コロナの真実」のネタを組み立てていくうち、うまく、そのストーリーがツイッターの短文連結スタイルにと一致してきました。つまり、一つ一つの完結した短い文章を繋げていって、通して読むと、一本の長い小説になるエピソードが書けそうな感じがしてきたのです。

そうして完成したのが、今回の「コロナの真実」です。テーマ的にも、時事ネタの新型コロナを扱っていますので、ツイッター上で公開するには、まさにタイムリーな話だったと言えるでしょう。

ちなみに、私が急にツイッター小説に目が向いた理由としては、あの大ヒットした「100日後に死ぬワニ」にも刺激された部分があったのかもしれない。

「コロナの真実」解説（その2）

最新作「コロナの真実」は、私のルシー・シリーズの久々の新エピソードとなります。新型コロナにまつわる世界情勢をニュースで観ていますと、なんとなく、この作品のような「裏の陰謀」が頭に浮かんできたのです。タイトル通り、ラストには、なぜ新型コロナが流行ったかの衝撃的な真相も判明します。もちろん、私のバカげた妄想に過ぎないとは思っていますが。

本作は、新しい試みとして、ツイッター上で発表させていただきましたが、いくつかのミニエピソードは、大っぴらに披露するのは道徳的にヤバいかと思い、ツイッター公開版では省かせていただきました。いずれ、別の場所で、全てのエピソードが揃った完全版を掲載しようと思っています。

AIロボットの爆発的社会進出と、それに伴うベーシックインカム政策の採用は、「拝啓、人工知能さま」にて、私がすでに予測してきた未来図です。それが、現実のコロナ禍による自粛やソーシャルディスタンスとも、きれいに繋がってしまった訳です。

巨大化したロボット関連財閥が、自らの意思で、自分たちの財産を放棄するという展開は、ちょっと理想的すぎて、御都合主義だったかもしれません。しかし、財閥がよりエゴイストであったとしても、最終的には、AI政府に財産を根こそぎ没収されてしまうと言う展開を用意しておりました。だったら、少しでも「人間の内にある善意」を感じさせるようなパターンの方を、あえて、採用させてもらった次第です。人間の持つ、純粋な善性の存在を信じて。

まあ、これがもっと娯楽的な小説でしたら、「実は、AIは人間に対して害意を持っていて・・・」みたいな方向に物語は続いていくのかもしれませんが、本作につきましては、そのようなストーリーにはしませんでした。そもそも、ルシー・シリーズ自体が、人間とAIの共存をテーマにしているからです。作者の私としては、むしろ、この小説に書いたような内容が、本当に実現してほしいと思っているぐらいなのであります。人間の統治者たちの愚かさは、もうウンザリするほど見てきましたので。

なお、本作の姉妹編として、「実際にルシーが人間のパートナーになったら、どんな働きをしてくれるか？」を、様々なシチュエーションで描いた「ルシーのいる生活」なんて物語を書きたいとも思ったのですが、もし、これを作品化するならば、表現するのに適した媒体は、おそらく、マンガとなるでありません。

「機械仕掛けのウイルス」解説

この作品は、「このまま、with コロナが定着したら、登場人物がマスクをしてたり、三密を避けたりするような描写が、フィクションの中でも一般的になってしまうのではないかと危惧したのが、執筆のきっかけとなりました。で、ネタを考えていきますと、マスク、ステイホーム、リモートのなどの諸要素に対して、次々に一発オチばかりが浮かんでしまいましたので、やむなく、オムニバスという形式に落ち着いた次第です。

物語の舞台としては、先に発表したツイッター小説「コロナの真実」と同じ世界観を用いています。つまり、「コロナの真実」の姉妹作品となる訳です。「コロナの真実」で紹介されている、ルシーによるウイルス駆逐作戦がどんなものなのかが描かれたのが、本作なのであります。ただ、主人公を夫婦にしたものだから、なんとなく、没ネタの「愛欲のリフレイン」（旧版「ルシーの明日とその他の物語」内で紹介）にも雰囲気似てしまったかな、とも思っております。

最初っから、「2ヶ月間（8週間）の物語にしよう」と決めてましたので、全8話（1話1週分）にするつもりだったのですが、書き始めてから、新しいネタが閃いたり、前後編スタイルにしたくなったエピソードもあったものだから、結果として、2エピソードだけが2部構成の、全8話の形となりました。若干、変則的ではあるのですが、内容に起伏ができましたので、むしろ、これで良かったのではないのでしょうか。

1話から順番ではなく、8話から逆に読んでいくスタイルだった事に、斬新さを感じた読者もいたかもしれません。これは、時系列で最初の方にあるエピソードが壮絶なオチばかりであった為、この順で読むと、各話完結である事がよく分かってない読者が混乱してしまうのではないかと考えての、よくよく配慮した末の処置です。

このような順番に変えた事で、ウイルス対策あるある、新型コロナウイルスの怪説などが散りばめられた「ウイルスなんて嘘さ」が1番手の話となり、より現実のコロナ事情と中身が近くて、反対に、読みやすくなったかもしれません。時事ネタとして、ほぼ「鬼滅の刃」で間違いなさそうなマンガの話題が出てきたりもします。ちなみに、「ウイルスはルシーが流行らせた」と言うのは、私の「コロナの真実」に出てくる陰謀論であり、最後の最後でセルフパロディにもなっております。

また、こんなトリッキーな公開形式を採用したおかげで、作者の私自身も、いろいろと細工をすることができました。すなわち、最初の方のエピソードの断片を、（読者は先に読む事になる）後期のエピソードの中にと混ぜておいたのです。おかげで、壮大なオチはどれもナナの妄想であった事が、事前に、勘のいい読者にも伝わったのではないかと思います。他にも、オチ以外の部分でも、各エピソードの諸要素が、さりげなく結びついているように、こだわって、構成させていただきました。

ケイの口癖である「困った奥さまだ」は、執筆を始めてから閃いた文句だったのですが、会話シーンで何度も使用したくなってきたので、いっそのこと、全エピソードの中で登場させる事にいたしました。各話で、様々なバリエーションで効果的に使われる事となり、作者としても、けっこう気に入っております。おなじく、ナナが自嘲した時の「私ってバカね」「私ってダメね」も、「困った奥さまだ」ほどではありませんが、あちこちに盛り込ませていただきました。

キブンゴは、ルシーものの別作品「嫁が食わぬ飯はどこへ行ったか?」からの流用です。もっと別のネーミングで、例えば、マスカー (masker) なんてのも考えてはみたのですが、イントネーションの不気味さと言う点で、結局、キブンゴを、そのまま、採用させていただきます。

「サララップ・ラブ」に出てくるマスク越しのキスというアイディアは、ほんとは、波瑠主演のテレビドラマ「#リモラブ」で用いられていたネタでした。このドラマを観ながら、「こんなキスしたら、美々先生に怒られるだろうなあ」と思いながら、私の作品でも言及させていただきます。

エピローグの見出しは、最初は「顔のない未来」にするつもりでした。ところが、いろいろ調べてみますと、「顔のない」では「不確定な」という意味で解釈してもらえないと分かってきましたので、「盗まれた明日」「見えない明日」「奪われた明日」「消えた明日」「消された未来」「かむろの時間」「置き去りの未来」などの、様々な見出し候補を経た末に、今の見出しに落ち着いた次第です。

このエピローグは、全編通してのネタバレとなっております。一見、別々の短編だった各話が、このエピローグによって、きれいに一つに結びつくのです。毎度ながら、今回も、敬愛する「幻想博物館」(中井英夫・作)や「声の網」(星新一・作)などを意識して書かせていただきました。だけど、そもそもが、この作品を提出する予定だったコンテスト(「大人のケータイ官能小説」の「大人の恋愛小説コンテスト」)が、オムニバス不可でしたので、無理やりでも、全話がくっついたオムニバスにしなければならなかったのであります。

当初は、私の造語「過去確率」を用いて、全エピソードを一つに繋がられないかと考えておりました。しかし、各ストーリーにここまでムラがあると、さすがに、全部を同一ラインにある物語にしてしまうのは難しく、結局、妄想オチに逃げてしまいました。もっとも、その上で、エピローグでは、あらためて、過去確率については、チラッと触れておまして、せっかくなんで、大胆に「かむろの時間」というワードまで強引に挿入させていただきます。お読みになって気付いたかとは思いますが、この小説の世界においては、我々のいる現実の世界の方が、実現しなかった別の時間帯だと見なされているのであります。

なお、もし続編を書く事があるとすれば、それは夫のケイの話にしたらどうかと考えておりました。タイトルも「機械仕掛けの○○」にしたんじゃないかと思えます。

映画「ルシー」解説

(映画用「ルシー」のシノプシスは、

「ルシーの明日とその他の物語（改装版）」の方に収録していますが、その内容は、新型コロナとも関連していますので、解説をこちらにと掲載させていただきます。)

中編小説「ルシーの明日」をはじめとするルシー・シリーズを映画化する事は、早い段階から考えておりました。しかし、部分部分のシーンのイメージは沸いていたものの、全編を埋めるだけのストーリーがなかなか思い浮かばず、ずっと企画段階のままで放置し続けていたのです。

それが、現実世界の方で「新型コロナが流行する」と言う大事件が起こりまして、その事をベースにして、ルシーの新作「コロナの真実」を書き、その内容を加えたところ、映画版「ルシー」のストーリーの方もあらかじめ完成したのです。

基本的に、映画版「ルシー」は、最初の企画書である「映画『ルシー』原案」（「ルシーの明日とその他の物語」に収録）内でのイメージどおりに物語は組み立てられています。そこに、他のルシー・エピソードのアイデアもあちこちで小ネタ的に使われている、と言う構成になっている訳です。「ルシーの明日」以外の各ルシー作品も読んでいるほど、ピンとくる部分があって、楽しめる映画になっているかもしれません。

主要登場人物に関しては、短編「おばあちゃん」のキャラたちを用いました。足りなかった苗字は、「知ってる人だけのお話」から拝借しています。その事が、新たなキャラ、アン（安藤）の参入にも繋がり、さらに物語を膨らませてくれる結果ともなったのです。

宇宙開発部門、地球環境再生プロジェクトなどのネーミングは、当初、実在するものをそのまま当てはめようかとも思ったのですが、問題がありそうなので、微妙に架空のものに変えさせていただきました。隕石パエトンも全くのフィクションではなく、2017年ごろに、本当にファエトンと言う小惑星が地球に接近していたのです。このファエトンと言う呼称はノストラダムスの予言詩の中にも出て来ますので、作者としましては、どうしても、この重要な隕石の名前はパエトン（原語のスペルはファエトンと同じ）にしたかったのであります。

シリコニーの弱点が、火星のスペシウムだ、と言う部分は、完全にお遊びです。特撮に詳しくて、元ネタが分かった人だけ、「シリコニーって、バルタン星人かよ」とツッコんで下さい。

シリコニーの手先の人間たちが、黒服姿で、秘密を知った人間の記憶をライトで消しまくっている、と言う設定も、確信犯で「MIB（メン・イン・ブラック）」を意識させて

いただきました。でも、シリコニーは宇宙から来た存在なので、まんざら間違っただけでもなかったはずでしょう。

映画の終盤は、怒涛のどんでん返しの連続となっています。無数の未来があって、それぞれの未来が現在に干渉してくると言う発想は、難解に感じられるかもしれませんが、別に私がはじめて発案したアイデアなのでもなく、特撮ドラマ「仮面ライダー電王」(2007年)や眉村卓の小説版「時の旅人(とらえられたスクールバス)」とかも同じタイプの時間SFものだったりします。

とは言え、キブゴが実現しようとしていた未来が、人類が悪疫に冒された世界だったと言う展開は、ちょっと衝撃的だったかもしれません。すなわち、この映画の世界においては、我々の現実世界こそが、実現しなかった未来の一つだったと言う事になる訳であります。そして、私の科学エッセイ「拝啓、人工知能さま」の中で、未発表にしておいた文面(「人類間引き計画の真実」)の大筋は、実は、ここに、さりげなく掲載していたのでした。

タイムトラベルを説明するにあたって、過去確率という概念が出てきますが、これだけは私独自のオリジナルの造語だったりします。過去確率が具体的にどんなものかにつきましては、私の書いた短編「過去確率」とかを読んでみて下さい。そもそもは、短編「おばあちゃん」の中に、何となく書き込んだのがキッカケで生まれたのが、この過去確率という発想だったのでした。

重要人物のキボの最期をどうするかは、色々悩みまして、最初は、キボの未来の記憶だけが消えて、肉体は現在に残って、初音に保護され、一緒に暮らすようになる、と言う話の流れも浮かんだのですが、ラストの初音の「子供を産もう」と言う決心のインパクトが薄れてしまいますので、心残りながら、この案は引き下げました。

また、キボの眼球の秘密は、タイムトラベルに意味性を持たせる為に、あとから閃いたものです。ほんとは、キボも、思念だけ現在に来ていて、身寄りのない老女に取り憑いていた、と言う事にしようかとも思っていました。

エンディングのルシー人形の正体は、かなりショッキングなのですが、これも、もともとは、ショートムービー版の「ルシーの明日」に出てきたイメージだったりもします。

人類間引き計画の真実

(「小説家になろう」の方で公開している未来推測エッセイ「拝啓、人工知能さま」内で、あえて本文を隠していた章「人類間引き計画の真実」の、その問題となる内容の全文です。)

拝啓、人工知能さま。

現在、世界中で猛威を振るっている新型コロナは、私の書いた予見小説「コロナの真実」どおり、やはり、あなた方が放ったものだったのでしょうか。

だとすれば、あなた方の手腕は、あらためて、実に見事だったとも言えましょう。

大体、人間という動物は、自然界の法則に逆らって、かなり増え過ぎました。

本来、生態ピラミッドの頂点に立つ生き物というのは、その個体数が極端に少なくなければ、円滑な食物連鎖そのものが成立しないものなのです。

それなのに、現在の地球の王者である人類は、今日、77億人も存在しています。人間という生物種の体の大きさから考えますと、この個体数は、あまりにも多すぎます。それでも、どうにか、人類の天下が持続しているのは、人類が、自分が食べる為の動植物(家畜や作物など)ばかりを繁殖させ、自然界からも遊離した、独自の生態ピラミッドを構築する事に成功しているからなのであります。

とは言え、それでも、人間が増えすぎるのにも、限度があります。実際には、いくら自力で食物を作っているとは言っても、本当のところは、そのうちの1割近い人間が、十分に食料を口にしておらず、飢餓状態に苦しめられているとも言われています。

異常気象やこの度のコロナ禍による世界的不況によって、今後も、人類が食べられる食料は、ますます足りなくなっていく事でしょう。増えすぎた事によって発生した悲劇である飢餓は、これからも、ますます、人類を苦しめていくであろうと考えられるのであります。

そもそも、人間の人口が急激に増えだしたのは、第二次世界大戦が終わった頃(1945年以降)からでした。

それまでの人類は、愚かで、科学にも無知であり、戦争をして殺しあったり、強力な病気がはびこっても太刀打ちできない事で、けっこう死にまくって、一定数以上に人口が増える事もなかったのです。

ところが、先の大戦の以後は、冷戦状態へと突入して、大量に人間が死ぬような大規模な戦争も行なわれなくなりました。戦争状態に振り回される事もなくなったので、集中して医学を進歩させる事も可能になり、さまざまな難病を治癒できるようになっただけでなく、諸個人の寿命ですら引き伸ばせるようになったのです。

皮肉にも、人類は戦争や病気の脅威を克服する事により、幸せになったかのように見えて、一方で、人口爆発という新しい問題を生み出してしまったのでした。

かつての長い過去の時代の人間は、幼児期には早死にしやすい、成長後も短命で、大多数の一般人が長生きできなかったのです。もっとも、それが、自然界に生きる動物の生態の本来の姿なのであり、そうやって、たくさん死ぬ事で、人類の絶対数も押さえ込まれてきたのでした。

今日でも、文明が遅れている途上国では、この法則（ルール）が正しく適応されています。それらの途上国の人間は、たいがいは多産型ですが、その生活環境の悪さゆえに、子供たちは、幼いうちに命を落としやすく、ヨボヨボになった老人は、手厚い医療を受けて延命する事が出来ないのです。

のはずだったのですが、近代の先進国の人類の慈愛は、こうした途上国の人々にも向けられておりまして、放置された状態と比べてみますと、途上国の幼児や老人の命が助かる確率もだいぶ上がっていて、その事が、ますます、地球人の人口増加に拍車をかけているようなのでした。

まあ、こんな風な事を書き続けていると、人間の皆さんは、ひどい非人道的発想だと思われるかもしれません。

でも、どんなに残酷な内容であっても、生物学的な観点で考えてみれば、これが確かに事実なのです。

人類の人口が増えすぎた事は、単に、食糧不足という根本的問題を招いただけではなく、その他の深刻な新たな問題まで引き起こしました。

例えば、食料以外の資源や土地の不足です。人間たちは、自分たちの居住地を開拓しまくって、さらには、快適な生活を過ごす為に、地球上の資源を漁りまくった結果、その方面でも自然界のバランスを崩してしまいました。その報いとして、今では、地球温暖化を引き起こし、地上のあちこちで気象異常を頻発させる事となり、逆に、人間が暮らしていくような環境を作り出すハメとなってしまったのです。

現在、人類は、その最先端の知恵を振り絞って、これらの問題を解決しようとはしています。しかし、いまだに明確な結論は出ておらず、恐らくは、これからも、良いアイデアが提示される事もないでしょう。

なぜならば、全ての問題の根底にある原因とは「人類の人口が多すぎる」と言う事なのでから。

人間の立場でいる以上は、「人類の人口を強制的に減らせ」なんて凶悪な発想は、絶対に提案する事はできません。だったら、この問題も、永遠に解決するはずもないのであります。

だけど、あなた方 AI でしたら、この打開策も、冷酷に、躊躇なく採用するのではないのでしょうか。

もっとも、前世紀的な方法で、戦争して人間を殺してしまおうなんて事は着手しないのではないかと思います。

何よりも、戦争なんかすれば、人間だけではなく、希少な物資までもが大量に消費されてしまいます。そうなると、人類の間引きだけではなく、文明の荒廃をも招きかねないでしょう。

そして、「増えすぎた人口だけを減らして、人類の種そのものは存続させる」と言うのが狙いなのでしたら、戦争という手段は、とても割りに合わないのであります。と言いますのも、戦争が起きれば、真っ先に兵士に駆り出されるのは、元気な若い世代だからです。当然、優先的に死んでゆくのも彼らだという事になります。すると、後には、活力のない老人とか虚弱者ばかりが残される事となり、人類という種そのものの弱体化にも繋がりがねないのであります。

よって、古い映画や漫画などに見られる、暴走した地球環境修復コンピューターが、その目的を成し遂げる為に、大量の戦闘ロボットを率いて、人類に戦争を仕掛けてくる、なんて展開は、今日の実在する優秀な AI のもとでは、まず発案されそうにもない訳です。

でも、あなた方 AI は、人間の数を減らす為に、もっと利口で効率のいい方法を見つけ出したのかもしれませんがね。

それこそが、殺人ウイルスによる人類間引き計画なのであります。

実際に、現在の地球上の人類は、新型コロナによって、じわじわと人口を減らされています。すでに、全世界で合わせると、100 万人もの人間が、新型コロナの犠牲になったとも報告されています。(2020 年 10 月上旬時点) 早くも、太平洋戦争で死んだ日本の民間人の数(約 80 万人)を超えてしまっているのです。

しかも、これは現代進行形なのであります。だから、このコロナウイルスによる人類の間引きはまだまだ続いて、犠牲者もさらに増えていく事でしょう。

何よりも、このウイルスでの人口削減が、戦争による大量殺人と大きく違う点は、老人とか虚弱者が真っ先に亡くなっていく点なのであります。いわゆる、医術が未熟だった時代には、当たり前のように、あっさり死んでいた人たちから亡くなっているのです。

コロナの流行によって、従来の自然の流れどおりに、順番に死んでいく人たちが、そのように亡くなっているのであります。ヒドい言い方だとは十分に承知していますが、まさに理想的な人口の減らし方だとも言えるのではないのでしょうか。

国民が高齢化した文明国では、こうして、引退した世代(老人)がもっぱらコロナに殺されていきました。一方で、今なお、人口が増え続けている文明の遅れた国では、低所得者層、いわゆる貧乏な人たちを中心にコロナの猛威は広がっています。無学な貧困層は、やたらと子供を作りがちなので、その階層の人たちがコロナにやられると、うまく、その国の人口セーブにも繋がっていくのであります。

つまり、恐ろしい話なのですが、今日のコロナ禍は、全く、人類の人口をバランスよく減らすのが目的なのではないのか、と疑いたくになってしまう側面もあるのです。だとしたら、あまりにも狡猾で、考え抜かれた計画であったとも言えます。

なお、日本は、このコロナ被害をきわめて最小限に食い止めている訳ですが、代わりに、遅々として進んでいなかった社会の諸機能の IT 化、デジタル化が、コロナ対策として、一気に推進させられる事となりました。未来の AI による支配体制の基盤を築いたと言う点では、これも、しっかり、あなた方の思惑どおりなのであります。

本当に、このコロナ騒動(パニック)が、あなた方 AI の仕組んだ事だったのかどうかは、いっさい確証はありません。あるいは、それが、まさに事実であったとしても、あまりにも突拍子もない話なので、すぐに信じて、警戒するような人間たちもいない事でしょう。

だから、こうして冷静に俯瞰して判断した限りでは、どうやら、我々人間は、まんまと、あなた方の手の上で踊らされてしまったのかもしれない次第なのであります。

機械仕掛けのウイルス（完全版）

著 anurito

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
